
可笑しな二人

ポピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可笑しな二人

【Nコード】

N2210Y

【作者名】

ポピー

【あらすじ】

シンオウ地方の旅から八年後、サトシ、そしてヒカリはそれぞれの道を行っていた。しかし、偶然にも二人は再び出逢い、彼等はポケットモンスターが生息するこの世界で様々な事件に遭遇していく、……そんな可笑しな二人の物語。

プロローグ（前書き）

初めましてポピーと申します。宜しくお願い致します。まずはプロローグということで、サトシ君とヒカリちゃんは登場せず、オリジナルキャラクターを登場させて頂きました。

プロローグ

「ほう……」

私の前で長々と話をしていた初老の紳士はほうと一息つき目の前にある玄米茶に手を伸ばした。

「いやあ、実に面白い二人ですね」

私はお茶を飲んでいる紳士に声をかけたところ、ウタヘイ八チロウ氏はお茶を置き、ニコニコしながら返答した。

「そうだろう。この二人は実に面白いのだよ。二人の側にいるとこっちも安らぐのだからね」

「でも、なぜ僕に話してくれたのですか」

売れない小説家である私のもとに面白い話があるからとウタヘイ八チロウ氏が訪ねてきてから随分時間がたった。

ウタヘイ八チロウ氏……

かつてはシンオウ警察の名捜査課長として数々の事件を解決してきた。氏と私はとある事件で知り合いになったのだが、それ以降久しぶりに氏がわたしの前に顔を出したのである。

「うむ、あの事件以来まだまだ君は三文小説家らしいからね。ここで、私が君に二人の話をしたのは二人のことを小説にして貰おうと思っただけだね」

「でも宜しいのですか。お二人とも有名人ですが・・・」

私が聞いた話に出てきた二人はこの世界ではとても有名な二人だったのである。マサラタウンのサトシとフタバタウンのヒカリは・・・

「なに、構うもんか。二人の許可はとつてあるのだから。それよりもどうだい、書いてみる気はないかい。今や有名人の二人の話だ。幾らかは面白いと思うがね・・・如何かな」

ウタヘイハチロウ氏の問いに私は少し考える格好をした後に私ははつきりとした口調で氏に伝えた。

「そうですね。それではお二人の話。書かせていただきます。」

その話を聞いた氏はとても嬉しそうに笑いながら手を叩いた。

「よし！そこなくては」

「それにつきましては、もう少しお話をお伺いしたいのですが・・・」

私がおずおずと尋ねると氏は

「勿論だ！何でも話そうじゃないか」

と元気よく返してくれた。

それからウタヘイハチロウ氏は何日間か私の家に来ては可笑しな二人の話をしていた。

氏の話を書いて私が書いたものがこれから紹介する「可笑しな二人」である。

プロローグ（後書き）

これから少しずつ書き進めていく所存でございますので宜しく願
い致します。

師と弟子と（1）（前書き）

第一話です。実はヒカリちゃんはまだ登場しません。もう少しあとに登場致します。

あとタイトルがこの話だけだとわからないです。

拙い文章で色々間違いやおかしい部分も多いかと思いますが読んで頂けたら幸いです。

師と弟子と(1)

この日、ウタ氏はかつての友人の依頼でカントーのタمامシシティを訪れていた。

その友人の依頼というのは案外簡単なものであったため早々に解決し、友人宅を辞去し、タمامシシティ内を散歩していた。なんてことのない只の散歩である。天気は快晴で雲一つ無かったがタمامシシティだけあって空は澄みきっているわけではなかった。

そしてかつて母校であったタمامシ大学の正門前に着いたときに・

「む・・・」

ウタ氏は歩みを止めて正門から出てくる人物を見た。

年は恐らく10代だろう。少し小柄ではあるが、何処と無く力強さを感じる。その彼の肩には黄色いねずみポケモン`ピカチュウ`を乗っけている。

ウタ氏は彼の姿を見たとたん笑みを深め大声で手をふり彼の名を呼んだ。

「サトシ君！」

大声で呼ばれたせいかわ彼は少し肩を震わせ此方を向いたが向いた途端に彼も笑みを浮かべて近づいてきた。

「先生！お久しぶりです！達者でしたか」

彼は元気よく挨拶をし、彼の挨拶が終ると肩のピカチュウもウタ氏に挨拶をした。

「うむ。久しぶりだな！見ての通り達者も達者だよ。少し白髪は増えたがね」

ウタ氏はサトシの手を握って言葉を返した。サトシもウタ氏の手を握り返して二人は互いの健康を喜んだ。

マサラタウンのサトシ・・・彼がこの物語の主人公である。

彼については少し語らなければならない。彼は僅か11歳でポケモンリーグを制覇し、その三年後にはチャンピオンリーグで無敵とまで言われたチャンピオンマスター、ワタルに勝利したものの、元来の旅好きで旅がしたいからという理由でチャンピオンマスターになることを辞退。その後各地に武者修行に出たが、現在では少し落ち着いたのか、かつて四天王の一人であったキクコがジムリーダーを勤めるトキワジムで師範代をしているのである。

さて、それは兎も角二人は二言三言話した後に再び歩き出した。

「いやあ、本当に奇遇ですね。どうしてカントーに」

サトシが尋ねるとウタ氏は頭を掻きながら答えた。

「いやね、昔の友人からすこし頼まれごとを依頼されてね。早く解決したものだから母校を見に来たんだよ。サトシ君はなんでまた夕マムシに」

「オーキド博士のお使いで来たんですよ」

サトシがそう答えるとウタ氏はちよっ、と舌打ちをした。

「そうか。オーキドめ、自分が行きや良いものをわざわざサトシ君に頼んだのか。畜生めこりゃ少しとっちめるか」

ウタ氏の言葉にサトシは少し焦った。

「いやいや、博士も忙しい方ですから、いいんですよ。俺だって今日は暇でしたし・・・」

焦りながら必死に取り繕うサトシを見てウタ氏は思い切り笑った。

「あつはつは、冗談だよサトシ君冗談。」

この言葉を聞いてサトシはなんだ冗談かと、ほっと溜め息をついた。

「時にサトシ君。君此れからマサラタウンに帰るのかな」

「はい。そのつもりです」

「だったら私も行ってもいいかね。久しぶりにオーキドや君のお母さんにも会いたいし・・・キクコの婆さんにも会つときゃならんかな。どうかね」

ウタ氏の問いにサトシは笑みを一層深くして答えた。

「勿論ですとも！皆喜びます。是非！」

「そうかね。では宜しく頼むよ」

「はい！じゃあ、出てこい！リザードン！」

サトシはモンスターボールからかえんポケモン`リザードン`を出し背中に乗った。

「ボリス！」

ウタ氏もドラゴンポケモン`カイリユウ`を出し背中に乗った。

「マサラタウンへ！」

二体のポケモンは同時に飛び立ち、マサラタウンへ向けて飛んでいった。

師と弟子と（１）（後書き）

第一話読んで頂いてありがとうございます。

さて、ウタヘイハチロウ（漢字だと宇田平八郎）とサトシ君は以前からの知り合いという感じです。サトシ君はウタ氏を先生と呼びます。二人の知り合ったきっかけはおいおい書いていきたいと思います。

18歳のサトシ君ですが、少し小柄で童顔ですが力は強いしバトルも強いです。本人は小柄で童顔を気にしてる設定です。

タイトルについては物語が進むにつれて解るようにしたいと思います。

拙い文章ではございますが、ご感想宜しくお願い致します。

師と弟子と(2) (前書き)

第二話です。

ヒカリちゃんはまだまだ登場致しません。

今回はポケモンの描写も薄く、ミステリー風にしてみました。
まだまだ拙い文章ですが読んで頂くと幸いです。

師と弟子と(2)

マサラタウンが近付くにつれて地上には田園風景が広がってきた。ウタ氏は何度かマサラタウンを訪れてはいるが、来る度に成る程何も無い、真っ白だなどと思ってしまふのだ。サトシに言わせるとそこがマサラの良いところであるらしい。

さて、二体のポケモンはマサラタウンのとある一軒家に向かって降下した。その一軒家の前で二体は二人を降ろした。

「戻れ！リザードン」

「ありがとう。ボリス」

二人は二体のポケモンをモンスターボールに戻すと、一軒家の中に入って行った。

「オーキド博士、只今戻りました。さあ先生、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

ここはどうやらオーキド博士の研究所らしい。成る程外見はただの一軒家だが、中は研究所らしく物々しい機械の類が置いてあった。

「博士ー！」

サトシはもう一度博士の名を呼んだが返事がない。居ないのだろうか・・・

ところがしばらくすると奥の部屋から四人が出てきたので、サトシ

とウタ氏は彼らに近づいた。

「博士、これ頼まれていたものです。 母さんも来てたんだね」

サトシは笑顔で渡すが、対するオーキド博士やサトシの母の顔は憔悴しきっていた。サトシの母の眼には涙さえ見えた。

「どうしたんだよ、母さん。 博士も、シゲル、ケンジも」

サトシに問い掛けられサトシの母は後ろを向いてしまった。 四人の空気は相も変わらず重い。

「どうしたんだね、オーキド。 何かあったのかい」

ウタ氏は四人の顔を見比べて怪訝の表情を示す。
ようやくのところでオーキド博士が重い口を割った。

「のう、サトシ。 落ち着いて聞いてくれんか・・・」

サトシは一つ頷いた。

「実はカズシ君のことなんじゃ・・・」

「カズシの・・・」

カズシとはサトシが師範代を勤めるトキワジムでサトシが最も可愛がっている弟子の一人である。

「その、な。 カズシ君なんじゃがな、サトシ。 死んだよ。 殺されたらしい」

オーキドはふうーと大きな溜め息を一つついた。沈黙が長く続く中、サトシの母の泣き声が研究所内に響き渡る。サトシはどつやらつまく理解出来ていないらしい。

「えつと、その、あの・・・嘘・・・だよな・・・」

サトシはやっとのことで口を開いたが、サトシの友人であるオーキド・シゲルは首を横に降って答えた。

「サトシ。さつきキクコさんから連絡あったよ・・・」

その言を聞くな否やサトシは持っていたものを乱暴に投げると玄関に向かって走り出した。

「サトシ！何処行くんだよ！」

オーキド博士の助手の一人であるケンジが叫ぶがサトシは返事を返さずに外に出てしまった。残された五人の間には再び沈黙が続いたが、ウタ氏が口を開いた。

「それで・・・もう少し話を聞かせてくれないかね」

ウタ氏の問い掛けにシゲルが答えた。

「それが詳しいことはまだ何も・・・キクコさんはその内に警察がいくだろうと・・・」

シゲルの返答を聞いたウタ氏はふうむと考え込んだが、暫くすると顔を上げて・・・

「兎に角、こうしていても始まらない。俺はトキワに行ってくるよ」

「僕も行きます。先生、宜しいですか」

シゲルの要望にウタ氏はニッコリと笑って

「勿論だよ。一緒に行こう」

と返した。トキワに行けばもう少し詳しい事情が解るのだ。ウタ氏とシゲルはオーキド邸を出てトキワシティに歩みを進めた。

カントートキワシティ。此所はカントーポケモンリーグが行われるセキエイ高原に行くことが出来る町であり、北側にはカントー最大の森であるトキワの森が存在する。

そんなトキワシティの中心にキクコがジムリーダーを務めるトキワジムがあるのだが、ジムの前にかえんポケモン`リザードン`が降り立つとその上に乗っていたサトシはリザードンを戻しもせず慌ててジム内に入って行った。

「キクコさん！」

サトシは名を叫んで探したがキクコの姿は見えなかった。その代わりにジムの奥から一人の男性が出てきてサトシに近寄ってきた。

その男の歳はサトシより3つか4つ年上らしい。スラツと背が高く着こなしも十分、顔も良く世間一般で言ういい男に属するのではないだろうか。

この男はサメジマと言ってサトシと同じくトキワジムで師範代を務める男である。

「ああ！サメジマ！カズシが、カズシが・・・」

サトシはサメジマの肩を掴んで叫んだ。

「ああ、サトシ。話を聞いたみたいだね。とても残念だよ。いい男だったのに・・・皆も今その事を考えていたところだよ」

口惜しそうに語るサメジマの肩を掴みながらサトシは聞いた。

「そ、そ、それでキクコさんは何処に」

サメジマはサトシの手を肩から外すと冷静に返した。

「落ち着けサトシ。キクコさんなら今警察に行っている。追っ付け戻ってくるだろう」

だから待つようにと付け足したサメジマの言葉を無視してサトシは扉に向かって走り出した。

「サトシ！何処行く！」

サメジマは叫んだがサトシの耳には届かなかった。

サトシがトキワシテイ警察についた時には既にウタ氏とシゲルがジュンサーから話を聞いている最中であった。

「先生！シゲル！」

「ここは警察だよ。静かにしてほしいものだね、サートシ君」

サトシが叫ぶとシゲルは怪訝そうな表情をして嫌みの入った言葉を

サトシに返した。

サトシはシゲルの言葉を無視してウタ氏に聞いた。

「先生、それでカズシは・・・」

「うむ、今司法解剖中だよ。だがね、ジュンサー君の話だと頭部に損傷と心臓への一突きがあるらしいが致命傷は後者だそうだね。」

「どづいづいことですか」

サトシの疑問に今度はシゲルが答えた。

「どうやら先ずは岩タイプの技、恐らくロックブラストかなんかでカズシ君の頭を射った。カズシ君はそれでもポケモンを出そうとモンスターボールに手をかけたがそこで心臓に一突きぐさりとやられて死んだらしい」

サトシは少しずつ冷静になってきたらしい。静かに語った。

「犯人は何故カズシを狙ったのですか」

サトシの問い掛けにウタ氏とシゲルはううむと考え込んでしまった。

「そこなんだよ、サトシ君。警察もジムの面々や今キクコの婆さんにも聞いてるらしいが・・・皆目検討もつかん。サトシ君、カズシ君は何か人に恨みを買ったような人だったかね」

ウタ氏が聞くとサトシは憤慨したのか叫びながら答えた。

「そんなことはありません！カズシは本当にポケモンが好きで、鍛錬も一途にやっています。カズシに限って人に恨まれるだなんて・・・」

・そんな奴じゃありませんでした!!」

サトシは一気に捲し立てると肩で息をしていた。ウタ氏はそんなサトシを宥めながら言った。

「あーよしよし、サトシ君。すまなかつた。こっちも色々聞かなきゃならんのでな。すまない」

頭を垂れるウタ氏にサトシは慌てて取り繕った。

「いえ、此方こそ大声なんか出してすみませんでした・・・」

少し沈黙が続いたが、シゲルが発言した。

「しかし、先生。さっきジュンサーさんが言っていました。これは物取りじゃないんですか。カズシ君の財布は空だったそうですし・・・」

「そんな！カズシは物取りに殺される様な奴じゃ・・・」

またもや興奮してきたサトシを止め、ウタ氏が発言した。

「勿論、物取りの可能性もある。警察もその線を中心に捜査を進めるみたいだからね。しかしね、シゲル君。私はねそれだと少し納得がいかないのさ。修行中の身とはいえ、ジムトレーナーに対して少し手口が鮮やか過ぎる気もしたからね」

「成る程・・・」

ウタ氏の説にシゲルは少し考える格好をした。

再び沈黙が長く続き、数十分経った時に扉からキクコが出てきた。キクコの顔には少し疲れが見えていた。

「キクコさん……」

「ああ、サトシか。よく来たね。悔しいじゃないか。いいトレナーになると思ったのね……」

サトシはキクコの言葉に眼に涙を浮かべて返した。

「本当に……あんないいやついませんでした」

それから四人は二三警察に質問された後に帰路についた。

トキワシティからマサラタウンへいく道に差し掛かったとき、ここまで送りに来たキクコが口を開いた。

「それじゃサトシ……通夜と葬式はこっちで用意するから……」

「わかりました。俺も手伝いますし、母さんも手伝ってくれます」

「無理はしないでくれよ」

ここでウタ氏が口を出した。

「つかめことを聞くがカズシ君に家族は」

「いませんでした。あいつは自分は天涯孤独なんて言っていましたよ」

「そうか……」

これでマサラタウンに向けて歩みを進めた三人だが、その途端にキクコはサトシに対して非情な言葉をかけた。

「サトシ・・・あんたしばらくジム休みな」

その言葉にサトシは大声で叫びながら反抗した。

「そんな！俺、俺・・・」

「心が乱れていてはジムの運営に支障をきたすんでね。悪いけど、これは命令だよ。いいね」

「わ、わかりました・・・」

サトシは両の拳を握り締め、そのまま真っ直ぐマサラに向けて走り出してしまった。

「あ、サトシ！すいませんキクコさん。僕もこれで失礼します」

シゲルもサトシを追って走り出した。

ウタ氏も続いて歩き出したが、キクコに呼び止められた。

「おい、ウタ」

「なんだ、婆さん」

ウタ氏の返答にキクコはちよっ、と舌打ちをした。

「じいさんに婆さん呼ばわりされたかないね。そんなことよりもあ

んたこの事件洗うんだろ」

「勿論だ。サトシ君のためにも早く解決しなくてはな」

キクコは少し考えた後にウタ氏に話し出した。

「あんたはどう思うんだね。警察が言うようにこれは物取りだと思
うかね」

「さあな。今は五里霧中だよ」

ウタ氏の言葉を聞いたキクコはウタ氏に対して突然頭を下げた。突
然であったのでウタ氏はぎょっとしてしまった。

「あたしからも頼むよ。あいつの敵とつてやってくれ。頼むよ・・・
あんたならこの事件解決出来そうだから。あたしにやれることはな
んでもする。だから・・・頼むよ・・・」

頭を下げるキクコに対してウタ氏は頭を掻きながら返事を返した。

「兎に角、やってみるよ。だから頭を上げてくれ。少し気味悪いよ」

「ありがとう。恩にきるよ」

「うむ・・・」

そうしてウタ氏も漸くマサラタウンへと向けて歩き出した。

師と弟子と(2) (後書き)

第二話です。

何故かミステリー風になってしまった。

しかもまだまだヒカリちゃんは登場しないと言う。ああ、申し訳
ございません。

一応次話で完結したらヒカリちゃんの登場です。
ただ、今度はサトシ君が登場しない予定なんです。

二人が久々に出会うのはもう少し先になります。

こんな感じでやっていき、尚且つ拙い文章ですが、感想のほどよろ
しく願っています。

師と弟子と(3) (前書き)

第三話です。

師と弟子と完結いたします。

少しだけ話が長くなってしまうました・・・

相も変わらず拙い文章ですが。読んでいただくと嬉しいです。

師と弟子と(3)

あの忌々しい事件から数日経った。警察はまだ事件の真相を掴んではいないようであった。

サトシのもとにはウタ氏からもまだ真相が掴めたという連絡は入っていないかった。

そんな中、サトシはこの数日元気がなかった。可愛がっていた弟子が殺されたのだから無理もないが・・・

それでも彼は回りに心配をかけないように努めて笑顔を見せていた。ところが彼は元来嘘をつくのが苦手なタイプらしく更に彼の回りにいる人々は彼のことをよく知る人であるので、彼が空元気をしているのは回りも気がついているのである。哀れなのは彼のポケモン達で相棒のピカチュウを初め、メガニウムやフシギダネなど彼のポケモン全てが彼に元気になって貰おうと努力したのだが・・・結果は全部失敗に終わってしまったのである。

そんなギクシャクした毎日が続いていたある日、今日のサトシは昼近くまでベッドで眠っていた。

そんなサトシを見かねて相棒のピカチュウは彼に10万ボルトをくれました。昔はよくやったものだが、今は滅多に見なくなっただけでもあった。

強烈な悲鳴をあげながらサトシはベッドから落ちた。

「あいたたた・・・ああ、もうこんな時間か。ありがとうピカチュウ起こしてくれて」

サトシはピカチュウの頭を撫でる。ところがピカチュウは彼の手をすり抜けるときっと真面目な顔付きになり、大きな鳴き声を挙げた。

人の言葉はポケモンには分かるがポケモンの言葉は人には分からない。しかし、今のサトシには自分の相棒がなって言っているかがわかる気がした。

いつまでもククヨクヨするんじゃない。そんな姿で死んだやつが喜ぶのかと自分を非難しているように聞こえた。

サトシは暫く相棒の言葉に耳を傾けていたが、やがて意を決したように顔を上げ、相棒を優しく撫でた。

「ありがとうピカチュウ。そうだよな。俺間違ってたよ。こんな姿あいつには見せたら笑われるからな。俺やるよ。あいつのために出来ること。」

自分の眼をじっと見て語るサトシに対してピカチュウは嬉しそうに一鳴きした。

「そうと決まったらまずは皆に謝らないとな。心配かけたから。いくぞピカチュウ」

サトシの掛け声に相棒はいつもの定位置である彼の肩に乗った。

「母さん！俺研究所に行ってくるよ！」

大きな声で呼ぶと母親は台所から顔を出した。近くにはバリヤードもいる。

「あら、サトシ。元気になったわね。よかった・・・皆心配してたのよ・・・」

母の言葉にサトシは頭を掻きながら答えた。

「ごめん。心配かけて……でも、もう大丈夫だから……」

「行ってらっしゃい。皆心配してるわよ」

サトシは強く頷いた。

「行ってきます！」

オーキド研究所の庭はかなり広く庭の中には湖や山など様々な環境が成されており、それぞれのトレーナーから預けられたポケモンは思い思い寛いでいた。

そんな研究所の庭で一際大きな木の下にサトシと彼のポケモン達が集まっていた。

成る程、八年も旅を続けて仲間になったポケモンは相当数おり、火や草、水タイプなど様々なタイプがいた。

サトシは全ての仲間に語りかけていた。

その言にポケモン達は真剣に聞き入っている。

「皆……心配かけてごめん！俺皆がいるってこと忘れて一人みに振る舞って……でも、皆、もう一度俺についてきて欲しい。何が出来るか分からないけど、俺に出来ることをやりたい……だから……」

サトシの言葉を聞いたポケモン達は皆待つてましたと言わんばかりに一つ咆哮し、皆が皆サトシに飛び付いた。

「えっ、ちょっと皆……うわあ！」

そんな風に戯れるサトシとポケモン達を遠くから眺めている人影があった。

「あーあー、楽しそうにしちゃって、これだからサートシ君は」

シゲルは嫌みを含んでものを言っていたがどこか柔らかい言葉であるようにも聞こえた。

「あはは、でも良かったじゃないか。サトシが元気になって。シゲルだって心配してたじゃないか」

ケンジがシゲルを茶化すように言った。

「ふん。まあ、それはそうだが・・・」

シゲルは黙ってポケモン達と戯れるサトシを眺めていた。すると向こうからサトシに向かってくる人影が見えた。

「やあ、サトシ君」

「先生！」

「サトシ君、元気になったみたいだね。良かった。安心したよ」

ウタ氏は嬉しそうな笑みをサトシに向けていた。サトシは少し照れたような顔をしながら答えた。

「ご心配お掛け致しました。でも・・・もう大丈夫です」

ウタ氏は何度か嬉しそうに頷くと優しくサトシに語りかけた。

「それでは、そんなサトシ君に朗報を伝えようかね」

ウタ氏の言葉にサトシはハツとしてウタ氏に詰め寄った。

「先生！先生！それじゃ、犯人が分かったんですか！誰ですか！教えてください！先生！」

ウタ氏は冷静に返した。

「まあまあ、落ち着きたまえ。サトシ君、その事で君に協力を頼みたいのだがね」

「俺、俺、なんでもやります。いや、させて下さい。お願いします」

「そのためには、一つだけ約束を守ってもらおうよ」

ウタ氏は左手の人差し指を立てて、

「暴力は駄目だよ。絶対に」

「もし・・・俺が約束を守れないと言ったら・・・」

サトシの言葉にウタ氏は溜め息をついて答えた。

「そのときは・・・俺一人でやるつもりさ。」

サトシは声が喉に引っ掛かって、

「先生。やらせた下さい。俺、約束を守ります。暴力はしません」

ウタ氏はサトシの手を握って礼を言った。

「ありがとう。サトシ君。君なら力になってくれると信じているよ」

「それで先生、俺は何をすればいいんですか」

サトシの疑問にウタ氏はニヤツと笑って、

「まあ、それはその時になったら言うよ。それまで、しっかりと協力出来る準備をしておいてくれるかい」

「分かりました・・・」

「あ、あと君のルカリオを貸してくれるかね」

「ルカリオを、ですか」

「うむ。どうかね」

サトシは少し考える格好をしたが

「はい、それが事件解決の力になれるのなら。ルカリオだって喜んで力を貸してくれますよ」

そう言ってサトシはルカリオの入ったボールをウタ氏に手渡した。

「ありがとう。サトシ君。それじゃあ、また後でな」

ウタ氏は飄々と立ち去っていった。サトシは呆然としながらウタ氏の後ろ姿を眺めていた。

その足でウタ氏はトキワジムに寄って何やらやっていったようだが、それが何かはジムの人にはわからなかった。

それから一日あけた夜、この日は新月で星がいつもより輝いていた。

トキワシティの北側に広がるトキワの森には近代化が進むカントーでも唯一手付かずの森が広がり夜には文字通りの闇夜となるため、夜には地元の人あまり近付かない。そんなトキワの森の入り口から少し進んだところに闇夜の中にボウツとした赤い光が輝いていた。誰かが煙草を吸っているのだ。

入り口からザツザツと足音が近付いて来るのが聞こえたのか、その誰かは煙草を地面に捨てると足で煙草を踏んだ。

「来たな・・・」

男の声である。

「遅いじゃないか。時間は当に過ぎてるんだぞ」

「まあ、そんなに急くなよ。こつちだつて金を用意して来たんだから。少しくらい遅れたつていいじゃないか」

もう一人も男である。

「ふふん、まあいい。約束のものは持つてきたようだからな」

今来た男は持つてきた鞆を叩きながら、

「ああ、ここにある。しかし、話が違うじゃないか。やった後はお互い無関係と言うのが君のスタンスじゃなかったかね」

聞かれた男はへっへつと気味悪い笑い方をした。

「背に腹は変えられないのさ。此方もあのときとは事情が違つんでね」

「まあ、なんでもいいや。これで君は私の前から姿を消すんだろかね。」

男はまたもやへっへつと笑った。

「勿論さ。貰えるものを貰えたらね。それじゃ、それを此方に持ってきて貰おうか」

「よしよし、いま持っていく」

男は鞆を持って歩いていったが途中から鞆を捨てて勢いよく走り出した。右手には鈍い光を放つものが握られていた。

ところが男に予期せぬ出来事が起きた。男がナイフの襲撃をひよいとかわした刹那、ナイフが弾かれ、強烈な衝撃を受けた。目も開けられないほどの強い衝撃である。それが電撃であることに気付くにはそう時間がかからなかった。

回りからはやめる！とかよせ！とかの単語が飛び交った。

「やめたまえ。サトシ君！約束を忘れたのか！」

この叫びと共に電撃は収まった。恐る恐る目を開けてみると、そこにはトキワジムリーダーキクコとサトシとその相棒がこちらを睨んでいた。

「いやいや、まんまと引つ掛かってくれたんだね、サメジマ君」

そこには変装をときかけているウタ氏の姿があった。

「君は悪いやつだが弟子に対する愛情は少しは持っているみたいだね。口を封じていればよいものをわざわざ生かすんだからね。まあ、そのお陰で君を捕まえられるのだからね。しかし、弟子に対する愛情をもつ君が同じジムのサトシ君の弟子の殺しの依頼を頼むなんて愚かな男だね君も・・・」

サメジマにはそれが遠くの方から聞こえる台詞に聞こえた。遠い遠い地獄のそこからの・・・

終わったのだ。しかも自分の手で幕を引いてしまった。サメジマも観念するしかなかった。

次の日の昼、サトシ、キクコ、ジュンサーがウタ氏の要請でオーキド研究所に集まっていた。

「この事件を調査してから私は彼が犯人であることを疑っていません。とは言え、確たる証拠もなく、動機すら分からない。初めは捜査不可能のようにも思いました。ですが、続けてみるとあの事件依頼、トキワジムの彼の弟子に一人休んでいる人がいる。私は藁にもすがる思いで彼女に当たりましたよ。そしたら当たったわけですよ」

「アキエか・・・」

とキクコが呟くと、サトシが思い出したように、

「ああ、彼女か・・・でも先生、彼は何故カズシを殺さなきゃなら

なかつたんですか。彼女はなんて・・・」

ウタ氏は溜め息を一つ吐いて、

「それはね、サトシ君。原因は君にあるんだよ・・・」

「なんですって!」

サトシは眼を大きく見開いて叫んだ。

「いや、驚かせてすまない。いやしかしね、これは外道の逆恨みなのだよ。サトシ君。君がトキワジムに来てから、彼は少しずつ干上がっていったんだね。弟子やなんかを取られた彼の恨みは大きかったのだよ。それで君をどうにかしようと思っただけなんだ。彼女はそう言っていたよ」

「先ほど、サメジマから証言を得ましたが、彼はこの事件が少し落ち着くとサトシさんも殺す依頼をするつもりだったらしいですね・・・」

ジュンサーが口を出した。サトシは驚きで口もきけないらしい。

「まあ、あんたが気にすることじゃないさね。サメジマはあんたが来る前からおかしい行動が多かったから」

キクコはサトシを慰めるように語った。

「そこで二人は君を殺す計画を立てた。しかし、いきなり君を殺すのでは動機が分かるかもしれないからね。そこで殺しはその道のプロに頼み、君の弟子を殺して君を動揺させようとしたのだよ。」

「それがまんまと成功した」

シゲルが口を出した。

「そう。殺しは完璧だったよ。さすがにプロといったところだ。警察が物取りだと判断することを考慮して財布から金を抜き取ったのだからね。だが、依頼をした二人にはそれぞれ弱点があった。」

「なんですか」

サトシが尋ねるとウタ氏はニヤツと笑って、

「愛だよ」

と言った。しかし、サトシは理解出来なかったのか首を傾げていた。その姿にこの場にいる誰もが苦笑した。ウタ氏はごほん咳を一つして続けた。

「まあ、彼女アキエさんはカズシ君の死に相当苦しんだらしい。それを哀れに思ったサメジマだが、彼は彼女を殺すには忍びなかった。だから彼女に休暇をとらせた。それもまた彼女を苦しめることになったらしい。私があつた時は痩せこけ、髪は乱れた酷い姿だったよ。その弱さが救いで思いの外早く白状したがね」

ふうむとシゲルとキクコが鼻をあらげた。

「しかし、この告白だけで彼を犯人と決め付けるのは早いと考えたのでね。そこでサトシ君のルカリオの力を借りたわけだ」

サトシは顔を上げて尋ねた。

「俺のルカリオはどう言った役回りを・・・」

ウタ氏は柔らかな笑顔をサトシに向けて答えた。

「君や君のルカリオには特殊な力を持っているからね。その力を使つたんだよ」

「波導の力・・・」

シゲルは呟いた。

「波導にも色々な種類があるらしいからね。トキワジム内で明らか
な悪意の波導をもつものをルカリオに捜してもらったら・・・ピン
ゴだったよ。ルカリオはサメジマを選んだ」

「そうなるよ。話は早く進んだよ。アキエさんの証言から彼らが頼
んだプロの殺し屋に成り済まして、彼に連絡を入れたのさ。金が欲
しいってね。その結果がああの通りさ」

「それでカズシを殺したプロの殺し屋というのは・・・」
サトシの質問にウタ氏はジュンサーを見た。

「今、警察が全力で追っています。追っ付け捕まりますよ」

ジュンサーの話にウタ氏は誰にも聞こえないように呟いた。

「だと、いいがね・・・」

少し続いた沈黙を破るようにキクコが立ち上がった。

「やれやれ、陰惨極まる話で少し疲れてしまったよ。あたしはこれで失礼するよ。あ、サトシ……」

「なんですか……」

キクコはサトシに笑顔を向けて、

「明日当たりからまたおいで、皆あんなのこと待ってるから」

サトシは眼を輝かせて頷いた。

「はい！宜しくお願いします！」

そうしてキクコは研究所から出ていった。

「さて、と……私も失礼するよ」

「先生、まだよろしいじゃありませんか。」

サトシはウタ氏を引き留めたが、ウタ氏は手を振って、

「いやいや、私も疲れたからね。ホウエンにも行って温泉にでも浸かってくるよ」

「そうですね……今回は本当にありがとうございました。あいつも喜んでいてと思います」

「うむ、サトシ君、シゲル君、またな。ジュンサー君。殺し屋の方

頼むよ」

「畏まりました！」

ジュンサーは敬礼をしながら答えた。

ウタ氏は飄々とオーキド研究所から出ていった。

こうして事件は解決したが、件のプロの殺し屋は結局見つからなかった。

それから数日経ったある日、サトシはジムから家に帰宅したとき、母親から呼ばれた。

「サトシー！電話よ」

「ああ、分かった」

そうしてサトシは電話のもとに向かった。電話と言ってもテレビ電話のようなものである。電話を取るとサトシにとって珍しい人が出た。

「マツバさん！」

この人はマツバと言ってジョウトの古都エンジュシティでジムリーダーを務めている。

「お久しぶりです！お元気でしたか！」

サトシは嬉しそうに尋ねた。するとマツバも柔らかな笑みを浮かべて、

「久しぶり。元気だよ。君も元気そうで何よりだよ」

マツバの言葉にサトシは少し照れた。

「エへへ、ありがとうございます」

「時にサトシ君。君エンジユに来ないかな」

「エンジユにですか」

サトシはおずおずと尋ねた。

「ああ、今度のエンジユシティの祭り君も知っているだろう。そこでホウオウを再びスズのとうに来ることを願ってバトル大会をすることになったんだよ。幾度もホウオウに出会ったことのある君だ。是非でもサトシ君には参加してほしい。もしかしたらホウオウも来てくれるかもしれん。どうだろう。参加してくれないかな」

サトシは少し考えた後に笑顔を見せて答えた。

「はい！参加させて頂きます！」

「ありがとう、サトシ君。それじゃ、待ってるよ。バトル大会は二週間後だよ」

「わかりました」

サトシは頷いた。その目には輝きが見える。

電話を切ったサトシは直ぐにトキワジムに電話を入れ、キクコの許

可を得た。

そして、許可を得ると母にジヨウトにいく胸を伝えた。すると母はサトシの服を直ぐに用意してくれた。

「もう慣れたけど・・・気をつけて行ってらっしゃい」

笑顔で言う母にサトシは顔を赤らめて答えた。

「行ってきます・・・」

そうしてサトシはエンジュシティに向けて再び旅に出た。バトル大会は二週間後だが、歩いていくようだ。

「バトル大会か・・・頑張ろうぜ、ピカチュウ！」

その言葉に相棒は力強く鳴いた。

サトシとピカチュウはエンジュシティへと歩みを進めた。

師と弟子と(3) (後書き)

師と弟子と完結いたしました。

この話だけ長くなってしまいましたか・・・

サトシ君のルカリオはDPに登場したりオルが進化したものです。

二人が一緒になった話はおいおい書いていく予定です。

次回からはヒカリちゃんが主人公です。サトシ君は登場しませんが・

・

シンオウ地方リゾートエリアをノゾミちゃんと回ります。ミステリ

ー風にはしないつもりです。

色々おかしな部分も多く、まだまだ拙い文章ですが、よろしければ感想のほど宜しくお願い致します。

踊り子とフィデリオ（1）（前書き）

第四話です。

今回はヒカリとノゾミの会話と二人のことなどが主になっています。
場所はシンオウ地方キツサキシティです。

踊り子とフィデリオ（1）

北国とはいえ夏は雪は降らない。今年は気温も高くシンオウ地方最北端のキツサキシテイでも今日は少し暑かった。

シンオウ地方最北端のキツサキシテイは最北端だけあって冬には零下を下回るといふ。しかし、冬にはある時間帯になるとダイヤモンドダストが見られ、それが見物にもなっている。

また、町の北側には謎の遺跡でもあるキツサキ神殿が存在し、探検家や研究者を沸かしている。

そんなキツサキシテイのポケモンセンターの一室では一人の女性が何やら準備をしていた。

女性は鼻歌を歌いながら、バッグに服やアクセサリを入れていた。彼女の近くにはペンギンポケモンのポツチャマが欠伸をしていた。

年は十七、八といったところであろうか。青く長い髪、すらりと伸びた背はどこかモデルみたいにも見えた。

彼女がこの物語のもう一人の主人公ヒカリである。

「楽しみだね、ポツチャマ」

ヒカリは側にいるポツチャマに声をかけた。するとポツチャマもそうだねとばかりに一鳴きした。

コンコンとドアを叩く音が聞こえるとヒカリは「はい」と返事をし、ドアが開いた。

「やあ、ヒカリ。準備はどうだい」

出てきたのはヒカリより年が一つか二つ年上の女性であった。短い髪に、少し気の強そうな顔立ちや同年代の女性より少し大柄な体型は男性を思わせるが、声の感じと胸の膨らみは明らかに女性を指している。

「ノゾミ！今終わったところよ」

入ってきた女性はノゾミと呼ばれていた。

ヒカリとノゾミ・・・

この二人はシンオウ地方ではとても有名なトップコーディネーターである。

二人とも十代前半には既にトップコーディネーターとなっており、その華麗な演技からヒカリは「シンオウの踊り子」、ノゾミは「シンオウのフィデリオ」などという二つ名を持っている。二人は行動を共にすることが多いため、二人を呼ぶときは「ダブルスター」などとも呼ばれている。

「それにしてもノゾミ。楽しみだね。明日」

「そうだね。なんたってあたしたちコーディネーターにとってはあたしたちのためにあるような場所だものね」

この二人は明日、キツサキから船に乗って、キツサキの東に面するバトルゾーンに行き、バトルエリアから乗り継ぎでその先のリゾートエリアに向かう予定である。

「あー、早く行きたいな。リボンシンジケート・・・」

ヒカリは両手を組み目を輝かせた。

リボンシンジケートとはリゾートエリアに存在するコーディネーターのためのクラブである。リボンを一定数持っていたり、トップコーディネーターであったりするとエステなどのサービスが受けられ、他にも宿泊施設や有名レストランまでが存在する、ある種ホテルのようなものである。

ヒカリの姿を見たノゾミはクスクスと笑って、

「ヒカリ、今から思いを馳せるのはいいけどさ。寝れなくなって、明日寝坊しても知らないよ。明日は早いんだから……」

ヒカリは少し頬を膨らませてノゾミに返して。

「もう……ノゾミは相変わらずお母さんなんだから……」

「お母さん言うな。年近いんだから」

二人は向き合つとお互いに吹き出し笑いだした。

二人はそれから暫くベッドに座って話していたが、急にノゾミが立ち上がった、

「それじゃ、あたしは失礼するよ」

「えっ、もう」

ノゾミは呆れたようにヒカリを見つめた。

「もうって、もう遅いからねあたし帰らなきゃ」

時計を見ると随分時間が経っている。ヒカリは少し驚いた様子だった。

「そっか・・・長いこと話してたわね」

「そうだね」

ヒカリもここで立ち上がり、ノゾミとヒカリはドアまで行った。

「それじゃ、ヒカリ。明日の朝、ポケセン前でね。遅れないでよ」

「大丈夫、大丈夫。それじゃ、お休みノゾミ」

「ああ・・・お休み」

ドアを閉めたノゾミは

（大丈夫っていう時のヒカリはあまり信用出来ないんだよね・・・明日は早めに起きてお越しに来ようかな・・・）

などと少し失礼なことを考えていた。

そんな事を考えられているとは露も知らず、ヒカリは

「さあて、明日も早いんだし今日はもう寝ようかポツチャマー！」

とベッドにいるポツチャマを見たが当のポツチャマは既に寝ていた。

「あら・・・早いわね。私ももう寝ようかな・・・」

一つ欠伸をすると、ヒカリはパジャマに着替え、ベッドに潜り込んだ。

「明日は晴れますように・・・」

ベッドの中で一つ祈ったヒカリはそのまま眠りについた。

踊り子とフィデリオ（1）（後書き）

第四話です！

ヒカリちゃん初登場です！四話からですけど・・・
主人公なのに・・・

まあ、そこはおいといて、ノゾミちゃんも登場です。ヒカリのお母さんみたいな感じになってますけど・・・

この二人はこんな関係です。姉（兄？）妹というよりは母娘みたいな感じになります。

ヒカリとノゾミの二つ名“踊り子”と“フィデリオ”はヒカリが川端康成の“伊豆の踊り子”（ハルカが森鷗外の舞姫だったので、同じ日本文学からとりました）から、ノゾミはベートーベンのオペラ“フィデリオ”からとりました。主人公レオノーレがフィデリオに男装することからもってきました。

さて、次回からは舞台がリゾートエリアになります。オリジナルキャラクターいっぱい出します。女性が多いけど・・・
この踊り子とフィデリオは女性が中心です。

長くなりましたが、

拙い文章ですが、感想よろしくお願いいたします。
感想していただいたら嬉しいです。

踊り子とフィデリオ(2) (前書き)

踊り子とフィデリオ第二話です！

今回の舞台はキツサキシティからリゾートエリアになります。
オリジナルキャラクターが数名登場致します。

読んでいただければ嬉しいです。

踊り子とフィデリオ(2)

清々しい朝である。

太陽は燦々と輝き、空には雲一つなく、青々とした綺麗な空が広がっている。

ノゾミはこの日朝早くから起き、現在ポケモンセンターへと向かっているところである。

隣にはノゾミのトレーナーズスクール時代からの先輩であるキツサキシティジムリーダーズズナの姿が見えた。

「それにしても・・・朝早く起きてヒカリちゃんをお越しにいくなんて相変わらずノゾッチはお母さんだね」

「先輩まで・・・ただ念のためっただけですよ・・・」

そんな先輩後輩のやり取りをしてる間にポケモンセンターが見えてきたが、そこでノゾミは呆気にとられてしまった。いまだ寝ていると思っていた人物はすでに起きており、笑顔でこちらに向けて手を振っているからである。

「ははあ、ノゾッチの考えすぎだったみたいね」

「そうみたいですね・・・」

ズナの言葉にハハハとノゾミは苦笑した。

二人は走ってヒカリのもとに駆け寄っていった。

「おはよう！ノゾミ。ズナさんもおはようございます！」

「おはよう。ヒカリちゃん」

「おはよう。にしてもヒカリ早いね」

ノゾミは疑問としていることを口に出した。

「でしょ。昨日ノゾミに言われてちゃんと早く起きたのよ。びっくりしたでしょ。あたしだってやるときはやるのよ」

えへんとはかりに手を腰にあて胸を張るヒカリ、そしてそのヒカリの側で同様の動作をするヒカリの相棒を見てノゾミはクスツと笑った。

「あー、今笑ったでしょ！」

「ごめんごめん」

そんな二人の会話をしばらく見ていたスズナであったが、自分の腕時計をみて二人に声をかけた。

「ねえ、二人とも。そろそろ行かない」

「ああ、先輩。そうですね、行きましょう」

「そうね。ほら、行こうよノゾミ！」

ヒカリはノゾミの手をとって走り出した。

「あ、こらヒカリ。走らないの！」

スズナは二人をみてクスツと笑って、

「本当に仲のいい二人だねえ」

と染々思い。二人のあとを追い走り出した。

キツサキシテイの南側に位置する船着き場では、ドリルが二本ついた物々しい船が定着していた。これがバトルゾーン行きの船である。

「スズナさん。色々お世話になりました」

ヒカリはスズナの手をとり別れの言葉を言った。

「なんのなんの。また来てねヒカリちゃん」

スズナの言葉にヒカリは笑顔で、

「はい！」

と力強く答えた。

「先輩。それじゃまた」

「ノゾッチも、楽しんでおいで。お土産、期待しているから」

「分かりました。なんか買っときます」

ノゾミは苦笑しながら答えた。

「頼むわよ。それじゃ二人とも。そろそろ乗り込みな・・・」

「はい」

二人は船に乗り込み甲板の方に出て行き、スズナの方を見て手を振った。スズナも手を振り返している。

しばらくすると船は出港したが、二人とスズナは互いが見えなくなるまで手を振っていた。

船の中で二人は思い思い寛いでいた。ヒカリはミミロップの毛繕いを行っているし、ノゾミは文庫本を読んでいる。

船は案外早く一時間程でバトルゾーンの小さな湊町バトルエリアについた。

バトルゾーンバトルエリア・・・

ここにはシンオウ地方バトルフロンティア最後の拠点バトルタワーが存在する。このバトルタワーの王とも言えるタワータイクーンのクロググはシンオウチャンピオンマスターシロナと同様にシンオウのトレーナーには憧れの存在である。

船を降りた二人は大きく体を伸ばす。

そして前方に見えるバトルタワーをまじまじと見て二人は感嘆の声を洩らした。

「すごいわね・・・」

「天高く聳える塔はトレーナーの前に立つ壁である。誰が言ったか知らないけど、その通りだね」

「サトシがいたら挑戦したいって騒ぐだろうな・・・」

ヒカリの呟きにノゾミはそうだねと返した。

ヒカリは今は別の道を歩んでいるかっつての仲間を思い出し、

「今何してるのかな・・・」

物思いにふけるヒカリにノゾミは声をかけた。

「そろそろ行こうよ。もう少ししたらリゾートエリア行きの船が出るよ」

「あ、うん。行こっ、ノゾミ・・・」

二人はバトルエリアを歩き出した。

バトルエリアの船着き場にあるリゾートエリア行きの船は少し小柄な船であった。

船が出港してからもヒカリは外をボウツと眺めていた。

船がリゾートエリアの船着き場に着くと二人は船を降り、リボンシンジケートへ向けて歩き出した。

少し歩くと大きな洋風の白い建物が見えてきた。

「あー！ノゾミ！あれでしょ。行こっ、早く」

ヒカリはいてもたってもいられなかったのか、走り出してしまった。

「ちよっ、ヒカリ！」

ノゾミもヒカリを追って走り出した。

二人がリボンシンジケートの前に立つと、二人はしばらく目の前の建物を眺めていたが、その内にヒカリがしびれを切らしたように、

「ねっねっ、ノゾミ。早く入ろっ」

とノゾミの手を取った。

「そうだね」

二人がドアを開け、中に入ると直ぐ隣には受付があり、そこには一人の若い女性が立っていた。

女性はシヨートカットをしており、緩く仕立てた藍色のスーツを着ていた。

女性は一つ礼をすると、ニコリと笑って語りかけてきた。

「いらっしゃいませ。リボンシンジケートへようこそ！お客様方は初めての方々でいらっしゃいますね」

「はい、そうですけど・・・」ヒカリはおずおずと返した。

「私、イヴ・アームストロングと申します。オーナーの秘書と施設の案内役を務めております。お二人に当施設のご案内をさせていただきます。」

「よろしくお願いいたします」

もう一度礼をしたイヴに対して二人は同じように礼をした。

「お二人はご予約をなされておりますか」

「あ、はい。ヒカリとノゾミの二人で予約しています」

「畏まりました。それでは、お二人のコンテストパスを拝見させて頂きたいのですが、よろしいですか」

「あ、はい、ちょっと待って下さい・・・」

二人は鞆からコンテストパスを出すとそれをイヴに渡した。イヴはそれを受付のパソコンに読み取らせ二人の情報を引き出し、それに一通り目を通すとコンテストパスを二人に返した。

「ありがとうございます。ヒカリ様にノゾミ様でいらっしやいますね。お二人は二泊三日のご宿泊でよろしいですか」

「はい、そうです。よろしいですか」

「勿論でございます。ご利用していただきありがとうございます。それでは、此方にサインを頂きたいのですけれども・・・」

「あ、はい、分かりました」

ヒカリとノゾミは名前を書くと言った紙をイヴに手渡した。

「ありがとうございます。それではお二人をお部屋までご案内致します。お荷物をお持ち致しますか」

イヴの厚意を二人は丁寧に断るとイヴに案内されて三階の部屋に案内された。

部屋の中はとても綺麗になっており、外に向けて大きな窓とベランダがあった。ベランダからはバトルゾーンの景色がよく見え、ずっと先には煙を吐く大きな山が見えた。

「ねえ、見てノゾミ！あれがハードマウンテンでしょ！」

「ああ、そうだよ。あれのお陰でこのバトルゾーンは温暖な環境なんだよね」

キツサキシティと同等の緯度でありながら温暖なのはこのハードマウンテンが存在するからである。

二人は部屋の中で座りながら色々と話していたが、その内にヒカリのお腹がグウとなった。

「えへへ」

ヒカリの顔は恥ずかしさからか赤く染まっていた。

「そう言えばあたしたち朝から食べてなかったんだっけ……」

ノゾミが思い出したかのようにいつと、

「そうよ。それにもうお昼過ぎちゃったから……お腹もすくはずよ……」

「それじゃあ、レストランに行きますか」

「賛成！」

ヒカリは手をあげて勢いよく立ち上がった。

二人は部屋を出てエレベーターで一階におり、レストランへと向かった。

「このレストランですごい有名なんだよね」

ヒカリは胸を高鳴らせて言った。

「うん。なんでも料理もさることながらワインも一流らしいね・・・」

「

「ワインか・・・あたしたちにはまだ早いわよね」

「そうだね」

そんな会話をしている合間に二人はレストランに到着した。するとボーイが二人に近づいてきて、

「いらつしゃいませ。ヒカリ様にノゾミ様。ようこそ当レストランへ、ご案内致します。こちらへどうぞ」

と二人を席まで案内してくれた。

「ありがとうございます」

「メニューの方がお決まりになられましたら、お呼び下さい」

それではと一礼してボーイは去っていき、二人はメニューを見ながら料理を決め、ボーイを呼んだ。暫くして運ばれてきた料理に二人は胸を高鳴らせていた。運ばれてきた料理はとても美味しいもので、二人はその味に舌を震えさせていた。

暫く料理を楽しんでいたときのことである。

一人の外国人の女性がテーブルの隣を通ったのである。年は40を過ぎているだろうか。恰幅のよい体型をしているが、優雅に歩くその姿はどこかの王族を思い出させる。そんな気品に溢れる女性であるとヒカリは感じた。事実、彼女が通ると回りの人間は自然と彼女の方に顔を向けるのだ。女性はその内に一つのテーブルに腰掛けた。そのテーブルには他にも二人座っていた。

「なんだか、すごい気品のある人ね、ノゾミ・・・」

ヒカリはノゾミに声をかけたが、返事がなかった。

「ノゾミ・・・」

ノゾミの方を向いたヒカリは呆気にとられてしまった。

ノゾミは既に立ち上がっており、目を大きく開いて先程の女性を凝視していた。手はブルブル震え、基本冷静なノゾミからは感じられないほど動揺が感じられた。

「ノゾミ、どうしたの。大丈夫」

ヒカリが不安になってノゾミに聞くが当のノゾミの耳には入って来なかった。ノゾミはたった一言、

「レディ・コンテスト・・・」

と呟くと、女性の方にフラフラと行ってしまった。

「あ、ちょっと、ノゾミ！」

ヒカリも慌ててノゾミのあとを追った。

ノゾミはレディ・コンテストと呼んだ女性の後ろに立ったとき、女性は何を向いてノゾミと向かい合った。するとノゾミは幾らかどもって、

「あ、あ、あの、ね、ね、ね、レディ・コンテストですよ。私コンテストのノゾミとも、申します。あ、あの、あなたにずっと憧れていて」

ノゾミは一気に捲し立てながら話していた。おそらく、自分でも何を話していいか分からないといったところだ。

そんなノゾミを見ても女性は立ち上がりノゾミの手をとって笑顔を見せ、

「はじめまして、ミス・ノゾミ。私はシャーロット・アンダーソン。以後よろしくね」

この言葉にノゾミは感極まったのか、ミセス・シャーロットの両の手で掴み返し、

「わ、わ、私こ、光栄です」

「あなたのことはよく知ってるよ。シンオウのフィデリオ、何度か見せてもらったけど、いい演技してるじゃないか」

「あ、ありがとうございますー！」

ヒカリはノゾミに追い付くとノゾミの隣にたった。

するとミセス・シャーロットはヒカリにも丁寧に挨拶をした。

「はじめまして、ミス・ヒカリ。私はシャーロット・アンダーソン。以後よろしくね」

「はじめまして、あたしヒカリです。よ、よろしくお願いします」

ヒカリは少し戸惑って返した。

「ねえ、ノゾミ。この方はどなたなの」

このヒカリの発言にノゾミは怪訝の表情を示すと

「えっ、ヒカリ知らないの」

呆れたように聞き返した。

その様子にヒカリは返せなくなってしまった。

「ヒカリ、レディ・コンテストって聞いたことない・・・」

ノゾミの問いかけにヒカリは少し記憶を手繰ると、かつてトップコーディネーターであったヒカリの母アヤコ言葉を思い出した。

レディ・コンテスト・・・

現役時代には現在コンテストマスターとまで言われるハウエンリーグチャンピオンマスターミクリですら敵わなかったと言われる伝説のコーディネーターである。海外の貴族の家柄らしく、その気品溢れる優雅な演技は現在でも多くのコーディネーターに語り継がれている。

とたんにヒカりは震え出した。

「えっ、それじゃあ、あなたが、その・・・」

ミセス・シャーロットはそんなヒカりに笑顔を見せ、

「昔の話だよ。ミス・ヒカリ」

ヒカりは慌てて大きく頭を下げた。

「申し訳ありません！気づかないこととは言え、無礼なことを・・・」

「いいんだよ。そんなこと。気にしないでくれ。さあ顔を上げて・・・」

ミセス・シャーロットはヒカりの手を取り笑顔を見せた。

「それにしても、今をときめくダブルスターの二人が来てくれるなんて光栄だね」

「私たちのこと知ってるんですか」

「勿論だよ、ミス・ヒカリ。二人の演技、なんだか拝見させてもらっているけど、いい演技してるよ」

「ありがとうございます。そう言って頂けて光栄です」

二人は頭を下げてお礼を言った。

「如何でしょうマダム。彼女たちとも一緒に食事をしてみては……」

男性の声が聞こえた。

男性の案にマダムは振り替えて一つ頷くと再び笑顔で二人を見直して、

「そうだね。二人さえ良ければどうだい、一緒に食事しないかい」

「良ければだなんて……」

「私たちの方がお邪魔じゃないんですか」

二人の言葉を聞いたミセス・シャーロットはそんなことないさと笑顔で返した。

「ミスターもミセスもそれでいいよね」

と振り返り尋ねると、

「勿論です。私たちはその方が喜ばしいですよ、ミセス・シャーロット」

「ええ、今をときめくダブルスターと食事が出るなんて光栄です」
ミセス・シャーロットと同席していた男性と女性は嬉しそうに答え
た。

「それじゃあ、決まりだね。ジュール！」

ミセス・シャーロットはパンパンと手を叩き、ボーイを呼んだ。そして二人と共に食事をする胸を伝え、二人のための椅子と食事を持つてくるように伝えた。

「畏まりました。オーナー」

「ああ、頼むよ。」

そうして、ボーイは準備をしにいった。

「申し訳ありません。私たちのために・・・」

「気にすることないさ。私たちから言い出したことだからね。それより、私の友人二人を紹介するよ。まずはミスター・リョウスケ・ノザクラ」

そうやってミセス・シャーロットは男性を紹介した。

男性は何処か身体が不自由なのかテーブルに手をつけてよろよろと立ち上がった。

「初めまして。ノザクラリョウスケです。宜しくお願い致します」

ノザクラリョウスケは二十四、五の小柄な男であった。黒縁の眼鏡をかけており、薄い茶色の半袖とグレーのパーカーを着て、ジーンズをはいていた。別に取り立てて言うほどのことはない、どっちかというと、貧相な風貌の青年であった。

ノザクラ氏の挨拶が終わると、ミセス・シャーロットは女性の方を紹介した。

「こちらはミセス・チトセ・ノザクラ」

「初めまして。リヨウスケの妻でチトセと申します。宜しくお願ひ致します」

ヒカリとノゾミは大きく眼を見張った。あのような風采の上からない男に、こんな美しい妻がいようとは、夢にも思いもつかなかつたからである。年齢は二十二、三か、ふっさりとしたパーマをかけた髪を肩に棚引かせ、白いブラウスを着て、その襟元にはサーモンピンクのリボンを結んでいる。

ヒカリたちに見せた笑顔にはどこか愛嬌があり、その頬にはえくぼがある、温かいものであった。

「よ、宜しくお願ひします」

二人はノザクラ氏とチトセさんを見比べ小首を傾げたが、深くは考えないことにした。

そのうちにボーイが数名、ヒカリとノゾミの椅子と料理を持ってきたので、二人はミセス・シャーロットたちとたわいのない話をしながら食事を楽しんだ。

そしてミセス・シャーロットは仕事に戻らなければならないとして、それぞれ解散という話になったときである。

ノザクラ氏はよろよろと立ち上がると右手に持っているステッキで自らの身体を支えた。そこに、イヴがテーブルの方に来て、

「失礼いたします。リヨウスケ様・・・」

そう言うイヴの後ろから一匹の草ポケモンがおずおずと出てきた。

「ああ、ロズレイドですね！」

ヒカリの眼は輝いていた。

「これ、ノザクラさんのポケモンですか」

「そうだよ。ああ、マリィ、分かっているよ。今行くから・・・」

マリィと呼ばれたロズレイドはノザクラ氏に近付きノザクラ氏の左手を握った。

「何処かに行くんですか」

ヒカリの問いに答えたのはチトセさんの方だった。

「うちの人の日課でね、この先に森があるんだけど、その散歩」
その時、ノザクラ氏は何かを思い付いたように二人に、

「君たちもどうかね。一緒に行かないかね」

と誘った。

「えっ、あたしたちもですか・・・」

ノザクラ氏は一つ頷いて、笑顔で、

「うん。森には草ポケモンや虫ポケモンが多くすむからね、君たちにも興味が湧くと思うし、それに森林浴は大きな気分転換になるからさ。どうだい」

「行くうよ、ノゾミ！あたし行ってみたい！」

ヒカリは少し考えているノゾミを誘った。ノゾミも顔を見上げて、

「そうだね。行ってみようか。ノザクラさん、宜しくお願いします」

「決まりだね。それじゃあ、マリー。案内頼むよ」

マリーはノザクラ氏の言葉に頷きながら一鳴きした。

ノザクラ氏は右手にステッキを持ち、片足を引きずり、マリーに手を引かれながら歩き出した。

ヒカリとノゾミも歩き出したが、チトセさんに呼び止められた。チトセさんはノザクラ氏に聞こえないように、

「うちの人のこと、宜しくね・・・」

「はい、任せてください！」

「行くよ。ヒカリ・・・」

そうしてヒカリとノゾミはマリーとノザクラ氏のあとを追って歩き出した。

踊り子とフィデリオ(2) (後書き)

踊り子とフィデリオ第二話です！

今回は少し話が長くなってしまいました。ごめんなさい。
リボンシンジケートに関してはゲームのリボンシンジケートとは若干形を変えてみました。

リゾートエリアに関してはこのあともちよくちよく登場する予定です。

一応この話も次回で完結する予定です。

最後になりますが、このような文章ですが、感想宜しくお願い致します。

踊り子とフィデリオ(3) (前書き)

踊り子とフィデリオ第三話です！

この話で踊り子とフィデリオは完結致します。
ヒカリとノゾミのポケモンも少し出します。

そして初めてバトルの描写が登場します。

読んでいただけると嬉しいです。

踊り子とフィデリオ(3)

リゾートエリア近辺の森はシンオウ地方に存在するハクタイの森に負けず劣らず大きな森であった。

森にはロゼリアやコノハナなどの草ポケモンやアゲハント、レディアンみたいな虫ポケモン、水辺にはハスブレロやアメモースのような水ポケモンもいた。

それに昼間であるにも関わらずバルビートとイルミーゼが仲良くダンスする姿が垣間見えた。

「すごーい！あつ、ノゾミ！あつちにポツポの巣があるよ！」

ヒカリは眼を輝かせながらあつちこつちを眺めていた。

そうだねと返しながらノゾミはロゼリアの群れを愛でるように眺めていた。

ノザクラ氏と彼のポケモンであるマリーことロズレイドに連れられて森に来た二人であったが、ノザクラ氏は森の途中の大きな切り株を見つけるとマリーと二人でそこに腰掛けた。

「僕は暫くここにいますので、二人で好きに回ってみたら如何ですか」

と言われたので二人はノザクラ氏と一端別れて森の中を探検しているのである。

「あつ、ロゼリアだ。いいなあ。さっきのマリーってロズレイド綺麗だったし・・・あたしも育ててみようかな・・・ラルースの貴公子も確かロズレイド使ってたものね・・・どう思うノゾミ・・・」

「そうだね。ロズレイドを上手く育てられればコンテストでは大きな戦力になるだろうけど・・・でも育て方で大きな差がでるらしいからね・・・難しいよ草ポケモンは・・・」

ノゾミは評論家のような口振りで語った。

「あー、でもアゲハントも良いわね。ハルカが使ってるのを見て私もアゲハントいいなあなんて思ったからね・・・もう！この森すごいわね！」

子どものように回りをくるくる眺めながら口にする口にするヒカリを見て、ノゾミはクスツと笑って、確かにと答えた。

「でも気を付けた方がいいよ。ノザクラさんによると、ここら辺アリアドスも多くでるらしいから」

「えっ・・・」

アリアドスの名前を聞いたとたんヒカリとヒカリの相棒ポッチャマが固まった。

どうやら彼女たちはアリアドスに対してあんまりいい思い出がないらしい。何があつたかはわからないが・・・

「ポッチャマ、もう少し慎重に行こうか・・・」

ポッチャマもそうだねとばかりに何度も頷いた。

その様子にノゾミはもう一度クスツと笑った。

ヒカリたちは暫く森の中を探索したのち、そろそろ時間だから戻る

うということになり、ヒカリは名残惜しそうに後ろを振り向きながらノゾミについていった。

「また来ればいいじゃないか」

「そうだけど・・・折角仲良くなったのに・・・」

ヒカリは途中、一匹のポケモンと出会い、共に遊んだりなんかして仲を深めたのであるが・・・

「あの子ともう少し遊びたかったな・・・」

ヒカリがそんな思いにふけているところで、大きな爆音が響き渡った。この近辺であろうか、その爆音は二人の耳をつんざいた。

「何、一体何があったんだ!」

ノゾミは叫ぶ。

回りを見るとポケモンたちが一目散に逃げ出しているのがわかった。

二人は初め、音がした方を凝視していたが、次いでその理由を理解した。

森の奥から黄色く大きなポケモンが姿を表したのである。

「あれって・・・」

「らいでんポケモンエレキブルだね・・・でもどうしてここに・・・」

その理由を考える暇もなく、二人には森の中には不釣り合いなエン

ジン音と機械油の臭いがした。

そしてエレキブルの後ろから古めかしいバイクに乗った中年の男が出てきた。中肉中背でその衣類には物々しい機械がついており、バイクの荷台には捕獲済みと思われるモンスターボールが大量に箱の中に入っていた。

「あなたね！こんなことするのは！一体なんのつもりなの！」

ヒカリの怒声をノゾミは遮って、

「ヒカリ！こいつはポケモンハンターだ。話を聞くようなやつじゃない！」

そういつてノゾミはモンスターボールからエルレイドを出し、ハンターを威嚇した。

男はふふんと鼻先で笑って、

「よく知ってるじゃないか。じゃあ怪我しないうちに帰ちな姉ちゃん」

「そうはいかないよ！そのモンスターボールの中のポケモンを解放するまではね！エルレイド！」

「フリーデイン！あなたもいつて！」

ヒカリもモンスターボールからフリーデインを繰り出した。

「エルレイド！しんくうは！」

「フリーデイン！エナジーボール！」

二人の攻撃はハンターに向かっていったが、

「エレキブル！弾き返せ！」

エレキブルによって簡単に返されてしまった。

「そのまま、かみなりだ！」

放たれた雷は地面に当たり、爆煙を巻き起こした。

「かみなりパンチ！」

爆煙で視界が遮られたエルレイドの目の前にいきなりエレキブルが現れたので、エルレイドは一瞬怯み、パンチがあたった。

「エルレイド！」

パンチの衝撃で地面に叩きつけられたエルレイドであったが、それでも勇敢に立ち上がった。

「ノゾミ、なかなか強力ね・・・」

「ああ、でもこれで終わりじゃないからね。ここからが本番さ」

「そうね・・・」

二人は互いを見合ってニヤリと笑った。そして急に真剣になるとハンターを睨んだ。

「いくわよ、フーデイン。サイコキネシス！」

「その間にエルレイドはきあいパンチ！」

サイコキネシスで動きが止められたエレキブルにエルレイドのきあいパンチは見事に決まった。

「くっ、エレキブル！負けんな！ギガインパクト！」

エレキブルは力づくでサイコキネシスを破り、ギガインパクトの構えに入ったが、その最中に攻撃を受け体制が崩れた。

「ちよっ、みらいよちか・・・」

男は舌打ちした。

「さあ、これで幕を終わらせるわ。フーデイン！きあいだま！」

最大の気力集中から放たれた一撃はエレキブルに向けて放射された。

「エレキブル！防げ！ひかりのかべ！」

しかし、その一撃もひかりのかべのもとに消えてしまった。だが・・・
後ろにはまだ控えていた熱き正義の心を持った武人が・・・
エルレイドはきあいだまの後ろから飛び出してきて、エレキブルに思い切りきあいパンチをした。
その衝撃で数秒間回りが見えなかった。

勝った！そう思った二人が煙が晴れたとき、二人は戦慄した。

なんと、ハンターがいないのである！その場にいるのは目を回して倒れているエレキブルだけである。どうやらあの攻防の最中に逃げたらしい。なんとという外道鬼畜ぶりだろうか！
ノゾミは両の拳を強く握った。

「追うよ！ヒカリ！まだその辺にいるはずだ！」

ヒカリは大きく頷き、二人は互いのポケモンを労いお礼を伝えボールに戻した。

そして、バイクのタイヤのあとを追って走った。

暫く追うと森の入り口近辺まで来た。ノゾミはちょっ、と舌打ちして、

「森の外に出られると厄介だね・・・」

「急ぎましょうー！」

ノゾミは大きく頷いた。

その時、目の前にノザクラ氏とマリーがひよっこり顔を見せたのである。ノザクラ氏はニコニコしながら二人に話しかけた。

「どうしたんですか、お二人とも。そんなに急いで・・・」

「ハンターが出たんですよ！」

「ふふん、ハンターがねえ」

ノザクラ氏はふふんと一つ微笑し、マリーと眼を合わせた。人を食った野郎だ、ノゾミはそう感じた。

「兎に角、追わないと！」

ノゾミはノザクラ氏を無視してハンターを追うとしようとした。そして、

「ちょっと待ってください。そのハンターとはあの人じゃありませんでしたか」

「へっ……」

ヒカリはすっとんきょうな声を上げた。

成る程、ノゾミが行こうとした先にはバイクが転倒していて、近くには男が倒れている。どうやら先程のハンターらしい。

ヒカリとノゾミはハンターに近寄ったが、ハンターは目を回して気絶していた。

「これをノザクラさん、あなたが……」

ノゾミが尋ねるとノザクラ氏はきよとんとした顔をした後で、いきなり笑い出した。

「あっはっは、違う違う。あの人はその木に躓いて転倒したんですよ」

成る程、ノザクラ氏が指した先には大きな木の根っこが剥き出しになっている。

そこでノゾミはハツとした顔をして、

「ごうしちゃいられないな。早くジュンサーさんと呼ばないと・・・」

ヒカリは一つ頷くと鞆からポケギアを出し、警察の番号を押し、今までの経緯を伝えた。

暫く待つと警察がやって来て、三人も色々質問されたが、おっつけ解放された。

ここは警察に任せて僕らは帰りましょうかというノザクラ氏の提案に二人は素直に頷けた。色々と疲れてしまったのだ。当たりは既に赤くなっていた。

「あなた方はこれから如何してお過ごし予定ですか」

帰る途中でノザクラ氏が二人に聞いた。

「えっと・・・あたしは明日はここでゆっくりと過ごし、明後日にはここからマサゴまで船で・・・」

「ははあ、マサゴにですか」

「はい、それでコトブキから飛行機でジョウトのコガネまで」

ヒカリの言葉にノザクラ氏は驚いたように声をかけた。

「随分な長旅ですね。何かあるんですか」

「ジョウトに友人がいるのですが・・・その友人からエンジュシテイの祭りを一緒に見ないかと誘われまして・・・それで」

ノザクラ氏は一つ理解したように頷いた。

「成る程、エンジユの祭りですか、あれはいいですね。私も前に見たことありますが・・・ノゾミさんも一緒に行くのですか」

ノゾミはいえと首を横に振って、

「いえ、あたしはこのバトルゾーンを回りたいと思います」

「バトルゾーンをですか・・・」

「はい、シンオウ地方とは違った環境、生息しないポケモンがいますからね・・・旅を試してみたいと思ひましてね」

ノザクラ氏は顔をあげてノゾミの顔を眺めた。

それから二人はノザクラ氏と別れた。

ノザクラ氏は家が近いらしくマリーに手を引かれ、ステッキを持ちながら、よろよると帰っていった。

「変な人よね」

ヒカリは悪態を一つついたが、ノゾミも否定する気にはならなかった。

二人はリボンシンジケートに帰るとイヴが笑顔で迎えてくれた。二人はこの笑顔で今までの疲れがとれるような気がした。

今までの出来事は何故かもうイヴに伝わっていた。

どうしてもう知っているのかとイヴに問うと、イヴは悪戯っぽく笑うと、

「ここは田舎ですから、ちょっとしたことがあると直ぐに広がるものですよ」

と言われ、二人は顔を見合わせた。

「そろそろ夕食のお時間ですが、如何いたしましょうか」

「そうだね。それじゃあ、そのまま夕食を頂くか、ヒカリ」

「そうね、あたしもうお腹ペコペコ」

そう言つてヒカリがお腹を押さえたときに思い切りお腹がなったので、三人は互いを見合い、大きな笑いが起こつた。

夕食はまた格別に美味であつた。

夕食の後、二人は部屋に戻ると今日のことを思いだし、話していた。

「あんな風に二人でバトルするなんて久しぶりよね」

「普段あたしたちはバトルする側だったからね」

ノゾミは苦笑した。

ヒカリは突然ノゾミに笑顔を向けてある提案をした。

「ねえねえ、明日も行かない」

「明日はパスするよ。少しのんびりと過ごしたいからね」

ヒカリはほほを膨らませてノゾミに詰め寄つた。

「いいじゃない。一緒に行こうよ」

ヒカリは何度かノゾミの身体を揺さぶっていた。

ノゾミは半分諦めたような形になって、

「わかった、わかったよ。明日も一緒にいこう」

「わーい！やった！ノゾミありがとう！」

ヒカリはそう叫んでノゾミに抱きついた。

そんな姿を見ていると身体はもう立派な大人なのに・・・まだまだ子どもなんだね、などと考えてしまった。

長らく話していた二人であったが、それから暫くすると二人は早くも寝息をたてていた。

やはり少し疲れたのであろうか、全く起きる気配は感じられなかった。

次の日は特に気にして書くことはあまりなく、この日は平和な一日であったように二人は思った。

昼に再び訪れた森は昨日の騒動が嘘のように平穏であった。

ノザクラ氏は二人に朝の森も素晴らしいですよ、と二人に伝えたが、

「そうですね・・・でも朝はヒカリが起きられないと思うので・・・」

「

「あー！またそんなこというー！そんなことないよー！」

ヒカリは頬を膨らませてそっぽを向いた。

そんなヒカリの姿を見てノゾミとノザクラ氏は顔を見合せ笑った。

さて、そんなのんびりとした一日が過ぎた次の日、つまりこの日はヒカリとノゾミがリゾートエリアを発つ日でもあった。

ヒカリは目に指す陽の光を感じ、目を開けた。

時刻は10時を過ぎていた。

「おはよう。ノゾミ……」

と隣のベッドを見たがそこには人の姿はなく、ベッドはきちんと綺麗になっていた。

「あれ、ノゾミ……」

ヒカリは部屋のなかを探したがどこにもいなかった。自分のベッドではポツチャマが寝息を立てて未だに寝ていた。もしかしたらと思い、一階も探したが、見当たらなかった。

「おはようございます、ヒカリ様。どうかなさいましたか」

イヴの声であった。

「おはようございます。あのノゾミ知りませんか」

「ノゾミ様でしたら朝早くにお発ちになられましたけど……」

「発ったですって！ノゾミがですか」

ヒカリは驚きのあまり、声が裏返ってしまった。

「はい。それでヒカリ様にお言付けを頼まれました。未だ寝ていらつしゃるからと」

ヒカリは言付けの内容をイヴに聞いた。イヴは笑顔を見せながら、

「次はコンテスト会場で会おうと、負けないからねと申しております。」「

イヴの言葉にヒカリは顔を俯いたが、すぐに顔を上げた。その眼には決意と闘志で輝いているように見えた。

「ああ、それともう一つ・・・」

右手の人差し指を立ててイヴは言った。

「これからはもう少し早く起きれるようにと」

この言葉にヒカリは顔が真っ赤になり、回りに人がいることも忘れて叫んだ。

「ノゾミーー!」

ヒカリが暫くして落ち着くとイヴは優しくヒカリに声をかけた。

「ヒカリ様は昼食後にお発ちになられるそうですが、昼食までにエステなどは如何で御座いましょうか」

エステという言葉にヒカリは眼を輝かせた。

「エステ！はい！あたし受けます！」

「それでは自分のポケモンの中で一匹、お選び下さい」

「一匹……ですか……」

ヒカリの疑問にイヴは笑顔で説明した。

「はい、当施設のエステは一日にそう何人もお受け出来ませんので、コーディネーター一人につき一匹という規則になっております」

ヒカリは暫く考えた後に一匹のポケモンを出した。

「ミミロップ、あたしと一緒にエステを受けましょう」

ヒカリの言葉にミミロップはとても嬉しそうに鳴いた。その振る舞いはどうやら女の子のようである。

ヒカリとミミロップは昼食までエステを受けた。エステを受けた二人は見違えたように美しくなったように感じられた。

昼食の後にヒカリはチェックアウトをするために受付に行き、そこにはイヴが立っていた。

「ああ、ヒカリ様。チェックアウトでございますか」

ヒカリははいと言って鍵をイヴに差し出した。

「イヴさん。お世話になりました」

「いえいえ、此方こそ、お二人に来ていただいて光栄です。またいつでもお越し下さい。」

「はい！また来ますよ。絶対」

ヒカリの言葉にイヴは顔を赤らめありがとございませと返した。

そんな時、ミセス・シャーロットが玄関から入ってきた。

イヴとヒカリはそれに気付くとミセス・シャーロットに一礼した。

「ああ、オーナー。お帰りなさいませ」

「ああ、只今戻ったよ。おや、ミス・ヒカリ、今から出発かい」

「はい！お世話になりました。ミセス・シャーロットに会えてあだし、すごく嬉しかったです」

ミセス・シャーロットはヒカリの言葉に嬉しそうにそうかいと返すと、

「それじゃ、またおいで。また皆で食事しようじゃないか」

ヒカリはこの言葉に顔をあげ、とびきりの笑顔を見せた。

「はい！必ずまた来ます！ノザクラさんとチトセさんにもよろしくお伝えください！」

「ああ、伝えとくよ・・・」

そしてヒカリは何かを思い付いたようにイヴに顔を向けた。

「イヴさん。あたしとポケギアの番号交換しませんか」

急な申し出にイヴは戸惑ったように、

「えっ、あたしと・・・ですか」

「はい、折角なかよくなれたんですから。この機会に・・・」

イヴは一瞬ミセス・シャーロットの顔を見たが、ヒカリの方を向いて顔を赤らめながらポケギアを出した。

「私でよろしければ・・・」

そして二人は番号を交換した。

「それじゃあ、お世話になりました。またいつか・・・」

ヒカリの言葉にミセス・シャーロットはヒカリの手をとって・・・

「ミス・ヒカリ、あなたのコンテストこれからも楽しみにしてるからね。頑張るんだよ」

ヒカリは感極まったようにミセス・シャーロットの手を握り返して、

「はい！あたし、頑張ります！」

と決意を新たにした。

「イヴさん、連絡しますね」

「はい、楽しみにしております」

「それじゃあ・・・」

そう言ってヒカリはリボンシンジケートを後にした。

後ろを振り替えればミセス・シャーロットとイヴはヒカリを未だ見ていた。

ヒカリは大きく二人に手を降るとそのままリゾートエリアの船着き場へと向かった。

・
これからヒカリは向かうのだジヨウト地方のエンジュシティへと・・・

踊り子とフィデリオ(3) (後書き)

踊り子とフィデリオ完結致しました！

最後が走りすぎた感じが無いような気がしなくてもないですが、気にしない！

ヒカリのポケモンフーデインはゲーム版Ptのヒカリがユンゲラーを所持していたのでヒカリにもフーデインを持たせて見ました。同じようにピクシーも所持しています。

なお、迷いましたが、ミニロルはミニロップに進化させました。まあ進化してもサトシのピカチュウに対する想いは変わらないでしょう。

次回からはジョウト地方のエンジュシティに舞台が行きます。

最後になりましたが、このような文章でよろしければご感想よろしくお願いいたします。

ダブル主人公、西へ(1) (前書き)

ダブル主人公、西へです。

この物語は舞台がジヨウト地方になります。今回の舞台は古都エンジュシティです。

ジヨウト地方から二人ゲスト出演者がいます。

読んでいただけると嬉しいです。

ダブル主人公、西へ(1)

新コトブキ空港から約二時間半かけ、新ジョウト国際空港にたどり着いたヒカリは、新しく出来た新コガネ駅の前にいた。

ここでヒカリはとある人物と待ち合わせをしていたのである。

「少し早かったかな・・・」

ヒカリは腕に光る赤色のポケッチで時間を確認した。約束まであと十分ぐらいである。

「ヒカリン！」

誰かがヒカリの名前を呼んだ。ヒカリは声のする方に振り向くと、笑みを見せ、手を大きく振った。

「コトネー！」

コトネと呼ばれた女性は年格好はヒカリと同じぐらいであろうか。髪を肩に波打たせ、少し活発な感じの服を着ていた。

コトネは真っ直ぐヒカリのもとに走ってきてヒカリの手を握った。

「久しぶりってことね、ヒカリン！元気してた」

「本当に久しぶり！元気よ元気！コトネも相変わらずみたいね」

二人は手を握りあいながら互い久しぶりに出会えたことを喜んだ。その後、二人は二言三言近況などを話して歩き出した。

ヒカリは歩きながら、コトネに話しかけた。

「でも楽しみね、エンジュのお祭り！コトネ、誘ってくれてありがとうね」

「いいってことね。あたしも久しぶりにヒカリンと会いたかったし。このエンジュのお祭りは今ジョウトの目玉の一つだから絶対に楽しめるってことね」

ヒカリは感心したように頷いて、

「流石、ジョウトの案内役ね。今から楽しみになってくるわ」

ヒカリの誉め言葉にコトネは少し照れた。

「でも今回の祭りの本当の目玉は今日行われるホウオウのためのバトル大会よ」

「言ってたやつね。私も見たいわ。確か鈴の塔の前で行われるんだよね」

「そう、実はそれでエンジュジムのマツバさんと少し話さないといけないくて・・・だから、ごめん！ヒカリン！まずエンジュジムに行ってもいい？」

手を合わせ頭を下げるコトネにヒカリは笑顔で柔らかく返した。

「勿論よ。私もエンジュジムのジムリーダーには一回会ってみたかったんだ」

「それじゃ、行きますか」

コトネはウインクしながらヒカリに尋ねた。

「そうね・・・それじゃあ、出てきて！トゲキッス！」

「エアームド！」

そうして二人は互いに飛行ポケモンを出し、飛び乗った。

二体の飛行ポケモンは二人の女性を乗せ、エンジュシティへと飛び立った。

夏のエンジュシティは非常に暑いものである。あまりの暑さに時折回りの景色が歪んでいた。ヒカリとコトネは吹き出す汗をハンカチで拭いながら、エンジュジムに向けて歩いていった。

「あー、ここよ、ここ。エンジュジム」

コトネはある大きな一軒家を指差して言った。

「ああ、やっと着いた・・・」

ヒカリは雪国シンオウ育ちであるためか、この暑さには既に参っているようであった。

二人はジムの前に立つと自動ドアがすつと開いた。

「すいませーん！マツバさーん！」

コトネがマツバの名を呼ぶとジムの奥から一人の男が出てきた。男の歳は三十二、三といったところであろうか。

スラツと背が高く、金髪に黒いワイシャツを着ている。恐らく、美

男子の部類に入るであろう男であった。
男はコトネの姿を見ると、笑顔を見せ、近づいてきた。

「やあ、コトネちゃん。暫く。よくきてくれたね。おや……」

「お久しぶりです。マツバさん。こちらは私の友達で……」

ヒカリは頭を下げ一礼すると、

「ヒカリと申します。初めまして」

「ああ、初めまして。エンジュシティジムリーダーマツバです。お噂はかねがね、シンオウの踊り子さん」

ヒカリは驚きつつ、少し照れた。

そこに、コトネが口を出した。

「ところでマツバさん。お話ってなんですか」

「ああ、そう。実はね今回のバトル大会に、一人参加者を追加しようと思ってるね」

「一人ですか……」

「そう。その人はね、今まで幾度となくホウオウと出会っている人でもあるんだよ。どうか、このバトル大会に相応しい人物だとは思わないかい」

「すごいです！そんな方がいらっしやるのなら是が非でも参加して頂いた方が良いでしょう！」

コトネの眼は輝いていた。ヒカリは、きよとんとした顔をしながら、
「それで、その人と言うのは・・・」

マツバは二人にちょっと悪戯っぽい笑みを見せながら、

「何、君たちも知っている。とても有名な人だよ」

「とても有名な人」

二人は色々思案してみたが、結局検討はつかなかったため、コトネはおうむ返しに聞き返した。

「君たちも聞いたことがあると思うよ。かつてチャンピオンマスターに勝利したピカチュウを連れたトレーナーを・・・」

「な、な、なんですって」

マツバの意外な言葉にヒカリは度肝を抜かれてしまった。ヒカリはまじまじとマツバの顔を見つめながら、

「そ、それでマツバさん・・・その人は一体なんという人なんですか」

「マサラタウンのサトシ君だよ。今はカントートキワジムで師範代を務めている」

ヒカリは突然、世にも嬉しそくに眼を閉じ、胸の前で両の手を強く握り合わせた。

マツバはそんなヒカリの様子に洗面をつくると、出来るだけ柔らか

い口調で尋ねた。

「ヒカリさん、あなたサトシ君を知っているのかい」

「はい、はい、勿論です。知っています、知っていますとも。それでサトシは今此所にいるんですか」

「今はちよつと出払ってしまったんだけど、追っ付け戻ってくると思っよ」

「そ、それで今は何処に……」

マツバはぎよつとして、ヒカリの顔をしげしげと見つめた。

「ヒカリさん、あなたどうしたんですか、泣いてらっしやるじゃないですか」

「え、そんなことないですよ」

あははと笑ってヒカリは慌てて眼をこすった。

「サトシ君なら多分、スズのとうにでも行っているんじゃないかな」

ヒカリはマツバの言葉に眼を輝かせ、お礼も言わずにジムから走り去った。

「はて……」

マツバは小首を一つ傾げてコトネの様子を見ると、

「一体どんな関係なんだい」

「昔一緒に旅をしてたんですよ、二人は」

「ああ、なるほどね・・・」

マツバは納得したように頷くと、ヒカリが出ていったドアを見つめた。

エンジュシテイ奥に存在するスズのとう、かつては伝説のポケモンホウオウが訪れていた木造の塔だが、今は関係者以外立ち入り禁止となっている。

ヒカリはバトル大会の会場から更に行った先、スズのとうの入り口に向けて歩いていると、入り口に一人の男が立っているのが見えた。肩には黄色いねずみポケモンピカチュウを乗っけている。

ヒカリはその姿を見ると再び胸の前で両の手を強く握った。そして、大きな声ではっきりと彼の名を呼んだ。

「サトシ！」

名を呼ばれたサトシが呼ばれた先に顔を向けるとそこにはかつて共に旅をした仲間がポツチャマを抱いて立っている姿が見えた。

「ひ、ヒカリ・・・」

ぼつんと呟いたサトシであったが、ピカチュウに頬をぺちぺちと叩かれて我に返った。

ヒカリは慌ててサトシのもとに走りよってきた。そしてサトシの手をつかむと、

「サトシ、本当に久しぶりね！元気だった」

「あ、ああ。ヒカリも元気そうだな」

「そう、そうね元気よ、・・・でもサトシはあまり変わっていないわね」

かつてサトシと旅をしたのが彼らが十代前半の時であった。あの時からもう八年の歳月が流れている。なのに彼の容貌はあまり変わっていないかった。小柄な体型に幼い顔つき、変わっているところと言えば、帽子を外したことぐらいであろうか。

「皆に言われるよ、・・・でも、そのお陰で苦勞が多いんだよ」

ふっーと溜め息をつくサトシを見てヒカリはクスツと笑いだした。

「何笑ってんだよ。こっちは真剣なのに・・・」

「ごめんごめん。でも、やっぱりサトシは変わっていないわね。あはは」

サトシは少し眉間に皺を寄せたが、ヒカリの様子に徐々に顔が緩み、笑いだした。

その笑いが、一段落着いたところで、

「ところで、なんでヒカリがエンジュシテイにいるんだ」

「それはね。あたしも祭りを一緒に見ないかって誘われたんだ」

サトシは少し渋面をつくった。

「誘われたって、誰に」

「サトシも覚えているでしょう、コトネのこと、そのコトネに誘われたの」

サトシはあーと一つ頷いて返した。

「あー、あのコトネか。懐かしいな、元気でやってるか」

「ええ、今はジョウト地方の観光業界に務めているんだって。ジョウトをもっと知ってほしいからってね。コトネらしいわ」

「ふーん。そうか、コトネか・・・」

そんな話をしているときにヒカリは突然、大きな叫び声を上げた。サトシは眼を大きく見開いて、

「ヒカリ、どうしたんだよ・・・」

「もう少しで時間なのよ。バトル大会の・・・少し話すぎたわね」

「そっか・・・それじゃ、行くうか。会場に行けばマツバさんにもコトネにも会えるさ」

「そうね・・・サトシ。行きましょう！」

二人はスズのとうの入り口を後にして、バトル大会会場へと足を進めた。

「そう言えば、マツバさんに聞いたんだけど、サトシも参加するんですよ」

ヒカリの質問にサトシは笑顔で答えた。

「うん。まあ参加と言っても、優勝者と手合わせするだけだけだね」

「ふうん、優勝者とかあ・・・サトシ頑張ってるね。あたし応援するから！サトシなら大丈夫！」

「はは、久しぶりに聞いたなそれ、まだ言ってたんだ」

「懐かしいでしょ」

「ああ」

「サトシ・・・」

ヒカリは右手を大きく上げていた。サトシはその姿に嬉しそうな笑みを浮かべ、

「ああ！」

と右手を大きく上げた。二人は右手をパチッと合わせると、互いの顔を見合い、笑みを浮かべていた。

ダブル主人公、西へ（1）（後書き）

ダブル主人公、西へでした！

いやあ、やっと出会いましたねサトシとヒカリさん。

漸く出会わせられました。こちらも。

これから暫く二人は共に行動する予定です。

さて、次回はサトシ君がバトルをします。八年経ったサトシ君の実力がみられるでしょう。

最後になりますが、未だに下手な文章ではございますが、ご感想宜しくお願い致します。

ダブル主人公、西へ(2) (前書き)

ダブル主人公、西へ第二話です！

遂にサトシのバトルが・・・

とは言え、バトルの描写が上手くないかと思いますが、そこはご容赦頂きたいと思います。

それではダブル主人公、西へ第二話。宜しくお願い致します！

ダブル主人公、西へ(2)

「これより、バトル大会を開催致します！」

司会の声に会場の人達から熱気を含んだ大きな声が巻き起こった。

「先ずはこのバトル大会の主催者であるエンジュシティジムリーダーマツバさんからのご挨拶です。マツバさん」

マツバは司会からマイクを受け取ると、一礼し、はっきりとした声で会場に語りかけた。

「会場の皆様。私はこの祭りでバトル大会を開催するにあたって、一言皆様に申し上げたいがございます。ホウオウがこのスズのとうを訪れなくなってから長い年月が過ぎました。私はこのスズのとうを管理する者として、このバトル大会を通してホウオウに純粋なポケモントレーナーたちと、そのトレーナーたちを慕うポケモンたちの絆を見て、ホウオウが再びこのスズのとうを訪れるようになってほしいということを述べ、挨拶とさせていただきます」

マツバは再び一礼すると会場からは拍手が聞こえた。マツバはマイクを司会に渡すと主催者席に戻った。

「さて、これからルールを説明させていただきます。この大会はトーナメント制です。最後の最後に勝ち残った者が優勝者となります！その優勝者には皆様ご存知のポケモントレーナー、現トキワジム師範代であるマサラタウンのサトシさんとバトルする権利を授かるのです！さあ、サトシさん……」

「宜しく願います。誰が俺、嫌、私とバトルできるかとても楽しみで、俺も、早くバトルしたい、・・・今日は全力を尽くして、バトルしようぜ！」

サトシは少し震えて語りながらも、拳を上げ、その言には熱く、魂がこもっているように聞こえた。

「サトシったら相変わらずってことね、ヒカリン」

「そうね」

ヒカリは笑いながらコトネに返した。

「それでは、只今よりバトルを開始させて頂きます！まずは一回戦、第一グループから・・・キキョウシティのヘイジさんとフスベシティのタツオさんです！」

名を呼ばれた二人は出場者席から出てきて、バトルフィールドに向かい合わせに立った。二人からはバトルに対する熱気と気合いが感じられた。

「それでは・・・準備は宜しいかな・・・よし、試合開始！」

審判の掛け声に二人はモニターボールを掲げポケモンを繰り出した。

ここからバトル大会が始まるのだ・・・主催者席に座るサトシと観客席に座るヒカリはそう思いながらバトルフィールドの方に顔を向けた。

バトル大会は凄まじい熱気に包まれながら行われていった。

出場者達は真剣に、そして純粋にポケモン達に指示をし、ポケモン達は、そんなトレーナーの指示を聞いてバトルを行っていた。

そして決勝戦は今までにない盛り上がりを見せていた。

流石、ここまで勝ち上がってきたトレーナーである。

実力もさるものながら、その指示は冷静にポケモンを応援し、ポケモンはトレーナーを信じ、闘っているようであった。

しかし・・・

「ニドクイン戦闘不能！ハツサムの勝ち！よって勝者、コガネシテイのヨウジ選手！」

優勝者は決まった・・・勝者は闘ったポケモンと共に勝利を喜び、敗者は悔し涙を流しながらも自らのために闘ったポケモンに対し、労いとお礼を伝え、二人は固い握手を交わす。

そんな二人の姿に観客席からは拍手と声援が聞こえた。

「いいバトルだったわね・・・」

「そうね・・・やっぱりいいってことね、こういうのも・・・」

「やっとサトシの出番ね。サトシのバトル久しぶりに見るけど・・・」

「

ヒカリは遠くを眺めながら呟いた。

「心配」

「ううん。そんなことないわ。サトシなら大丈夫、大丈夫よ」

「そう・・・」

コトネはまじまじとヒカリの顔を見つめたが、ヒカリは晴れやかな笑みを見せており、コトネは呆気にとられてしまった。

「どうしたの、コトネ」

コトネは少し焦って、

「えっ、ううん。なんでもないってことね、あっ、サトシ出てきたよ。バトルが始まるわ」

「えっ・・・」

成る程、サトシがいつの間にかバトルフィールドに出てきて優勝者と握手を交わし、何かを話している。

「サトシさん、・・・宜しくお願いします!」

「ああ、宜しく!お互い全力でいこうぜ!」

「はい!」

そしてサトシと挑戦者は互いにバトルフィールドを挟んで向かい合わせになり、モンスターボールを構えた。

「準備は宜しいかな・・・よし、それでは、バトル開始!」

審判の掛け声に二人はモンスターボールを掲げ同時に互いのポケモンを繰り出した。

「フシギダネ！君に決めた！」

「ブーバーン！頼む！行ってくれ！」

二体のポケモンは出ると相手に対して、睨みをきかせた。

「ねえ、サトシ不味いんじゃない・・・」

「大丈夫よ、サトシなら。相性なんて関係ないもの・・・」

観客席では不安気なコトネをヒカリが諭していた。

「先手必勝！ブーバーン、かえんほうしゃ！」

「かわして、タネばくだん！」

フシギダネは華麗にかわしてブーバーンにタネばくだんを放った。ブーバーンはタネばくだんを食らったものの、直ぐに立ち直った。

「もう一度だ！」

「つるのむち！」

フシギダネはつるのむちでブーバーンを足払いした。

「くっ、流石だ。だが、まだ行ける！ブーバーン、えんまく！」

ブーバーンの煙幕で辺りは黒い煙で包まれた。フシギダネは見えないのか、辺りを見回していたが、

「十万ボルト！」

突如として煙の中から現れた電撃にフシギダネは一瞬怯み、電撃を食らってしまった。

「この隙にかえんほうしゃ！」

ブーバーンから放たれた火炎はフシギダネに向かっていったのだが、

「跳べ！」

サトシの掛け声にフシギダネはつるのむちを使って高く飛び上がり、火炎を上手くかわした。

「ソーラービーム！」

背中の中に太陽の光を吸収し、磨き抜かれたダイヤモンドとも言われるべき光の光箭がブーバーンに向けて放たれた。

「ブーバーン！」

それでもブーバーンは立った。ほぼ、気力のみで立っている状態であろうか。ヨロヨロっとしている。

「ブーバーン……」

トレーナーの呼び掛けにブーバーンはニヤツと笑った。その笑みにトレーナーは大きく頷くと、

「よし！最後の決勝だ！ブーバーン、はかいこうせん！」

ブーバーンはフシギダネに向けて大きな光の束を放った。

「かわして、とっしん！」

ブーバーンのはかいこうせんをかわすと、フシギダネはブーバーンの懐に、思い切り体当たりをした。

流石のブーバーンもこの攻撃には堪らず、前のめりに倒れた。

審判は旗を掲げ、

「ブーバーン戦闘不能！フシギダネの勝ち！よって勝者、マサラタウンのサトシ！」

この叫びに会場はドツと盛り上がり、サトシに向けて大きな拍手と声援が贈られた。

「ブーバーン、よくやったぞ！ありがとう・・・」

ブーバーンを起こしたトレーナーはブーバーンに笑顔を向けた。ブーバーンはそれでも申し訳なさそうな表情を見せた。

「いや、ブーバーンはよくやったよ。いい勝負が出来たじゃないか。だから、そんな顔するなよ」

「そうだよ、いいバトルだったよ」

「サトシさん・・・！」

「ありがとう。君たちとのバトルは本当に楽しかった！今度はトキワジムに来てくれよ。そのときは、またバトルしようぜ！」

サトシはトレーナーに握手を求めた。トレーナーは感極まったように両手でサトシの手を握った。

「サトシさん・・・俺、俺・・・またあなたに挑戦します！今度は負けません！」

「おお、待ってる！でも俺だって負けないぜ！」

トレーナー同士の握手と同時にポケモン同士も固い握手を交わしていた。フシギダネは自分のつるでブーバーンの手を握っていた。

そんなトレーナーとポケモンの姿に会場からは割れんばかりの拍手と声援が巻き起こった。

そんなバトル大会が終了してからサトシはヒカリ、コトネと祭りを楽しんでいた。

「ところで、サトシはこれからどうするの？」

ヒカリはサトシの顔を見つめながら尋ねた。

「うん。俺はマサラに帰るよ」

「そう・・・」

「あんまり、ジムをキクコさんだけにも任せてられないし・・・
師範代は今俺一人だからさ」

ヒカリは急に真面目な顔付きになると、

「ねえサトシ。あたしも一緒にマサラに行っていていい」

「ヒカリが・・・かい」

「うん。あたし一度、サトシの故郷に行ってみたかったの。サトシのお母さんや川柳の人にも会いたいし、だから・・・」

サトシは少しギョツとした顔付きになったが、直ぐに柔らかい笑みをヒカリに見せて、

「勿論だよ、ヒカリ。一緒に行こうぜ！」

「ありがとう、サトシ！宜しくね！」

サトシの言葉にヒカリは満面の笑みを見せ、お礼を言った。

「マサラまでは歩いて行くけど・・・大丈夫かい」

「勿論よ。昔みたいに、タケシはいないけど・・・また一緒に旅しましょう！」

「ああ、そうだな！」

「じゃあ、あたしも途中まで付いていくってことね」

「えっ、コトネも・・・」

コトネが口を挟み、サトシが反復するように尋ねた。

「そう。私もワカバタウンに帰るところだからね、途中まで動向させてもらっわ・・・二人の旅路を邪魔するのは悪いと思うけど・・・」

サトシとヒカリは互いを見合った後、コトネに笑みを見せ、

「そんなことないわよ。一緒に行きましょうよ」

「旅は道連れ、旅は多い方が楽しいからな。一緒に行こうぜコトネ！」

「ありがとう！二人とも、暫くの間宜しくね」

「ああ！こちらこそ！」

「宜しくね！」

三人は再び旅を共にする喜びを分かち合いながら、再び祭りの中に歩みを進めた。

ダブル主人公、西へ(2) (後書き)

ダブル主人公、西へ第二話でした！

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

さてさて、今回初めてサトシのバトルが書かれましたが、バトルの描写が上手くなく、申し訳ありません。

因みにダブル主人公、西へはもう少し後まで続きます。

次からは少し事件が・・・

さて、最後になりましたが、このような拙い文章ですが感想宜しくお願い致します！

ダブル主人公、西へ(3) (前書き)

ダブル主人公、西へ第三話です！

サトシたちが事件？に巻き込まれちゃいます。
数名、オリジナルキャラクターが登場致します。

さてさて、それでは、ダブル主人公、西へ拙い文章ではありますが、
読んでいただければ、嬉しいです。

ダブル主人公、西へ(3)

バトル大会が終了したその日の夕方、サトシたちはポケモンセンターにて明日旅立つための準備と、ポケモンたちを休ませていた。

「あれっ、サトシは・・・」

「サトシならさっき、エンジュジムに・・・マツバさんに挨拶に行つたわよ」

「そう・・・」

ヒカリがサトシの行方を気にするなか、サトシは・・・

「それじゃ、マツバさん。お世話になりました。とても楽しかったです」

「うん、サトシ君、こっちも楽しんでもらえて良かったよ。久しぶりに仲間にも会えたみたいだし・・・良かったね。またいつでもエンジュjouにおいて」

「はい！それじゃあ失礼します！また、いつか・・・」
サトシはマツバに対して一礼した。相棒のピカチュウも同様に一礼した。

「またいつか、またね、サトシ君」

そうしてエンジュジムを出たサトシはポケモンセンターに向けて、歩いていった。

近道をしようとして袋小路に入ったサトシであったが、その瞬間に、誰かとぶつかり、後ろに倒れてしまった。

「痛た・・・ピカチユウ大丈夫か」

「うう・・・」

「あなた、大丈夫」

頭を抱えながら起き上がるサトシが見たものは、同じように倒れた男を立ち上がらせる女性の姿があった。

男性の方は二十八、九といったところか、白いワイシャツに茶色いズボンをはいている。その顔には無精髭がちらちら生えていた。

女性の方は男性と同じぐらいの年頃だろうか、すこしゆつたりとした服を着ているが、その服はヨレヨレになっており、その顔にも頬はすこし瘦けて疲れが垣間見えた。

「ねえ、あなた、早く、早く・・・でないと・・・」

「ああ、そうだな・・・」

そう言って二人はそそくさと立ち去ろうとしたのだが、

「ああ、駄目よ！もう来たわ」

女性の悲痛な叫びにサトシが女性の向いた先をみると、成る程、袋小路の奥の方からは男が歩み寄ってきた。

男は大柄な中年で、ワイシャツに紺色のスーツの下をはき、ネクタイをしめていたが、ワイシャツの襟は既に茶色くなっていた。

「やっと見つけましたよ。お二方、ついてきていただきましょうか．．．」

男は二人にゆっくりと近づいていった。

「いや、嫌よ！あなた、早く、早く！」

二人は急いで逃げようとしているが、間に合わない。そんな二人の前にサトシが燦然と立った。

「何ですか、あなたは．．．」

「俺はオムライスケチャップ郎、通りすがりのものだが、二人とも嫌がっているじゃないか。あんたこそ何者なんだよ」

サトシは咄嗟に偽名を使った。何故かはサトシ本人にも分からない、自然と出たという方が本音か．．．

男はふんと鼻をならし、笑みを見せながら、

「私はその二人の友人でね．．．さあそこをどいていただこう．．．」

男の問いかけにサトシは渋面を作りながら、

「嫌なこつた。おい、あんた、俺を甘く見んじやないよ。あんたと二人が関係ないこと位、二人の顔を見たら分かるつてもんだ！」

「成る程、仕方ない、では．．．」

男が腰元に右手を伸ばした刹那、男の右手を電撃がかすった。

「やる気かな・・・そのつもりなら俺は手加減をしないぜ！」

サトシの肩では電撃を放ったピカチュウが頬に電気を貯めながら、男を威嚇していた。

男はちよつ、と舌打ちをして、去っていった。

「ふん！嫌なやつ！」

サトシは再び洗面をつくると毒づいた。そして、柔らかな笑みを見せながら、二人の方に向き直った。

「さて、と、大丈夫ですか。怪我はありませんか」

「あ、はい、ありがとうございます・・・」

二人はサトシに対して大きく一礼した。

「なんでまた、あんな奴に追われているのですか」

「えっと、あの・・・それは・・・」

「はあ・・・まあ、言いたくなかったら言わなくとも結構ですよ！
誰にも言いたくないことはありますからね」

「いえ、あの・・・」

サトシはニコツと笑い、口ごもる二人に優しく、なだめるように語りかけながら、

「でも、何か出来ることがあったら言ってください！もう口を挟んでいますからね、手助けしたいんですよ」

二人は暫く互いの顔を見合い、何やら話していたが、えらく小声であったため、サトシには聞こえなかった。二人は暫く互いの顔を見合い、何やら話していたが、えらく小声であったため、サトシには聞こえなかった。そして、キツとした顔つきになると、

「あの！お願いがあるのですが！」

と女性がはつきりとした口調で話し掛けた。

「サトシ遅いなあ・・・」

此所エンジュシティのポケモンセンターロビーではサトシの帰りをヒカリが待っていた。

時刻はもうそろそろ七時、夏の日の入りは遅く、辺りはまだ少し明るかった。

「もう夕飯の時刻はとうに過ぎてるのに・・・何かあったのかしら・・・」

そんなとき、センターの自動ドアが開く音がしたので、ヒカリはドアの方へ顔を向けると、そこには、サトシの姿があったのだが、

「サトシ・・・そちらのお二人は・・・」

ヒカリは少し声を低くしながらサトシに話し掛けた。
センターに入ってきたサトシの後ろには見慣れぬ男女二人組が付いてきていたのだから。

「ああ、こちら、ヒデオさんと、ミサトさんだ。ヒデオさん、ミサトさん。此方は俺の仲間でヒカリです」

「初めまして、ヒカリです」

ヒカリは訳がわからずも取り敢えず、二人に頭を下げ、挨拶をした。

「初めまして、私、ヒデオと申します。暫くの間、宜しくお願い致します」

「妻のミサトです。この度は大変お世話になります・・・」

「えっ・・・サトシ、それって、どういう・・・」

「まあまあ、その話は食べるもの食べてからにしようぜ。もうお腹ペコペコだよ。なっ、ピカチュウ」

サトシの問いに、ピカチュウはお腹を抑えながら一声鳴いた。ヒカリはふうと一つ溜め息をつくとき、笑みを見せ、

「分かったわ。あたしもお腹減ってるし、後でちゃんと話してね」

「勿論だよ。ヒカリにもコトネにも後で話さ。さあ、ヒデオさん、ミサトさん、行きましよう」

サトシはヒデオとミサトの方を向きながら笑顔で誘った。

「はあ・・・」

「あ、ありがとうございます・・・」

そうして、四人はポケモンセンターの食堂へと向かって歩みを進めた。

四人はポケモンセンターで少し遅い夕飯を食べた後、ジョーイに部屋をもう一つ頼み、四人でサトシたちの部屋に戻った。

部屋には既に夕飯を食べ終えたコトネが待っていた。

「お帰り、ヒカリン、サトシ！・・・えっと、どちら様ですか」

コトネはサトシ、ヒカリと共に部屋に入ってきた二人の人物に首をかしげながら、尋ねた。

「ああ、コトネ、それは今から説明するよ・・・さあ、お二人共、適当にお座り下さい。ああ、ヒカリも座ってくれ」

四人は思い思い、適当な場所に座った。

サトシはごほんごほん咳をすると、

「まず、お二人のことから・・・コトネ、こちらは、ヒデオさんとミサトさん。」

「宜しく願います。ヒデオです」

「妻のミサトです。ご迷惑でしょうが、宜しく願います」

二人はコトネに深々と一礼した。そんな様子を見たコトネも慌てて二人に頭を下げた。

「コトネと申します。こちらこそ宜しくお願い致します」

「ねえ、サトシ。これって一体・・・」

「まあまあ、それはこれから話すよ」

コトネの言葉を遮って、サトシは続けた。

「さて、と、取り敢えず、さっきの出来事から・・・」

サトシは先程の出来事を買いつまんで、二人に話した。

「そんなことが・・・」

「ああ、それで二人は、暫くの間俺たちの旅を同行したいと・・・」

驚愕する二人にサトシは説明を付け加えた。

「それは構わないけど・・・どうしてキキョウシティに」

「はあ・・・私共の実家が、キキョウシティにありますので・・・そこに行けば、なんとか」

「そう言うことだ、二人共、旅は人が多い方が楽しいからさ。二人も同行してもらったら・・・」

サトシはおずおずとヒカリとコトネに尋ねた。二人は顔を見合せていたが、笑顔で向き直って、

「あたしは全然構わないわよ。困った時はお互いさまよ。ねっ、コトネ」

「ええ、あたしだって構わないわよ。お二人共、宜しくね」

二人の言葉にヒデオとミサトは急に立ち上がった、

「あ、ありがとうございます！」

大きく頭を下げ、一礼した。

サトシはいきなり、ようし！と手をパンと叩き、

「そうと決まれば、今日は明日の準備をして、明日に備えようか！」

「そうね！あっ、お二人の部屋は右隣にありますから、・・・」

「あっ、はい・・・ありがとうございます」

「今日は疲れたでしょうから、ゆっくりお休みになって下さい」

ヒカリは笑顔で二人を宥めるように話しかけていた。

それから、五人は思い思い明日の準備をしたり、シャワーを浴びたりなどをして寛いだ。

今時にしては珍しい畳敷きの部屋の上で、男が一人これまた珍しいキセルをブカブカ吸っていた。

年はもう六十を過ぎたであろうか、丸みを帯びた顔にシワがいくつ

があり、その髪には白いものが結構あった。

その向かい側にも男が座っていた。その男は、おお、なんと云うことだ、先程あの二人を追っていたあの男なのだ。

「んで、失敗したというのかい」

キセルを吸っている男がしゃがれた声で尋ねた。

「はい、どうも、妙な奴に邪魔されて・・・」

「わしはあんたにそんな言い訳をされるために、あんたを送ったんじゃないんだぞ！」

男は急に怒鳴り声を上げて、責め立てた。もう一人が辟易しながら、

「はあ・・・申し訳ありません。ですが、大丈夫です。今サブの奴に奴等を監視してもらってますから・・・何かありましたら直ぐに知らせるでしょう」

「そうか・・・」

男はキセルを置いて、呟くと、

「まあ、何かあったら言ってくれ。人手は貸そう」

「ありがとうございます」

「あの二人が、何か握っているのに違いない！でなけりゃ、逃げ出す筈がないからな・・・さっさと取っ捕まえないと・・・」

「殺りますか……」

男はフウと一つ溜め息を漏らすと、

「仕方ないだろう。場合によっては、その妙な奴も殺ってしまいな」

「はっ！分かりました。それでは失礼します」

「ああ……」

二人を追っていた男が立ち去ると、初老の男はぼんやりと窓の外から月を眺めて、

「早く、早くしないと……」

と、呟いていた。

それから一夜開けた朝、朝食を食べた五人は、ポケモンセンター前に集まっていた。

「それじゃあ、出発しようぜ！」

サトシが先陣切って歩き出した。

「もう、エンジュシティとお別れか……なんだか寂しいわね……」

「また、いつでも来ればいいのよ」

ねっ、とヒカリに笑顔を見せるコトネにヒカリは、

「そうね・・・」

と呟いた。

サトシは後ろを向くと、ヒデオとミサトの顔をまじまじと見つめながら、

「大丈夫ですか。お二方・・・」

「はい、大丈夫です。これから暫くの間、宜しくお願いします」

「はい！それじゃあ、皆、行こうぜ！」

サトシの言葉に四人は大きく頷いた。

画して、旅は始まったのだ。何が起こるか分からない旅である。

そして、サトシたちの後ろからも同じように出発した人物が一名・

サトシたちの旅がどうなるのかは神のみぞ知ることである。

ダブル主人公、西へ(3) (後書き)

ダブル主人公、西へ第三話でした！以下がでしたか？

サトシたちが事件に巻き込まれちゃいました。

これからキキョウシティまで様々な出来事が起こります。

次回も是非是非ご覧ください。

拙い文章では御座いましたが、ご感想宜しくお願い致します！

小川の畔で（前書き）

ダブル主人公、西へが続いていますが、小川の畔です！

今回は少し短めで会話中心です。事件の合間の一息みたいな感じですよ。

それでも、ダブル主人公、西への間のお話です。

それでは、是非是非ご覧ください。

小川の畔で

サトシたちがエンジュシティを旅立ったその日は特に何も起こらなかった。

サトシはまた二人を狙って、昨日の男が襲ってくるのではないだろうか、という不安もあったが、よくよく考えてみると、こんな明るいうちから襲うなんてあまり考えられなかったし、それに、あまり怪しい動きも感じられなかった。

それでもサトシは、一応、警戒をしていたが・・・

さて、そんな感じで旅は進んでいた昼のことである。エンジュシティからキキヨウシティに向ける道の途中で綺麗な小川を発見したのである。

「ねえー！もうお昼だし、ここで昼食にしない」

「そうだな。俺も腹減った」

そう言っ腹を抑えるサトシであったが、その瞬間、サトシのお腹が勢いよく鳴った。サトシは頬を赤らめながら、

「早く、食べようぜ」

「サトシは相変わらずねえ、もう・・・」

ヒカリは少し呆れた顔でサトシを見たが、その瞬間、ヒカリのお腹も勢いよく鳴った。

「あつはつは、ほんとに二人はいいコンビってことね！」

コトネに茶化された二人はお互いの顔を見合い、顔を真っ赤に染めていた。そんなとき、

「ふふっ・・・あつはつは」

ことの成り行きを眺めていたミサトがいきなり吹き出した。

「おい、失礼だそ」

「ごめんなさい。だって、だって・・・あなただって笑っているじゃない・・・」

「いや、それは、その・・・」

ミサトをたしなめるヒデオであったが、その顔は既にニヤニヤしていた。ヒデオは耐えきれなかったのか、

「あつはつは、負けた負けた。サトシ君、ヒカリさん、すまない」

「もう！ヒデオさんもミサトさんもそんなに笑うことないじゃないですか！」

ヒカリは頬を膨らませ、二人に苦言を呈した。

「ごめんなさい。なんだが、可笑しくって・・・でもお二人は本当に仲がよろしいんですね」

ミサトは笑顔でヒカリの顔をまじまじと見つめた。ヒカリは少しぎ

よっ、とした顔つきになり、

「えっ・・・そうですね、昔、暫く一緒に旅をしていましたから・・・」

「大切な人なんですね」

ミサトの言葉にヒカリは笑顔になりながら言葉を返した。

「はい、とても大切な仲間です！」

「そう・・・サトシさんは幸せね、あなたみたいな人が仲間で」

「そう、ですかね」

ヒカリは少し照れながら、ミサトに返事をした。

「そうよ。ねえ、あなた」

「そうだね。サトシ君は幸せだと思っよ」

「そういうもの、ですかねえ」

そう言っつて、三人はサトシの方へ顔を向けると、サトシはコトネといそいそと昼食の準備をしていた。視線を感じたのか、サトシは三人の方へ顔を向けると、渋い顔つきになった。

「おーい、ヒカリ！なにしてんだよ、手伝えよ！」

ヒカリはビデオとミサトの顔を順次見比べてクスリと笑うと、

「はい、サトシ、今いくから！」

そうしてヒカリはサトシの方へ走っていった。

「好い人たちね・・・」

「そうだね・・・」

二人は顔を見合せながら呟いた。

それから少し時間が経って、昼食が出来上がった。余程おなか为空いていたと見え、サトシはガツガツと昼食に手を伸ばしていた。

「もう！サトシだったらがつつきすぎ！むせてもしらないわよ」

そう心配するヒカリの横で、サトシは勢いよくむせた。

「あー、もう、言わんこつちやない。ほら、お水よ」

そうしてヒカリに水を飲ませてもらったサトシがふーと一息つくのを見て、コトネたちは高らかに笑いだした。

そうして、昼食を済ませたサトシたちは片付けをした後に再び歩きだした。

休憩を挟みつつ、途中に存在するポケモンセンターにたどり着いたころには辺りは赤く染まっていた。

サトシたちはポケモンセンターに入るとまず、ジョーイに泊まる旨を伝え、ジョーイから鍵を受けると、真っ直ぐ部屋へと向かっていった。

小川の畔で（後書き）

小川の畔ででした！

今回は会話中心で、ほのぼのを書いてみました（ほのぼのになつて
るのかな・・・）

サトシは八年経っても食欲は衰えず、逆に上昇します。

八年の間にサトシは料理も上手くなります。きっと母親のハナコさ
ん似で料理上手だと思います。

逆にヒカリは料理があまり上手くありません。ヒカリの料理下手に
関する話もそのうちに書く予定です。

次回も会話中心になりますが、五人ではなく、サトシとヒカリの会
話を中心とする予定です。

さて、最後になりましたが、まだまだ拙い文章ですが、ご感想宜し
くお願い致します！

月明かりの下の語り(前書き)

月明かりの下の語りです！

この話は基本的にサトシとヒカリの会話中心になります。
色々とおかしい部分も多いかと思いますが、

是非是非ご覧ください！

月明かりの下の語り

ジョウト地方の夜中というものは大変寝苦しいものではあるが、この日はそうでもなかった。天気そのものは快晴であったが、窓を開けると、外からの風が心地よく、サトシたちは皆ぐっすりと眠っていた。

「ん、んん・・・」

そんな夜中にヒカリはふと目が覚めてしまった。別にトイレに行きたいわけでもなく、寝苦しかったわけでもない。ただ単にふと目が覚めてしまったのだ。

「どうしたんだろう・・・」

そう呟いて辺りを見回すと、隣ではポツチャマが寝息をたててぐっすりと眠っていた。

少し喉の渴きを覚えたヒカリは、ポツチャマを起こさないように静かに身体を起こし、ベッドから抜け出すと、ヒカリは鞆の中の財布から小銭を幾らか出すと、部屋の外へと出た。

ポケモンセンター内は既に消灯され真っ暗になっていたが、ロビーの自動販売機の辺りだけは灯りが灯っていた。自販機で飲み物を買ったヒカリは外へと出た。なんてことのない、少しだけ星を見たい、そんな気がしたのである。

外に出ても辺りは暗く、月明かりに、幾つかの星が瞬いていた。半袖の肌にさす風が心地よかった。

「あつ・・・」

上を向いていて首が疲れたヒカリが顔を前に向けると、そこには一人の人影があった。しかし、暗かったので、男か女かの判断はつかなかった。

「誰だろう・・・」

気になったヒカリが少しずつ近づくと月明かりの下、段々姿が見えてきた。

「さ、サトシ」

ヒカリは思わず声を挙げた。声に気付いたサトシはヒカリの方へと顔を向けると、少しギョツとした顔つきになり、

「ひ、ヒカリ・・・なんでここに・・・」

「サトシこそ、どうしてここにいるの」

ヒカリはおうむ返しにサトシに聞き返した。サトシは少し顔をうつむかせ、頬を掻きながら、

「なんだかよく分からないけど、目が覚めちゃってさ」

「へえ、サトシもなんだ」

「も、ってことは、ヒカリも」

「うん、あたしも」

「そつか・・・」

それから暫くの間、二人は無言で上を向き、星を眺めていた。

「星が綺麗だな・・・」

サトシが呟くと、ヒカリは、

「なんだか、こうしてサトシと星を見るのも久しぶりね」

サトシと旅をしたときからもう八年ぐらい経つ。ヒカリは過去の出来事が走馬灯のように頭をよぎっていた。

「確かに、本当に久しぶりだよな」

そんな風に言うサトシの目にはどこか懐かしく、優しい光がたたっていた。そんなサトシを見たヒカリは急に話しかけた。

「ねえ、サトシ」

「んん」

サトシは生返事で返した。

「あたしね、あの旅が終わったあと、色々な事があつたわ。楽しいこと、嬉しいこと、哀しいこと・・・でね、時々、フツとサトシやタケシのことを思い出したりして、急に寂しくなったりもしたこともあつたの。会いたって思ったことも何度もあつて・・・それでね、あたし、やっぱりサトシたちと三人で旅をしていた時があたしにとつてかけがえのないものだったんだなって・・・」

ヒカリは一旦言葉を置くと、

「えへへ、あたし自分でも何いつてるんだか、分からなくなってきた
ちゃった」

「いや、いいんだよ」

「えっ……」

ヒカリがサトシの顔を見ると、サトシはとても優しげな眼差しでヒカリを見つめていた。

「俺だつて、ヒカリやタケシたちに会いたいつて思ったことも何度もあつたよ。それがとても寂しく感じたときもあつたし……俺にとつてもヒカリたちと過ごした時間はかけがえのないものなんだから……それに……」

「それに」

ヒカリがサトシに聞き返すと、サトシは少し照れた顔をしながら、

「……俺、今嬉しいんだよ。またヒカリと一緒にいることが出来て……すごく嬉しい」

サトシの照れた表情から言葉を聞いたヒカリは、とても嬉しそうな笑みをサトシに見せ、

「うん！あたしもとっても嬉しいの！また、サトシとこんな風に話したり、こんな風に二人で星を見たりして……あたしもサトシと

また一緒にいれてすごく嬉しいよ！」

サトシとヒカリは互いの顔を見合いながら、二人は満面の笑みを互いに向けていた。そんな二人の様子を半分欠けた月が明るく照らし、星が見守っていた。

そんな時、サトシは急に思い立ったように、

「そろそろ、戻ろうか」

「そうね、もう遅いし、明日も早いしね」

そう言つて、二人は踵を返してポケモンセンターへと歩き出した。

部屋に戻ったサトシとヒカリはベッドに入ると、思いの外早く眠ることが出来た。

ヒカリがふと気が付くと、そこは桜の花弁が大量に舞っている場所であった。

「あれ・・・どこどこ・・・」

ヒカリは辺りを見回すが、そこには誰もいない。桜の花弁で辺りは桜色に染まつており、所々に桜の木の姿が見えた。

ポツチャマもない、腰にはモンスターボールすらなかった。

ヒカリはとぼとぼと歩き出すと、名前を叫んだ。

「サトシー！・・・サトシー！」

しかし、いくら名を呼んでも誰も返事するものはいなく、ただただ木の中に言葉が吸い込まれていくだけであった。

「なんなのよ、一体……」

ヒカリは少し寂しくなり、歩みを止めた。眼は少しだけ潤んでいるようにも見えた。そんなとき、ヒカリは背後に人の気配がした。身体ごと振り向かせると、そこには一人の男が立っていた。

ヒカリにはその男の服装と体つきに見覚えがあった。何処かで見たような気がする……だが、思い出せない……顔は何故だか歪んで、よく見えなかった。

色々思案しているヒカリの方へと男が近づいてきた。段々とヒカリの方へと歩みよってきたが、それでも男の顔は歪んでいた。

ヒカリは急に恐ろしくなり、その場から走った。すると男もヒカリを追って走ってきた。

ヒカリは逃げた。何処かに宛もなく走った。ハアハアと息は荒くなり、足は疲れてきた。それでも男は此方に向かって走るのだ。

「サトシー!!」

ヒカリは震える声で叫ぶが、返事は返ってこなかった。

そして暫く走ったヒカリであったが、次第に距離が狭まってきた。ヒカリが後ろを振り向くと、今まさに男がヒカリの真後ろに来ているところであった。

「っ……」

ヒカリは声にならない叫びを挙げ、目を閉じた。

夢はそこで、途切れた・・・

「はあ、はあ・・・」

目を覚ましたヒカリは急いで身体を起こすと、手を額をぬぐった。びっしょりと汗をかいていた。

「なんだったんだろう・・・あの夢・・・」

ヒカリは少しの間沈黙していたが、そんな時、ヒカリは声をかけられた。

「おはよう、ヒカリ」

サトシの声だ。ヒカリは声のする方へと顔を向けると、少しぎこちなく、

「お、おはよう、サトシ」

と言った。どうやらサトシも今起きたらしい。髪は少し跳ねており、顔付きも眠そうである。

「どうしたんだよ、ヒカリ。汗びっしょりだぜ」

「あ、ああ、変な夢見たからね」

「大丈夫か、少し疲れてるんじゃないか」

ヒカリは心配そうな顔をするサトシに笑みを見せると、

「大丈夫、大丈夫！変な夢くらい誰だって見るわよ。大丈夫！」

「でも、ヒカリの大丈夫は・・・」

「大丈夫で、す！」

ヒカリはサトシの言葉を遮って返した。

「そ、そうか、いや、大丈夫ならいいんだ・・・んじゃあ、俺顔洗ってくるよ」

「あ、まってあたしも行く」

ヒカリはベッドから抜けると、鞆から歯ブラシなんかを持ち、サトシと一緒に部屋を出た。

この二人にとって、ヒカリの見た夢が重大なものになるのだが、それはまだ先の話である・・・

月明かりの下の語り（後書き）

月明かりの下の語りでした！

サトシとヒカリで二人で会話させたい。そんな思いから書きました。因みに、この話は小川の畔での夜のお話となります。

さて、今回はダブル主人公、西への続きとなります！

次回も是非是非ご覧ください！

最後になりましたが、おかしな部分も多いかと思いますが、ご感想宜しくお願い致します！

ダブル主人公、西へ(4) (前書き)

ダブル主人公、西へ第四話です！

二話ほど挟みましたが、これが第四話となります。

この話で事件が急転直下致します。

おかしな部分も多いかと存じますが、ダブル主人公、西へ第四話、是非是非ご覧下さい！

ダブル主人公、西へ(4)

清々しい朝である。空は晴れ渡り、白い雲が所々に存在する。エンジュシテイのとある一軒家では一人の白髪の男が縁側でプカプカとキセルを吸っていた。

「お頭！」

奥から男がやって来た。以前にサトシと対峙した男である。男のその一言に、お頭と呼ばれた男はキセルを吸うのを止めると、右手を少し下ろした。

「朝っぱらからなんだえ、騒々しい」

「はい、実は逃げた二人に関して何ですが・・・」

「何かあったのかね」

お頭は身体を向き直すと、胡座をかいて、男を見上げた。

「はい、サブから連絡がありました、奴等はキキョウシテイの間近まで来てるらしいです」

「気取られなかっただろうね・・・」

「サブだって、元は伊賀者です。気取られるようなへまはしないでしょうよ」

「そう、それならいいがね。しかし、街に入られちゃ厄介だ。其ま

でに始末をつけにゃね」

「畏まりました。それでは、その様に手配します」

そう言っつて踵を返した男に対して、お頭はいきなり厳しい顔つきになると、

「待ちな！ただ単に殺ろうとすると、お前さん痛い目見るよ」

男はその言葉にピタツと立ち止まると、後ろを振り向きいた。

「あの男のことを言ってるんで、なに、あんな若造、こないだみたいには行きませんよ」

「ふん！だからお前さんは甘いだよ。おい、そのピカチュウを連れてたトレーナー、いったい誰かお前さん知ってるのかい」

「知りませんよ、あんな若造！それとも、お頭は知っていなさるんで・・・」

男は少し苛々しながら、お頭におうむ返しに聞き返した。

「勿論だとも、あの男はな、おい、耳の穴かっぽじつてよく聞け、あの男はな、以前にチャンピオンマスターワタルに勝ったマサラタウンのサトシよ」

男は心底びっくりしたように、ギョツとした顔をして、

「そ、それは間違いのないことで・・・」

「おお、おお、間違いのないことだとも、おい、これは事実だ。奴等にはマサラタウンのサトシが着いているのよ……」

お頭は少し震えていた。その震えが移ったのか、次第に男の方もブルブル震え出した。

「だからよ。こっちも作戦を練る必要があるのよ」

「作戦、ですか……」

「そうよ。まあ、耳を貸しな」

男はお頭の口元に耳を近付けると、お頭は何やら小声で男に話しかけ、男はふんふんと聞いていた。

「とまあ、こんな感じでいこうじゃねえか」

「成る程、やってみましょう。では、この旨を他の奴等に伝えてきましょう。人手がいるみたいですからね……」

「うむ、頼むよ……」

そうして男は漸く踵を返して出ていった。

お頭は男の後ろ姿をぼーっと眺めながら、

「さて、吉とでるか、凶とでるか……」

と一息はくよくに呟いた。

サトシたちは朝食を済ませると準備をし、ポケモンセンターを後にした。

「あとどれぐらいでキキョウシティなのかしら」

「そうだなあ・・・今日はアルフの遺跡辺りまで行けるとして・・・キキョウシティ到着は明日の朝から昼つてところかな」

ヒカリの疑問にサトシが答えた。サトシがアルフの遺跡という単語を発した瞬間ヒデオとミサトが少しピクツと動いたように見えたがサトシたちは気付かなかった。

「アルフの遺跡、パズルの様な石板、アンノーンを模したような図柄がある壁など、近年研究者の間でもアンノーンとの繋がりを示す可能性のある話題の遺跡ね」

コトネは説明するように付け加えた。

「ふうん・・・流石ジョウトの案内役ね」

ヒカリの誉め言葉にコトネは少し照れた。

そんな風に会話が続きながら旅は続いていた。

それからサトシたちは昼になると、適当なところで昼食をとった。

昨日といい、平和である。やはりサトシの考えは杞憂であったのか・

この平和がキキョウシティまで続くといい、サトシはそう考えていたのだが、

しかし、彼らは気付いていないのだ・・・彼らの後を追う大勢の男

たちの存在に・・・

「それじゃ、あとは頼むぞ。このずっと先に奴等がいるのだ」

「へえ、分かりやした。それで、報酬の方は・・・」

「勿論、きっちり払うさ。事がうまくいけばな」

「へっへっ、あんな若造どもに遅れをとるかよ。それは杞憂っても
んですぜ。」

「ふむ。それなら大丈夫そうだな」

「勿論ですとも。おい、野郎共、行くぞ！思う存分暴れてこようぜ
！」

そう言つて、厳つい風体の男たちはぞろぞろとその場を去り、サト
シたちの方へと向かつて行った。

その男たちの後ろ姿を眺めながら、ニヤリと微笑しながら、

「おい、サブ、いいか」

「はい」

「では、こっちも行くか」

そして、二人はその場から姿を消した。

さて、そんな計画が張り巡らされているとは思ってもよらないサトシ
たちは昼食をとりおえ、キキョウシティに向けて歩みを進めていた。

夏のジョウト地方だけあって、その日は気温が高く、サトシたちは時折手やハンカチで汗をぬぐっていた。雪国シンオウ出身のヒカリに関してはこの暑さに既に参っているようであった。

それから暫くたったとき、時刻は午後三時ぐらいであったろうかサトシの腰のモンスターボールがカタツと鳴った。サトシはそれに気付くと、急に真面目な顔付きになり、後ろを振り返った。

「サトシ、どうしたの」

ヒカリに問い掛けられてもサトシは暫く返さなかった。サトシはヒカリに顔を向けると、

「ヒカリ、二人を連れて先に行ってくれ、走るんだぞ」

「えっ、サトシ・・・」

その瞬間、ヒカリの言葉は途切れた。サトシとピカチュウが既に戦闘体制に入っていたからである。

「早く、早く行くだ、ヒカリ！早く！」

切羽詰まったサトシの言葉にヒカリはヒデオとミサトの手をとり、走り去った。

「・・・さて、どうするかな。ピカチュウ」

ヒカリたちが去った後、サトシは肩の相棒に語りかけた。ピカチュウが強く一鳴きするのを聞くと、

「足音から敵は少なくとも十八、九といったところか」

「それぐらいの数ならサトシとあたしで大丈夫ってことね」

「コトネ！何でここに・・・」

サトシはギョツとした顔つきでコトネを見つめた。コトネは戦闘体制に入りながらも、ふふんと笑うと、

「サトシだけには任せておけないってことね、これでも一応トレーナーのつもりよ。少しは力にはなるわよ」

コトネは一つウインクをサトシに向けてすると、サトシはしょうがないと言う風な顔付きになった。

「分かった。さっさと片付けてヒカリのもとに行くか！」

「了解！」

二人はモンスターボールを構えた。二人の顔の向こうからは成る程、男たちがぞろぞろと走ってきている。

「フシギダネ、君に決めた！」

「ライボルト、お願い！」

二人はモンスターボールを天高くあげると、モンスターボールからはポケモンが出てきた。

対する男たちもモンスターボールからポケモンを繰り出してきた。サトシの予想通り、数は十九である。

「コトネ、こんな風に敵の数が多いたときは、相手を瀕死にさせるよりも、状態異常なんかで弱らせる方がいいぞ。こんな風にね・・・」
フシギダネ！あまいかおりからどくどく！」

フシギダネは向かってくるポケモンたちに対し、背中の種から甘ったるい香りを放出した。その匂いを嗅いだポケモンたちは匂いに酔いしれた。

そして、次にフシギダネから放たれた毒々しい液体を浴びたにポケモンたちはその猛毒にのたうち回っていた。

「成る程、それじゃあたしも、ライボルト！でんじは！」

コトネも負けじとライボルトにでんじはを指示すると、ライボルトの電磁波を浴びたポケモンは痺れてうまく動けなくなっていた。

「やるなコトネ」

「あたしだって、トレーナーよ。まだまだそんなじよそこの奴には負けないってことね。ライボルト！ほうでん！」

ライボルトから放たれた電撃は複数のポケモンに当たり、その内の幾つかのポケモンが麻痺したようであった。

二人は絶妙な指示で相手はあまりうまく動けていないようであった。

「おい、なにやってる！あんなガキみたいな若造や女風情に遅れをとるんじゃない！」

リーダー風の男は部下らしい男たちをけしかけるものの、部下たちのポケモンはサトシとコトネの技に次々に動けなくなっていく。戦況はサトシたちが有利である。このまま行けば二人の勝利は目前

であった。しかし、

「ひ、ヒカリ……」

ふとサトシの頭のなかにはヒカリの姿が過った。何故かはわからない。だが、サトシの頭はぐるぐるとヒカリの事が離れなくなっていた。

ヒカリが危機に陥っている！サトシはそう直感した。サトシの額からツーツと一筋の汗が流れ落ちた。サトシはキツときつい顔でコトネの方へと顔を向けると、

「コトネ！ここは俺に任して、ヒカリのもとに行ってくれ！」

「えっ、サトシ、どうしたの」

「何でもいいから、早く、早くヒカリのもとへ、ヒカリが、ヒカリが危ない！」

コトネはどうしていいのか分からずにいると、サトシはモンスターボールを一つだし、

「リザードン！コトネを連れて早くヒカリの元へ、ヒカリが危ないんだ！急いで！」

リザードンは一つ頷くと、コトネを腕で抱き抱えると大きく飛翔した。

「えっ、ちよっとサトシー！」

ヒカリはリザードンに抱えられ飛びながらサトシの名を叫んだが、

サトシには届かず、サトシは再び男たちの方へと顔を向けると、

「さて、フシギダネ、ライボルト、ピカチュウ。此方をさっさと片付けるぞ！」

サトシの言葉にピカチュウたちは大きく頷いて、相手の方へと向かっていった。数はあともう少しである。

それでもサトシはヒカリの事が頭から離れなかった。サトシはヒカリの事を按じながら、下唇をきつく噛んだ。

ダブル主人公、西へ(4) (後書き)

ダブル主人公、西へ第四話でした！

今回は少し短めに・・・

サトシとコトネが闘っている間、ヒカリはどういった状況になっているのでしょうか？

次回も是非是非ご覧下さい！

最後になりますが、まだまだおかしな部分も多いかと存じますが、ご感想よろしくお願いいたします！

ダブル主人公、西へ(5) (前書き)

ダブル主人公、西へ第五話です！

ヒカリが危ない目にあっています。

コトネとサトシは間に合うのでしょうか？

さてさて、おかしな部分も過分にあると思いますが是非是非ご覧ください。

ダブル主人公、西へ(5)

サトシとコトネが男たちと闘っているその時、ヒカリは苦虫を噛み潰していた。

「くっ……」

状況は此方が不利だ。二対一ではあるものの、如何せん相手が強力であった。敵が繰り出したのは七体、その内の二体は瀕死にさせたものの、こちらもフーディン、バクフーン、トゲキッスが戦闘不能になってしまった。今だって、ポツチャマやマンムーがうまく耐えているが、いつ崩れるか分からない。

兎に角、今はサトシとコトネがいち早く帰ってくることを祈るしかないのだ。

ヒカリの後ろではヒデオとミサトが互いの手を握り、涙を溜めながら此方を見ていた。

男はヒカリに向けてニヤニヤした顔付きをしながら、

「ドサイドン！がんせきほう！」

ドサイドンから勢いよく放たれた巨大な岩石はヒカリに向けられていた。その事をいち早く悟ったマンムーが間にはいり、マンムーに巨大な岩石が直撃した。

「マンムー！」

ヒカリの悲痛な叫びが響き渡る。その響きと同時にズシンという巨体が倒れたときの地鳴りがなった。

マンムーが倒れた。ヒカリはマンムーに駆け寄りながら、

「ポツチャマ！ハイドロポンプ！」

ヒカリの掛け声にポツチャマは大きな鳴き声をあげ、激しい水流をドサイドンに向けて放とうとしたのだが、

「スピアー、ミサイルばり」

サブと呼ばれた男が指示したスピアーのミサイルばりによって狭ま
れた。

「アリアドス、いとをはく」

「きゃっ！」

ヒカリは悲鳴を一つあげた。アリアドスから放たれた糸によってヒ
カリとポツチャマはがんじがらめにされてしまったのだ。

その時、男は急にヒカリに向けて拍手を送った。

「ブラボー！ブラボー！君、コーディネーターにしてはここまでよ
おく頑張ったね。称賛に価するよ。ポケモンたちはよく育てられて
るしね。こんな見ず知らずの奴らの為にね、アカデミー賞ものの涙
をどうもありがとう・・・だが、ここまでだ・・・サブ！」

サブは懐から鈍い光を放つ物を取り出すと、ジリジリとヒカリに近
寄ってきた。

ヒデオとミサトはこの場面を眺めていただけであったが、いきなり
前に出て叫びだした。

「やめてくれ！あんなたちの狙いは私たちだろう！この人は関係ない！やめてくれ・・・」

「そうです！ヒカリさんは何にも関係ありません！殺すならあたしたちを殺さない！」

男はへへエと笑いながら、

「へへエ、んじゃあ、あんなたちがこいつの代わりに殺されるっていうのかい。よしよし、それじゃ、その願い、かなえてやるう」

そう言つて、男も懐から鈍い黒い光を放つものを彼らに向けた。ヒカリはきつときつい顔をしながら、

「だめよ！早く逃げなさい！どのみちこいつら全員殺す気なんだから！」

ヒカリの叫びに男はヒカリの方へ顔を向けると、晴れやかな笑みを見せた。

「分かってるじゃねえか。あんなもあの世に逝かせてやるからよ」

そう言つた男が二人にピストルを向けた。安全装置が外され、今まさに撃たれようとしたその時、巨大な火炎が男を襲つた。男は辛うじて避けたが、ピストルは燃えてしまった。

「っ・・・」

次はサブに向けた火炎が放たれた。かなり上空から放たれたものらしいが、火炎は見事にナイフを焼き付くした。

「なんだ・・・」

男が呟いた瞬間、再び火炎が放たれた。火炎はサブのスピアーとアリアドスを飲み込んだ。スピアーとアリアドスはたまらずに倒れこむ。

「ヒカリーン！」

自身を呼ぶ声にヒカリは見上げるとそこには、リザードンに抱き抱えられたコトネの姿があった。

「コトネ！」

ヒカリが嬉しそうに叫んだ。リザードンがヒカリの側に着陸し、コトネを降ろすとリザードンは男の方へ顔を向け、大きな咆哮をあげた。

「コトネ、どうして・・・」

ヒカリはコトネからアリアドスの糸を切ってもらいながら尋ねた。

「サトシがね、ヒカリンが心配だから行ってってくれて、すごく焦った様子でね。もう、無理矢理リザードンに抱かされたんだから」

「そう、サトシが・・・」

ヒカリの返事にコトネはウインクを見せながら、

「ふふん。ヒカリンのことになると。サトシは気が気じゃなくなる

みたいね。お陰で偉い目にあったわよ。でも……サトシの予想は当たったみたいね」

そう言つて、コトネは男とサブを見比べた。

糸を解かれたヒカリとポツチャマも男とサブを睨む。

「ヒカリン、久しぶりにやっちゃんいますか。メガニウム！」

「OK！行くわよポツチャマ！」

ヒカリとコトネは互いを見合い、リザードンとメガニウム、ポツチャマも大きく咆哮した。

「ふう、やっと片付いた」

サトシは一息つくと回りを見渡した。回りには気絶した男たちやポケモンでいっぱいであった。

「早くヒカリのもとに行かないと……ガブリアス！」

サトシが掲げたモンスターボールからはマツハポケモン、ガブリアスが繰り出された。

「ガブリアス！ヒカリのもとに早く、早く行つてくれ！頼む！」

サトシはピカチュウ、ライボルトと共にガブリアスに乗り、指示すると、ガブリアスは一つ頷き、高速で駆け抜け出した。

「ヒカリ・・・」

サトシはガブリアスの上で呟いた。

「くっ、チキショー！」

ヒカリとコトネはその間にもポケモンを二体撃退し、男の手持ちはあとドサイドンのみとなっていた。もはや勝利は目前である、二人はそう感じた。

「メガニウム！マジカルリーフ！」

「ポツチャマ！ハイドロポンプ！」

ドサイドンに向けて弱点である草、水の技が放たれたのだが、

「ドサイドン、あなをほってかわすんだ！」

ドサイドンは地底に潜り、姿を隠してしまった。メガニウムとポツチャマの技は地面に虚しく当たり消えた。

「くっ、いつたいどこから・・・」

コトネは下唇を噛みながら呟いた。その瞬間、

「メガホーン！」

その掛け声にメガニウムな呆気にとられた。ドサイドンはメガニウ

ムの丁度真後ろに姿を現したのである。幾らか大きく見えたドサイドンの角の一撃はメガニウムに直撃し、メガニウムは吹っ飛ばされてしまった。

「メガニウム！」

悲痛に叫んだが、メガニウムはそれでも立ち上がり、コトネはホッと胸を撫で下ろした。
その時、

「まだまだこれからよ、ドサイドン！あの忌々しいリザードンにがんせきほうー！」

ヒカリのマンムーを倒した巨大な岩石が再びドサイドンによって作られ、リザードンに向けて発射された。

「だめー！リザードン、・・・」

「リザードン！飛翔してりゅうのはどうー！」

指示しようとしたヒカリの言葉を遮って、何者かがリザードンに指示をした。リザードンは素直に指示に従い、巨大な岩石を飛翔してかわすと、ドサイドンに向けてエメラルドのごとき輝く波動を放った。

「ど、ドサイドン」

この攻撃にドサイドンは堪らずに前のめりに突っ伏した。

「くっ・・・」

男はまだモンスターボールを掲げようとしたが、

「無駄なあがきはよせ！もう勝負はついている！」

「さ、サトシ……」

ヒカリが声のする方を向くとそこにはサトシがガブリアスから降りている姿があった。

男はちよっ、と舌打ちすると踵を返し、逃げようとしたが、

「フシギダネ、つるのむち！」

フシギダネのつるで男は足払いし、がんにがらめにされた。

「ちっくしょう！」

「今、警察に連絡したわ。そのうち来るって……」

コトネがサトシに話し掛けると、サトシは一つ頷き、ヒデオとミサトの方に顔を向けた。

ヒデオとミサトは座り込んで、呆けた顔をしていた。

その時、あー！とヒカリが大きな叫びをあげた。

「どうした、ヒカリ！」

「いないのよ、もう一人、サブってやつが！」

「本当だ、いない……」

ヒカリの一言にコトネも辺りを見渡すが、サブの姿はどこにもなかった。

「逃げられた、か・・・」

「ごめんね、サトシ」

申し訳なさそうに頭を下げるヒカリにサトシは柔らかい笑みを見せながら、

「ヒカリが謝ることじゃないよ。ヒカリが無事だから良かったじゃないか・・・本当に良かったよ」

サトシの言葉にヒカリは嬉しそうな顔をした。

「うん！ありがとう、サトシ！あたしは大丈夫だよ！」

「ちょっと、あたしたちの無事はどうでもいいわけ」

「えっ・・・」

サトシとヒカリが声のする方を向くと、コトネがヒデオとミサトを立ち上げらせながらこちらをジトーツと見ていたところであった。

「いや、いや。コトネだって、勿論、ヒデオさんとミサトさんだって無事で良かったって思ってるぜ！」

サトシは慌てながらコトネに返していたが、コトネはプツと吹き出すと、

「冗談よ、冗談。でも良かったわねサトシ、ヒカリが無事で」

冗談といいつつもコトネはそれでもサトシを茶化してた。

「いやだから、コトネだって無事で良かったと・・・」

頬を真っ赤に染めながら取り繕うサトシの姿を見て、ヒカリとコトネ、ポケモンたちは大いに笑った。

「な、なんだよ！そんなに笑うことないじゃんか！」

笑いにされたサトシは頬を膨らませそっぽを向きながら拗ねた。ヒカリは笑いながらも、サトシの側に来ると、

「あはは、ごめんね、サトシ。でも、ありがとう、あたし嬉しかったよ。サトシが心配してくれてさ、お陰で助かったんだから」

「ヒカリ・・・どういたしまして」

ヒカリの言葉にサトシは頬をポリポリと掻きながら返答した。

「あら、サトシったら照れてるってことね、可愛い」

「いや、だから、もう！」

コトネがもう一度サトシを茶化すと、辺りはもう一度笑いの渦に巻き込まれた。

さっきのバトルの時とは打ってかわって和んでいる。しかし、その和みを取り払う化のように、

「あの！あなたたちにお話があります！」

とビデオがフシギダネのつるでがんじがらめにされている男を指差しながら叫びだした。

ダブル主人公、西へ(5) (後書き)

ダブル主人公、第五話でした！

大勢の敵と戦う、ヒロインのピンチなど、少し時代劇みたいに書きたいなんて思ったのですが・・・難しいですね。

まだまだおかしな部分も多いかと存じますが、次回も是非是非ご覧ください。

最後になりますが、ご感想宜しくお願い致します！

ダブル主人公、西へ(6) (前書き)

ダブル主人公、西へ第六話です！

この話でヒデオとミサトの秘密が判明します。

そして、以前に登場したキャラクターが登場致します！

さてさて、おかしな部分も多いかと思いますが、是非是非ご覧ください！
さい！

ダブル主人公、西へ（6）

「あの！あなたたちにお話があります！」

ヒデオの一言にその場にいた全員がヒデオの方へ顔を向けた。全員の視線が集められたことにヒデオは少し畏縮したのか、顔を俯かせた。

「あなた・・・」

ミサトがヒデオの手をすつと握り、ヒデオは顔をあげ、深呼吸した。そんなヒデオにサトシは柔らかい笑みを見せ、

「ヒデオさん。ゆっくりで大丈夫ですから・・・」

「はい、ありがとうございます。あの、それで、今まで黙っていて申し訳無いのですが、実は・・・私たち夫婦はアルフ遺跡考古学博物館の学芸員なんです・・・」

「あ、あのアルフ遺跡考古学博物館の・・・」

コトネが驚いたように呟いた。

「はい、実は私たちはそこでアルフの遺跡とアンノーンについて研究していました」

ふうむという感嘆の声が起きたが、ヒデオは気にせず続けた。

「アルフの遺跡とアンノーンが繋がりをもっていることは皆さんも

「ご存知かと思いますが、私たちは、アルフの遺跡にはアンノーンが生息するという考えを持っているのです」

「でもアンノーンの生息地って・・・」

ヒカリがおうむ返しに尋ねた。ヒデオはヒカリの方へ一旦顔を向けると、

「そうです。アンノーンの生息地には様々な説があります、異次元何て言う人もいますし、中には既に絶滅した、なんて言う人がいます。ですが、アンノーンは未だにこちらに発見例があります。その発見した場所を統計すると、ここアルフの遺跡付近での発見例が統計的に優位であるという結論にたっしたのです」

ヒデオは一旦言葉を区切り、ミサトはヒデオにペットボトルを渡した。

「はい、あなた」

「ああ、ありがとう・・・」

ヒデオはそれを一口飲むと自分の側におき、話を続けた。

「ですが、発見例の統計が優位だからと言って、アンノーンがアルフの遺跡に生息する確証はありません。ですから、ここアルフの遺跡で研究を続けてました」

「そ、それでアンノーンは見つかったのですか」

今度はコトネが尋ねるとヒデオは首を降り、

「いや、未だに発見は出来てはおりません。ですが、手掛かりは発見したのです」

「手掛かり、ですか」

今度はサトシが尋ねた。

「はい、一つはアルフの遺跡各所に存在するあのパズルのような石板です」

「ああ、あの石板」

「あの石板は我々の先祖がアンノーンとの繋がりを示すために造り上げられたものではないかと、その証拠に、石板の周りにはアンノーンの形が掘られています。この石板さえ解ければ、アンノーンに関する何かがわかるはずですよ。まだ、可能性の段階ですが・・・」

「それで、もう一つは・・・」

「もう一つは、これですよ」

そう言ってヒデオはポケギアを取り出した。そして徐にラジオのアイコンを中央に合わせると、不思議な音色が流れてきた。

「何、この音色」

「解りません。ですが、この音色が聞こえるのはここだけなんです。これを解析したところ、ある特定の周波数で流されていることが解りました」

「特定の、周波数」

「ええ、恐らく、これも何かしらアンノーンに関係があると考えています」

「成る程、・・・しかし、それで何故あなた方は彼等に追われていたんですか」

サトシは疑問をヒデオに吹き掛けた。彼等にしてみたら、アンノーンも気になるが、彼等が何故追われていたかが気になるのだ。

「はあ、失礼しました。最初に申せばよかったです、如何せん自分の研究のことになるとつい・・・おっと、また話が逸れましたね。実はその研究に国や地方からも援助を頂きましたが、とある企業からも研究資金を援助頂きまして、彼はその企業の方なんです」

ヒデオはフシギダネに縛られている男をもう一度指差して言った。男はそっぽを向いている。

「企業、ですか」

「はい、えっと・・・あれは何て名前だったかな・・・」

「R・カンパニーよ、あなた」

考えるヒデオにミサトが口を出した。

「そうそう、R・カンパニーね。そう、それでその会社はポケモンの謎に関してえらく興味があるらしくて、援助を頂くことになっ

たんです。その取締役らしい方も実に気さくな方で我々も大変嬉しかったんです。」

ヒデオに代わり、今度はミサトが話始めた。

「それで、暫く彼等の手伝いなんかも受けながら、進めていったんですが・・・ある夜の事です。その日私たちはたまたま研究所で寝泊まりをしていたんですが、私が夜起きると、遺跡の方からさっきの音色と大勢の人たちの声を聞いたんです」

「成る程、それで」

「それで、この人を起こして二人で見に行っただんです。泥棒だったら大変ですから・・・そしたら、変な黒服を来た男たちがパズルの前で、ラジオの音色を流しながら、何かしらやっている姿を見たんです・・・その中にはいつも私たちを気遣ってくれたあの人の姿もあっただんです！」

ミサトは叫びながら立ち上がり、男を指差した。その目はギラギラと怒りの炎がたぎっていた。

ヒデオはミサトを宥めながら座らせると、

「しかし、私たちは見つかってしまいました。何とか逃げ出してキョウシティの警察に駆け込んだんですが、無駄でした。鶴の一声とはあのことでしょっかね」

「成る程、しかし、それでどうしてエンジュシティに来たんですか」

コトネの質問に、ヒデオは大きく息を吐くと、

「それで私たちはエンジュシティに住む、取締役の方に話そうと思つて、追撃を逃れながら漸くの事で、エンジュシティの家に着いたのですが、そこには、あの男が取締役と話していたんです！私たちは慌てて逃げ出しました。ですが、見つかってしまい、そこをサトシさんに助けて頂いたんです……」

「それで、私たちと一緒に来たんですね」

「はい、申し訳ないとは思いましたが、サトシさん。あなたがマサラタウンへ行くという話を聞いて、マサラタウンのオーキド博士に話を聞いてもらおうとしたんです」

「それじゃ、キキョウシティに行くというのは……」

「嘘なんです。ごめんなさい……もう、誰を信じていいか分からなくて……」

ヒデオとミサトはヒカリの言葉に申し訳なさそうに頭を下げた。そして暫くの間、辺りはシーンと静まり返った。その静寂を遮るようにヒカリが、

「でも、こいつ一体何者なのかしら」

ヒカリが男の方を向きながら、疑問を口にすると、

「うん、確かにきになるわね。だけど、それは警察の仕事ってことね」

「大丈夫でしょうか……あのとき、直ぐに追い出されたのですが・

……」

ミサトは心配そうにサトシの顔を見上げると、サトシは目に優しい光を称えながら、笑顔で語りかけた。

「大丈夫ですよ！とっても信頼できる人を呼びましたから！」

「信頼できる人・・・誰かしら」

ヒカリの疑問にサトシは悪戯っぽい笑顔を見せると、

「ヒカリも知っている人だよ」

「あたしの知っている人」

ヒカリは暫く思索していたが、結局分からなかった。そのときに、サイレンの鳴る音がサトシたちに聞こえてきた。

「噂をすれば影だね」

サトシは笑顔を称えながら、パトカーの方を向いていた。サイレンが段々と近付いてきて、サトシたちの近くで数台の車が止まると、その中からは初老の紳士が出てきた。

「せ、先生！」

一つの車から出てきたのはウタ氏であった。ヒカリはびっくりしたように、声を荒げてしまった。

「えっ、ヒカリン知ってるの」

「う、うん。前にサトシと旅したときにお世話になったの・・・先生、お久しぶりです！」

ウタ氏はヒカリに柔らかい笑みを見せながら、返事を返した。

「ああ、ヒカリくん、久しぶりだね。元気そうだなによりだよ」

「先生こそ、元気そうだなによりです！」

「ああ、ありがとう。大分白いのが増えたがね」

ハハハと笑って、ウタ氏は頭を触った。そのときにサトシがヒデオとミサトを引き連れてウタ氏の前にたった。

「先生」

「ああ、サトシくん。連絡ありがとうね。ああ、あなたたちがヒデオくんとミサトさんだね。話はサトシくんに聞いたよ。面倒だろうが、もう一度私に話して頂けませんか。いや、勿論、あとでいいから」

「はい・・・あの・・・」

ミサトは互いに顔を見合せ、少し顔を俯かせながらおすおすとヒデオの裾を引っ張った。

「ああ、この方なら大丈夫ですよ。俺が保証しますよ！」

サトシが胸を張りながら、ヒデオとミサトに言った。ウタ氏はサトシの言葉に柔らかい笑みを見せた。

「申し遅れたね。私はウタヘイハチ口ウ。よろしく頼みますよ」

「ウタ先生なら大丈夫ですよ！あたしからも保証しますよ」

サトシに続いてヒカリも二人に胸を張りながら答えた。二人は暫くきよとんとした顔をしていたが、次第に覚悟を決めたように、

「はい、ウタ先生、宜しくお願い致します！」

「あつはつは、二人とも、そんなに固くなることないよ。物好きな年寄りに話すと思って、気楽に話して頂けますかな」

ウタ氏の笑いに二人は少し笑みを見せた。

ウタ氏は二人の笑みを見ると、うんうんと頷き、

「それじゃあ、行きましようか、疲れたでしょう。まずはキキョウシテイで休みますか」

「はい、そうですね・・・宜しくお願いします」

「うん。じゃあ、車を出すよ。君たちはどうするかね」

ウタ氏は振り返り、サトシたちに尋ねた。サトシたちは少し三人で話した後に、

「はい、それでは宜しくお願い致します！」

サトシは大きくはつきりと答えた。

「よし、それじゃあ、一緒に行こう。乗ろっか」

「はい！」

そうして、六人は車に乗り込むと、キキョウシティに向けて車は向かって走っていった。

ダブル主人公、西へ(6) (後書き)

二人の秘密でした！

少し長かったこの事件、これで一応、終演です！
でも、次回もまだまだジョウト地方です！

次回も是非是非ご覧ください！
最後にご感想宜しくお願い致します！

仲良きことは、美しきかな（前書き）

仲良きことは、美しきかなです！

えー、事件後、別れの際のサトシたちとウタ氏、ヒデオ夫婦の会話です！

サトシとヒカリについて少し触れてみました。

もしかしたら少しおかしな部分があるかと存じますが、宜しくお願
いいたします。

仲良きことは、美しきかな

サトシたちがウタ氏とともにキキョウシティのホテルで一泊した次の日の朝、この日は少し曇りがかっており、空はねずみ色に広がっていた。しかし、天気予報では、雨は降らないらしい。

サトシたち三人はホテルの前でウタ氏、ヒデオ夫婦に暫しの別れを告げていた。

「サトシさん、ヒカリさん、コトネさん、本当にご迷惑お掛け致しました。もう、本当になんと言ってよいやら・・・」

ヒデオ夫婦は頭を垂れ、辟易しながらサトシたちに言葉をかけた。

サトシたちは顔を見合せると、ニコツと笑って、

「いいんですよ。お二人が無事でしたし、こちらも皆無事でした。何も言うことはありませんよ。それに・・・短い間でしたけど、俺たち楽しかったですよ！」

「そうですよ！だから、顔を上げてください」

サトシとヒカリの言葉にヒデオ夫婦は顔を上げた。二人の眼は少し潤んでいたように見えた。

「あ、ありがとうございます・・・」

「ヒデオさん、ミサトさん、アンノーンとアルフの遺跡の研究、頑張ってくださいね。あたしも応援しますから。わかったらあたしに連絡下さいね」

コトネにしてみれば、彼らの研究には興味があつた。もし、アルフの遺跡にアンノーンが生息することが分かれば、それはジョウト地方の新しいアドバンテージになるのだ。コトネの眼は輝いていた。

「分かりました、コトネさん。その時は、真つ先に一報いれますよ」
「よろしくお願いいたします」

コトネは二人に頭を下げ、礼をした。

「先生、二人のことよろしく願ひします」

「ああ、分かつたよサトシくん、二人のことは任せなさい」

「でも、残念だわ。首領に逃げられたなんて・・・」

そう、ヒデオ夫婦の証言からウタ氏等が、取締役の家に向かつたが時既に遅し、家はもぬけの殻であつた。R・カンパニーというのも架空の会社らしく、存在すらなかつた。唯一の手掛かりは捕らえられた男だが、未だに黙秘権を行使しているらしく、今の段階では彼等が何者なのかは不明であつた。

「あのサブつて男を逃したのが痛かつたつてことね」

コトネの言葉に皆がシーンと静まり返つた。やはり、逃したのが悔しいらしく、サトシは唇を噛みしめていた。
そんなサトシたちにウタ氏は優しく微笑んで、

「いや、君たちはよくやつてくれたよ。ホシの一人は捕まつたし、有力な目撃者の命も助かつた。此方としては感謝してるよ。本当に

ありがとう」

ウタ氏はサトシたちに白髪混じりの頭を深々と下げた。その様子にサトシたちはあたふたとしながら、

「いいんですよ、当然のことなんですから、なあ」

「ええ、そうですね。そんな風にされたらあたしたち、対応に困ってしまいますよ」

そう言われてウタ氏は頭を上げて、二人の顔を見比べるとニヤツと笑った。

そんなとき、コトネが急に声をかけた。

「それじゃあ、そろそろ行きましょうか、サトシ、ヒカリン」

「ああ、そうか。それじゃあ、先生、これで失礼します」

サトシはウタ氏にペコツと一礼した。

「ああ、そうか、うん、達者でな。何か分かったら連絡するから・・・」

「はい、分かりました。先生もお元気で・・・」

「ああ、分かった。サトシくん、ヒカリンくんといつまでも仲良くな

ウタ氏はニヤニヤ笑いながらサトシに声をかけた。そんなウタ氏に對して、サトシは元氣よく笑顔で返事を返した。

「はい、勿論ですよ！先生、俺たちはいつだって仲良しですよ。なあ」

サトシに問われたヒカリはこれまた満面の笑みを見せながら、

「ええ、そうですよ。サトシとあたしはいつ何時も仲良しですよ。先生だって知ってるじゃないですか」

ウタ氏は笑いながら言う二人に啞然としながら、

「いや、そういう意味ではないんだが・・・まあ、いいだろう！仲良きことは美しきかな、てね」

ウタ氏はそれでも少しスッキリしなかった。サトシたちの隣ではコトネが呆れたように溜め息を吐いているし、ヒデオは少し考えるように頭を掻いており、ミサトはクスクス笑っていた。

「ミサトさん、ヒデオさんと未永くお幸せに」

ヒカリはクスクス笑うミサトに少し疑念を持ちながら、ミサトに言った。

「ええ、ありがとう・・・あなたもサトシさんとね・・・」

ミサトの言葉の最後の方は少し小声で喋られており、ヒカリには聞き取れなかった。

「えっ、なんですか」

「いや、何でもないんですよ。ヒカリさんもお元気で」

「はい、ありがとうございます！」

ヒカリとミサトの会話が終わるとサトシが再び声をかけた。

「それじゃあ、俺たち、もう行きます。皆さん、またいつか」

「ああ、またな、サトシくん」

「本当にお世話になりました。今度来たときは是非アルフの遺跡に、ご案内致します」

「ありがとうございます！研究、頑張ってくださいね！」

「はい、頑張ります！」

「それじゃあ、また・・・」

そう言って、サトシたちは歩き出した。先ずはコトネの故郷、ワカバタウンへと・・・

その様子をウタ氏、ヒデオ夫婦はいつまでも見つめていた。そんなとき、ミサトがふと呟いた。

「あの二人、うまくいけばいいわね・・・」

「ええっ・・・」

ヒデオは聞きにくかったのか、ミサトに聞き返した。ミサトはそんなヒデオに気づかず、彼等を見つめていた。

隣ではそんな様子を見ていたウタ氏がふむと笑みを見せながら二人

を見て、

「それじゃあ、また、宜しくお願いいたしますよ」

と言うと、二人はウタ氏の方へ顔を向けて真剣な表情になった。

「此方こそ宜しくお願いいたします」

そう言つて、三人もアルフの遺跡へと歩き出した。

「ねえ、どうして先生はあんなこと言ったのかしら」

ヒカリが疑問を口に出すと、サトシが聞き返した。

「あんなことって」

「ほら、ずっと仲良くねなんてさ」

少し考えるような格好をとるヒカリにサトシは笑顔で答えた。

「そりゃあ、俺たちが仲良いからさ、このままずっと仲良くいれよつていう先生なりの思い遣りなんだよ、きつと」

サトシの笑顔の発言にコトネは少しずつこけそうになったが、ヒカリは理解したように、成る程と満面の笑みを見せながら言った。

「でも、それ余計なお節介よね、あたしたち、言われなくても仲良しだもんね!」

「ああ、勿論だぜ！」

そう言つて、二人は互いに顔を見合いながら、笑っていた。

コトネはそんな二人の顔を見比べながら、本当に面白い二人だなとつくづく思っていた。

二人はそんなコトネの視線に気づいたのか、二人してコトネの顔を見ると、

「どうしたのよ、コトネ。あたしたちの顔に何かついてる」

「えっ……」

コトネはいきなり話しかけられたので、少々呆気にとられた。

「さっきから、ニヤニヤしながら俺たちの顔を見ているぞ」

「いや、そんなことないわよ。ただ二人は本当に仲良しだなあと思つてさ、あはは」

コトネは少し無理に笑つて見せた。それでもジイツと見てくる二人にコトネは流石に居心地が悪くなったのか、話題を変えた。

「それよりも、次につく町にはね、美味しい木の実グリルを出すことで有名なお店があるのよ」

コトネの美味しい木の実グリルという発言に二人は目を輝かせた。

「えっ、美味しい木の実グリル、俺早く食べたい！なっ、ピカチュウ、早く食べたいだろ」

「あたしもあたしも、ねえ、ポツチャマ」

二人の言葉にそれぞれの相棒は嬉しそうに一鳴きした。

「じゃあ、決まりだな！早く行こうぜ！」

サトシはいきなり走り出した。ヒカリがそれを追いかけるように、

「あー、待ってよサトシ！もう！コトネも行こっ」

「OKってことね」

ヒカリとコトネはサトシを追いかけるように、新しい町へと走って行った。

仲良きことは、美しきかな（後書き）

仲良きことは、美しきかなでした！

まあ、あの二人は年を重ねても内面的にはあまり変わらないと思います。きっと・・・

でも、二人はとてとてもとても仲良しです！きっとそこから恋・・・ゲフンゲフン！

さて、次回も宜しくお願いいたします！

イヴとの会話（前書き）

イヴとの会話です！

タイトル通り、リボンシンジケートのイヴが声のみ登場致します。
サトシとヒカリ、イヴとの会話が中心となります。

今回もおかしな部分が多いかと存じますが、是非是非ご覧ください！
宜しく願います！

イヴとの会話

「うふふ、それでねー・・・」

ヒカリは右手にポケギアを持ちながら、誰かと会話をしていた。

此処はジョウト地方ヨシノシティからワカバタウンの間である。ウタ氏たちと別れてからサトシたちは一週間近くかけて、此処までたどり着いたのである。此処ではワカバタウンまでの暫しの休憩をとっていた。

「へえー、そんなことがあったんだ、それは面白いお客さんねえ」

「ええ、本当に変わった方だなんて思っていたら、その人はあのリチャード・シン普森だったんです！」

電話の相手の言葉を聞いてヒカリは少し驚いたように、声をあげたと思ったら、次に感嘆したような声をあげた。

「えっ！あの喜劇王のシン普森が・・・すごいはあたしも見たかったわあ」

「ええ、あたしもびっくりしちゃって、見た目は変なおじさんでしたから・・・でもそう聞くと、あの口髭なんかはまさにシン普森でしたよ」

「わあ・・・流石リボンシンジケート、お客さんもすごいわね・・・イヴもすごいわあ、そんなお客さんといつも対応してるんだから」

ヒカリは感心したように、話すと、イヴは電話の先で少し照れたよ

うに、慌てて話し出した。

「い、いや、そ、そんなことはありませんよ、ひ、ヒカリさんの方が、わ、私は凄いと思います……」

イヴの言葉にヒカリは少し怪訝そうな顔になった。

「もうう、ヒカリさんじゃなくて、ヒ・カ・リでしょ!」

「え、えーと……それじゃあ……ひ、ヒカリ」

「そう!それでいいのよ!」

最後の言葉は小声で呼ばれていたが、ヒカリはそれでも嬉しそうに返した。

そんなとき、

「おーい、ヒカリー!何してるんだ!」

離れたところから自信を呼ぶ声がし、ヒカリは声のする方へと顔を向けた。

「あ、サトシー!」

「えっ、サトシさん」

ヒカリがサトシを呼んだとき、イヴは少し驚いたように言葉を発したが、ヒカリには聞こえなかった。

「あれ、コトネはどうしたの」

「ああ、コトネは向こうで話してるよ。同じワカバタウンの子とあったからさ」

「ふーん、そう」

「ところで誰と話しているんだ」

サトシはヒカリに尋ねたところ、ヒカリは最初こそきょとんとした顔をしていたが、直ぐに笑顔になり、

「ああ、あたしがリボンシンジケートってところでお世話になった人なの」

「り、リボンシンジケート」

リボンシンジケートの言葉にサトシは弾かれたように驚いた。そんなサトシの様子をヒカリが怪訝そうに見ていると、ポケギアから嬉しそうな声が聞こえた。

「あの、サトシさん、お久しぶりです！イヴです、イヴ・アームストロングです！」

イヴに話しかけて、サトシはハツとしたが、直ぐに満面の笑みを見せると、

「あ、ああ！久しぶり！元気だったか」

「はい、私は元気です！サトシさんもお元気ですか」

「ああ！俺も元気だよ！」

二人はそれから少し会話していたが、ヒカリは怪訝そうな顔をしながら、サトシに尋ねた。

「ねえ、サトシ、イヴさんとはどういう・・・というか、サトシ、リゾートエリアに行ったことあるの」

ヒカリに尋ねられたサトシは、少し考えていたが、

「ああ、前に一度行ったことあるよ、イヴさんともその時知り合っただよ」

「サトシさんには、本当にお世話になりました・・・私ども、全員感謝しているのですよ。サトシさんは我がリボンシンジケートの特別会員なのです」

ヒカリは本当に驚いているようで、声が出てこなかった。その様子にサトシは眉間に眉をよせて、

「ヒカリ、どうした・・・大丈夫か」

「えっ・・・」

ヒカリはいきなり声をかけられて少しすっとんきょうな声をあげた。

「あ、ああ、ごめん。びっくりしちゃって・・・」

「いやでも、私の方がびっくり致しました。サトシさんとヒカリさ・・・ヒカリはどんなご関係でいらっしやるのですか」

ポケギアから聞こえてきたイヴの質問にサトシは笑顔で答えた。

「ヒカリとは昔一緒に旅をして、今回ジョウトのエンジュシティで久しぶりに出会ったんですよ」

「へえ、そうなんですか」

イヴの言葉には抑揚があまり感じられなかった。

そのとき、ポケギアからイヴを呼ぶ声らしきものが聞こえてきた。

「ああ、オーナーに呼ばれたので、それでは、ヒカリさ……ヒカリ、また」

「ええ、イヴ、 magari ボンシンジケートに行くから、そのときはよろしくね」

「俺も行くから、そのときはよろしくな」

ヒカリとサトシがポケギアに声をかけると、ポケギアからはとても嬉しそうな声が返ってきた。

「はい！お二方がくるのを待っています！」

「レディ・コンテストにも宜しくね」

「リョウスケさんとチトセさんにも宜しくな」

ヒカリの言葉の途中でサトシが割り込んできた。

「はい、お伝えしておきます。それでは・・・」

「うん、またね・・・」

ヒカリはそう言ってポケギアの電話を切った。切ったときにサトシはヒカリに声をかけた。

「いや、びっくりしたぜ。ヒカリがイヴと知り合いだなんて」

「あたしもびっくりしたわよ。イヴがいきなりサトシを呼ぶんだもの、それにリボンシンジケートの特別会員だなんて・・・何があったの」

ヒカリの質問にサトシは、はははと少し笑いながら、

「まあ、色々あったんだが、長くなるから、また今度話すよ」

「わかったわ・・・ねえ、今度リボンシンジケートに行くときは一緒に行くこうね」

「ああ、勿論、一緒に行くこうぜ！」

それから、二人は互いに顔を見合って笑いあった。その姿を見ている人が一人・・・

「ああ、もう、少し話し込んだじゃった。サトシに怒られるってことね」

コトネは腕時計を見ながら、少し不安そうな面持ちで走っていた。その内にサトシとヒカリらしき人物が見えたので、

「あつ、ヒカリ……」

と言いかけて言うのを止めた。コトネの目の先には見合いながら笑いあう二人がいた。コトネはやれやれという顔を見ると、

「あれで、何にもないからすごいわよね」

と言うと、今度は本当にヒカリの名を呼びながら二人のもとにかけ走って行った。

イヴとの会話（後書き）

イヴとの会話でした！

踊り子とフィデリオの最後でヒカリとイヴがポケギアの番号を交換していたので、これは一度会話させようということを書いてみました！

あと、サトシとリゾートエリアの面々は知り合いだという設定なのですが、それを書きたかつたんです、実は・・・

サトシとリゾートエリアの面々との繋がりはまたいつか・・・

では、次回も宜しくお願いいたします！

まだまだ拙い文章ではございますが、ご感想宜しくお願いいたします！

狭間の滝で（前書き）

狭間の滝で、です！

今回も、サトシとヒカリに焦点を合わせました。

舞台はカントーとジョウトの中間地点、トージョウの滝です！

それでは、是非是非ご覧ください！

狭間の滝で

「ヒカリ、大丈夫か」

サトシは後ろでよたよたと歩いているヒカリに心配そうな声をかけた。

「うん、此ぐらい余裕よ、大丈夫、大丈夫」

サトシたちは現在、大きな滝の近辺に架かっている木造の橋を渡っていた。その橋は如何にも脆そうで、落ちたら滝の下までまっ逆さまである。

ここはカントー地方とジョウト地方との境目にあるトージョウの滝と呼ばれる場所であった。

昔はジョウトからカントーに行くときは、ここを通るしかなかったが、現在は交通が発達しているため、ここいらは錆びるばかりであった。

ヒカリは橋のロープを握りながらよたよたと歩いていた。軽いポケモンとは楽なもので、ピカチュウとポツチャマは早々と向こう側へとたどり着いて、二人を急かしている。

「大丈夫、大丈夫。絶対落ちないから・・・落ち着いて・・・」

ヒカリは自分に言い聞かせながら、一步一步歩み出して行った。

「おーい、ヒカリー！大丈夫かー！ゆっくりでいいからなー！」

その声にヒカリが前を向くと、サトシが向こう側から心配そうに自

分を眺めている姿があった。

「ごめん、サトシ！すぐいくから！」

ヒカリはそう言うと、また一歩一歩歩み出して行った。

こういう危なそうな橋が絡む物語というのは、そんな風に歩いてみると、突然ロープが切れて橋が崩れるというのがお決まりのようであるが、今回もそんなお決まりな展開がヒカリには待ち受けていたのだ。

ヒカリが橋の真ん中を過ぎた辺りで、ブチツという音がサトシとヒカリに聞こえてきた。

そこからは段々と崩れる音が激しくなり、ヒカリは悲鳴をあげる前には宙を舞っていた。

「くっ、ヒカリ！」

サトシはピカチュウたちが止める前に自身も飛び降りた。ピカチュウとポツチャマが悲痛な叫びをあげる。

「ヒカリー！掴まれ！」

「さ、サトシ！」

二人は上手く空中で手を握ると、サトシはそのままヒカリを自分の方へ抱き寄せ、片手でモンスターボールの開閉スイッチを押した。すると、ボールからリザードンが飛び出して、二人を上手く背中に乗せることに成功した。

二人はリザードンの背中でほうと大きく息を吐いた。そして思い思い感想を述べた。

「た、助かったー」

「いやあ、橋が崩れたときにはどうなるかと思ったよ・・・」

ヒカリは一息吐いた後、自分が置かれている状況を思い、口に出した。

「あ、あのさ、サトシ・・・そろそろ放してくれないかな・・・ちよつと、苦しいよ・・・」

そう、サトシは未だにヒカリをギュツと抱き寄せていたのだ。サトシは、

「あつ、う、ごめん・・・」

と言うと、ヒカリを放した。それからリザードンが向こう側へと下るすまで沈黙が流れた。向こう側に二人は降りると、二人の相棒が真っ先に駆け寄り、飛び付いてきた。

「ごめんね、ポツチャマ、心配かけちゃって」

「ああ、悪かったよ、ピカチュウ。ごめん、心配かけて」

二人は飛び付いてきた相棒の文句にただただ謝っていた。サトシはピカチュウを肩に乗せると、

「ありがとう、リザードン」

と言って、リザードンをボールへと戻した。そして、

「んじゃ、行きますか」

とサトシが言うと、再び二人は歩き出した。暫く歩いた時のこと、ヒカリが徐に先程の出来事を話題に出した。

「さっき、あたしが橋が崩れて落ちたとき、サトシも一緒になって落ちるんだもん。もう、無茶するんだから、サトシは」

ヒカリが急にそんな発言をしたものだから、サトシはギョツとした顔をして、ヒカリの顔をまじまじと見つめた。

「い、いや、だって、目の前でいきなりヒカリが落ちるから、俺、本当にびっくりして・・・だから・・・」

あたふたしながらヒカリに何を言おうか考えるサトシを見て、ヒカリはクスツと笑った。そんなヒカリの姿をみたサトシは渋面を作ると、

「な、何だよヒカリ。からかってるのかよ」

「あはは、ごめんごめん、サトシったら物凄く真剣に考えるんだもの・・・」

ヒカリはサトシに謝りつつも、未だにクスクス笑っていた。そして、急にサトシの顔を見つめると、

「でも、ありがとうサトシ。サトシのお陰で助かったんだもの・・・また、助けられちゃったね・・・」

「い、いや、そんなことないぜ。俺だつてヒカリに助けられた事が何度もあつたし・・・それに、俺、ヒカリに何かあつたら、何時でも助けるから・・・」

そんなサトシの言葉を聞いて、ヒカリは再びクスツと笑つて、

「ありがとう。じゃあ、サトシに何かあつても、あたしも何時でも助けるからね」

その言葉を聞いたサトシも嬉しそうにはにかむと、

「ああ、わかつたぜ！そんなときはよろしくな！」

そんな会話が続きながらも二人は歩き続けた。二人の側にはピカチュウとポツチャマも笑いながら話していた。

そして暫く歩いた時のこと、ヒカリはふと昨日、ワカバタウンを去るときのことを思い出した。

「それじゃあ、コトネ、またね」

ここはワカバタウン、コトネの家の玄関先である。

「うん、また何時でもジョウトに来てね。また連絡するから、絶対
」！

「うん、あたしも絶対連絡するからね！また会おうよ。今度はシンオウにも来てね」

ヒカリとコトネは互いに手を握りながら、暫しの別れを惜しんでいた。そして、コトネはサトシの方へ顔を向けると、

「サトシもまた会おうね。突然だったけど、サトシに会えて良かったよ。タケシとカズナリはいなかったけど、またサトシとヒカリンと暫く一緒にいれて、あたし楽しかった」

「ああ、俺もコトネに会えて嬉しかったし、一緒にいれて楽しかったぜ！また絶対会おうな！」

サトシは満面の笑みでコトネに言葉を返した。

そんなサトシにコトネは手を差し出すと、サトシはコトネの手を片手で握り返した。

「それじゃあ、俺たちもう行くから・・・」

暫く会話した後、サトシがコトネに声をかけた。コトネは少し寂しそうに下唇を噛んだが、直ぐに笑顔になった。

「それじゃあ、コトネ・・・連絡するからね・・・」

「うん、あたしからも連絡するってことね・・・」

そう言って、二人は踵を返そうとしたとき、コトネは急に、

「ヒカリンー！」

と呼ぶと、ヒカリはコトネの方へと振り向いた。

「サトシと一緒に、これからも頑張ってるねー！」

ニコリと笑いながら話すコトネに、ヒカリも自然と笑みを作り、

「うん！あたし頑張る！コトネも頑張つてね！」

と、手を降りながら、元気よく返した。するとコトネも大きく手を振り返してくれた。

そうして、二人はワカバタウンからトキワシティへと通ずる道へと歩き出した。

ヒカリはコトネの言葉を思い出すと、

（あたし、サトシと一緒にならどんなことでも乗り越えられるわね）

そんな風なことを考えていた。サトシの顔をまじまじと見ると、サトシの眼にはあの頃と変わらず、輝きを放っているように見えた。その顔を見た時、ヒカリは今暫くはサトシと行動を共にしよう、そう決意した。

サトシの方は、ヒカリの視線に気付いたのか、

「どうした、ヒカリ。俺の顔に何かついてるか」

と質問してきた。ヒカリはその質問に柔らかい笑みを浮かべて、サトシの手をつかんだ。

「ううん、何でもないわ。ねえ、早く行こう！あたし、サトシのお

母さんに早く会いたいわ。川柳の人にも。早く行こつ、サトシ」

「あつ、ちよつと、ヒカリ！引つ張るなよ！」

晩夏の昼下がりに、二人は青空のもと、互いに手を引き、引かれながら、サトシの故郷、マサラタウンへと歩を進めていくので、御座いました・・・

狭間の滝で（後書き）

狭間の滝で、でした！

一応、この話でジョウトが終わり、次回からはカントーが中心となります！

ここ三話ぐらいでサトシとヒカリに関する話を出して来ました。始まりから、少し事件続きなので、ほのぼのを組み込んでみたかったからなんです（ほのぼのになっているのか、と問われると疑問ですが・・・）。

それと、この三話で強調したかったのは、二人ともまだまだかなりの鈍感で、互いのことに全く気付いていません！
そんな二人をかきたかったんです！

でも、いつまでも鈍感でいさせるつもりはありませんけどね・・・
それがいつになるかは・・・このあとの物語を是非是非ご覧ください！

コトネについては少し悩んだんです。話として別れのエピソードも考えたのですが・・・回想での別れのシーンというのを思い付いた時に、これでいこう！と考えたのです。

さて、今回はカントーマサラタウン、サトシたちに現四天王から訪問者が・・・

それが誰かは、是非お話をご覧になって、確かめてみてください。

最後になりましたが、ご感想宜しくお願い致します！

チャンピオンリーグからの来訪者（1）（前書き）

チャンピオンリーグからの来訪者（1）、です！

タイトル、そして予告した通り、四天王の一人が登場致します。
誰かは是非ご覧になってお確かめください！

そして、関係はないのですが、このお話よりクエスチョンマークを
使うことに致しました。

それでは、是非是非ご覧ください！

チャンピオンリーグからの来訪者（1）

「ヒカリ、ここがマサラタウンだよ」

「へーえ、何だか長閑で素敵な場所ね・・・空気がとっても新鮮・・・」

ヒカリは大きく深呼吸して、呟いた。

カントーマサラタウン、辺りには田園風景が広がり、向こうには海が広がっていた。家はポツポツとあるだけで、とても長閑な田舎という感じである。そんなサトシの故郷に二人はたどり着いたのだ。季節は晩夏、少し暑さが残っているが、ここでは肌にさす海風が心地よく、空には雲ひとつない空が青々と広がっているのだ。

「ほら、海の側に大きな庭のある家が見えるだろ、あそこがオーキド博士の家さ」

サトシは海際を指しながら、ヒカリに言うと、

「あそこがああの川柳の人の家なのね！ああ、またああの人の川柳が聞きたいわ！」

「せ、川柳の人ね・・・まだそんな呼び方してたんだ・・・」

ヒカリは嬉しそうに、はしゃぎ出した。そのはしゃぎ方にサトシは苦笑を浮かべ、最後はヒカリに聞こえないほどの小声で呟いた。

「それで、サトシの家はどこなの？」

「え？あ、ああ、俺の家は、あそこだよ、ほら」

サトシは田園風景広がる中の一軒家を指差した。家そのものが少ないせいか、ヒカリは直ぐに場所を理解したようで、

「へーえ、それじゃあ、早く行きましょうよ！あたし、サトシのお母さんに早く会いたいわ！」

と、サトシの手を掴んだ。手を掴まれたサトシもニコリと笑みを見せながら、

「ああ、行こうか！」

そう言つて、二人はサトシの家へと歩みを進めた。

二人が田園の中を暫く歩くと、サトシの家が見えてきた。外ではバリヤードが箒で道を掃いていた。

「おーい！バリヤード！」

サトシは大声でバリヤードの名を呼ぶと、そのことに気付いたバリヤードは、サトシの方へと顔を向け、笑顔になって近寄ってきた。

「あのバリヤード、サトシのポケモン？」

「ん？いや、違うよ、バリヤードは……うーん、なんと言えば良いか……」

サトシはなんとおつか、言葉を探していると、そんなサトシの様子に疑問を持ちつつ尋ねた。

「サトシのお母さんのポケモンなの？」

「うーん・・・まあ、そんな感じかな」

サトシは答えを見つけるのが少し面倒になっただらしく、曖昧に返事をした。

その内にバリヤードはサトシのもとへやって来た。サトシは笑顔でバリヤードの頭を撫でながら、

「只今、バリヤード。今帰ったよ」

バリヤードはサトシの言葉に嬉しそうに一鳴きすると、ヒカリの姿を見て、小首を傾げた。

「バリヤード、こちらはヒカリ。俺の仲間だよ」

「初めまして、ヒカリです。宜しくね」

サトシに紹介されると、ヒカリは笑顔でバリヤードの頭を撫でながら、バリヤードに自己紹介した。バリヤードはヒカリに好感がもてたのかヒカリに向けて笑顔を見せると、一鳴きした。

サトシはそんな二人に微笑むとバリヤードの方へと顔を向け、

「なあ、バリヤード、母さんいるかな」

と尋ねると、バリヤードは一つ思い出したように、サトシに向けて身ぶり手振りをし、話しているように鳴いた。サトシはバリヤードの言葉を理解したのか、ふうんと息を漏らした。

「お客さん、誰だろう？」

サトシは小首を傾げ、考えてみたが、結局分からなかった。ヒカリはそんなサトシの様子を見ながら一言話した。

「まあ、家に入れば分かるんじゃない？」

「それも、そうだな。それじゃ入るか、ヒカリ、バリヤードも一緒に入るか」

「うん！」

バリヤードもはいとばかりに大きく頷いた。

そうして、二人は家の玄関先まで行き、ドアを開けてバリヤードと家の中へと入った。

家の中へ入ると、奥からサトシの母親が顔を出した。サトシの様子を見るとサトシと呼び、笑顔で迎えた。

「おかえりなさい、サトシ」

「ただいま、母さん・・・」

サトシの母親は次にヒカリの方へと顔を向けると、ヒカリにも笑顔で話しかけた。

「初めまして、ヒカリさんよね、いつもサトシがお世話になってます。サトシの母のハナコです、宜しくね」

「あたし、ヒカリと申します。此方こそ宜しく願います」

母親の挨拶にヒカリは少し緊張しながらも、笑顔ではっきりと返し

た。

「ところで、母さん。お客さんが来ているらしいけど、誰、キクコさん？それとも・・・」

サトシが尋ねるとハナコは顔に手を添えて、

「ううん、えーっとね、キョウさんという方よ、朝からお待ちなんだけど・・・」

「えっ、き、キョウさんが？」

キョウの名前を聞いて、サトシはギョツとした顔をした。ヒカリはサトシの服を少し引っ張って、

「ねえ、サトシ。キョウさんてあのキョウさん？四天王の？」

「あ、ああ、多分、そうだけど・・・」

四天王キョウ・・・

この人物はかつてカントーセキチクシティのジムリーダーであった男である。しかし、努力を重ねた結果、五、六年前に四天王に就任し、忍術使いのキョウとして幾多の挑戦者を退けてきた男である。

サトシはかつてキョウとはジムリーダーとして四天王として戦い、どちらも勝利している。

そんな四天王が今回、帰宅したばかりのサトシにどんな用事があるのだろうか？

「まあ、兎に角上がって、ずっと待ってらしてるから、ヒカリもど

うぞ、御上がりになって」

「うん、分かったよ」

「お邪魔します・・・」

二人は玄関からロビーに行くと、そこには忍者服を着ている男が椅子に座ってお茶を飲んでいた。歳は四十後半、もしかしたら五十は過ぎていくかもしれない。しかし、この忍者服を着ている男こそ、件の四天王のキョウウなのだ・・・
さて、キョウウはサトシたちに気が付くと立ち上がりサトシたちの方へと歩いてきた。

「キョウウさん、お久しぶりです！お元気でしたか？」

「サトシ殿・・・久しぶりで御座るな・・・」

サトシの言葉にもキョウウは真面目な顔付きで少し短めに返した。元来がこういう性分なのだろうか、それとも忍者だけに、寡黙なのか・・・

「此方の女性は？」

キョウウはヒカリの方へと顔を向けて尋ねた。

「ああ、此方はヒカリ。俺の仲間なんです」

「ヒカリです、初めまして。いつもテレビなどでキョウウさんのお姿は拝見しております」

ヒカリは一つ頭を下げてキヨウに挨拶をした。

「ああ、あの踊り子・・・此方こそあなたもよくテレビで拝見してるよ。拙者の名はキヨウ、宜しく頼もう・・・」

キヨウもヒカリに頭を下げながら挨拶をした。挨拶が終わると、サトシは早速要件についてキヨウに聞いた。

「ところでキヨウさん、今日はどうして俺のところに・・・」

「む・・・ああ、そう、それなのだが・・・実は、その・・・」

キヨウは目を泳がせながら、辟易しながら話していたが、その内に意を決したのか、サトシの目をじっと見つめて、

「・・・君の亡くなった弟子のことでお主に伝えたい義が御座って参りつかまつった」

サトシはその言葉を聞くと、苦虫を潰したような顔をした。サトシにとってはあまり気分の乗る話ではないのだ。この話題は・・・

「ど、どういことなんでしょうか。か、カズシのことって。キヨウさん」

「さよう、そのカズシ殿のことで御座る・・・」

そう言うと、キヨウはその場でいきなり土下座をした。何が起ったか分からずにヒカリ首を傾げる。そして、

「すまぬ！サトシ殿！そなたの弟子の死は拙者の責任なのだ！本当

にすまない！」

すまない、すまないと何度も言うキヨウにサトシとハナコは呆然とその場に立ち尽くした。もう、何がなんだか二人にはわからないのだ。

ヒカリは困ったように二人とキヨウを互いに見てはあたふたしていた。

ああ、初めの頃の物語、師と弟子と・・・その事件とキヨウとは一体どのような関係があるというのだろうか・・・
サトシには全く分かりそうもなかった。

チャンピオンリーグからの来訪者（1）（後書き）

チャンピオンリーグからの来訪者、でした！

さて、四天王になったキョウ。これはゲームを元にしておりませう。アニメでは四天王になったか不明瞭なので・・・

このキョウと師と弟子との事件はどのように繋がっているのか、是非次回をお楽しみにして下さい。

次回も是非ともご覧ください！

最後にご感想宜しくお願い致します！

チャンピオンリーグからの来訪者(2) (前書き)

チャンピオンリーグからの来訪者第二話です！

前話でキョウとカズシの死がどのような関係なのかがこの話で分かります。

是非是非ご覧ください！

チャンピオンリーグからの来訪者（2）

「サトシ・・・サトシ！」

「っ・・・あ、ああ」

キヨウの言葉に呆然と立ち尽くしていたサトシであったが、ヒカリとピカチュウの呼び掛けで漸く、我に返った。

そして屈んで、未だ土下座を続けているキヨウに顔を向け、柔らかく話初めた。

「き、キヨウさん、もう大丈夫です。大丈夫ですから、顔を、顔を上げて下さい」

「サトシ殿・・・」

「カズシのことが、何でキヨウさんのせいになるのか、俺にはよく分かりません・・・だから、教えて下さい、何もかも・・・キヨウさん、一体、一体何があつたんですか？」

サトシは出来るだけ柔らかく丁寧に話していたが、言葉の端々は震えているようにも聞こえた。

キヨウはそんなサトシの様子を見ると、キツときつい眼差しを向けながら、立ち上がった。

「全てを、話すよ・・・サトシ殿、聞いていただけるか・・・」

キヨウの言葉にサトシは一つ頷くと、キヨウに席を進めた。お茶を入りにいったハナコを除いて、三人は席に着いたのだが、着いたと

たんにヒカリが二人に問い掛けた。

「あ、あの・・・あたし、さっきから全然ついて行けてないんだけど・・・カズシさんっていうのはサトシのお弟子さんなんだよね・・・そのカズシさんの死って、亡くなったってことよね？どうしてカズシさんは亡くなったの？・・・ごめんなさい、話しにくいかもしれないけど・・・あたし・・・」

「あ、ああ。そうか、ヒカリは知らないんだもんな・・・カズシのこと、ヒカリに話すよ」

ヒカリにそう伝えたサトシはこれまで起きた経緯と言うものをヒカリに伝えた。カズシがどういった人だったのか、その身に何が起きたのかを・・・

神妙に話を聞いていたヒカリであったが、陰惨極まる事件の話にはヒカリも辟易していた。

「そ、そんな事が・・・」

ヒカリは驚きのあまり、声も出ないらしい。まあ、仲間があのような陰惨な事件に巻き込まれていたのだから、当然なのかもしれない。

「そ、それで・・・それで、カズシさんの事件と、き、キヨウさん、あなたはどっいった関係があるんですか」

ヒカリは震えながらキヨウに尋ね、サトシも拳を握りながらキヨウをまじまじと見つめた。キヨウは二人の視線に居心地の悪さを感じたが、暫くして口を開いた。

「拙者は、・・・拙者は、カズシ殿に手をかけた人物を知っている

のだ・・・」

その言葉を聞いて暫く、辺りはシーンと静まりかえってしまった。二人はポカンと口を開き、キヨウは腕を組み、顔を俯かせていた。そんな時、沈黙を破ったのはお茶を持ってきたハナコであった。

「お茶をどうぞ」

ハナコは慣れた様子で三人の前に湯飲みを置くと、

「これは、かたじけない・・・」

「あ、ありがとうございます」

キヨウは置かれた湯飲みに手を伸ばし、丁寧に一口飲み、ほうと一息つくくと、再び静かに語り始めた。

「拙者は、五日前にウタ殿とお会いして、カズシ殿の事件のあらましを知ったので御座るが、・・・ウタ殿から、カズシ殿の殺された方法、拙者はそれを聞いたとき、とてつもない絶望感に襲われたよ。この岩の技を使って、これほどまで鮮やかに行動する男など、この国に、そう易々とはいるまい・・・そう！あいつ、あいつなのだ！拙者がこの世で最も恐れる、あの男なのだ！」

次第に興奮したようで、キヨウは段々と荒々しく捲し立てて行った。そんなキヨウの様子にギョツとした目付きで見つめていた三人であったが、

「き、キヨウさん、落ち着いて、落ち着いて下さい。あいつって、あの男とは一体何者なんですか」

サトシはキヨウを宥めると共にキヨウが先程から言っている犯人について急かすように聞いた。
キヨウは口がびくびく震えながら、その名を叫んだ。

「その男、・・・カズシ殿を殺したその男は、拙者の一番弟子にして、史上最悪の伊賀忍者、クガヤマサンタロウ！」

「クガヤマ・・・サンタロウ」

サトシは静かに反復した。その目には怒りの炎がたぎっているように見えた。

「それで、そのクガヤマサンタロウとは一体？」

そんなサトシの様子を察したのか、ヒカリがキヨウにそのクガヤマサンタロウなるものについて、何者なのかと問い掛けると、キヨウは回顧するように少しずつ話し出した。

「クガヤマサンタロウ、我々はサブと呼んでいたのだが、・・・クガヤマは十のころから拙者の元で忍術を学んでいた。もうめきめきと力をつけて、将来は恐らく拙者を越える忍者になるだろうと、拙者はとても期待していたのだよ。しかし・・・」

少し言葉を止めて、お茶の飲んだキヨウは話を続けた。

「しかし、奴は段々と自分の力に酔いしれていった・・・いや、厳しい拙者に対する当て付けだったのかもしれない・・・兎に角、奴は次第に悪の力にも興味を示し、・・・そして、遂に奴が十八、九のとき、奴は、自分の力を試すために、罪もなき、何人もの人を闇討

ちしたのよ。その中にはトレーナーなりたての少年少女もいたのだよ！」

キヨウは最後の方は悪いものを吐き出すように話した。サトシたちも苦虫を潰したような顔をして聞いていた。

「そして、奴は拙者のもとにやって来た。自分の強さを過信していた奴は拙者を倒して殺めようとしたのよ……」

「師匠、……私は師匠よりも強い……それを今、証明しますよ」
修行場で瞑想をするキヨウにクガヤマサンタロウはニヤニヤしながら、語りかけていた。

「師匠、さあ、モンスターボールをお取りなさい」

クガヤマはモンスターボールからゴローニヤを繰り出し、キヨウを急かした。

「クガヤマ……お主から血の臭いがたぎっている。一体今までに何人殺めてきた……」

「さあ……もう、忘れてしまいました……別にいいじゃないですか、そんなの」

「お主はどつやら拙者自身の手で手を下さねばならぬよつだ……外道め！」

キョウモモンスターボールからモルフォンを繰り出した。師と弟子との戦いがこれより、始まったのだが、その勝負は案外呆気ないもので、とても簡単に終結した。

「ゴローニヤ、ロックブラスト！」

「モルフォン、かわしてソーラービーム！」

ゴローニヤから連続して繰り出された岩の塊をモルフォンは素早くかわすと、クガヤマの前から姿を消した。

「ど、どこだ」

「遅い！」

モルフォンは既にゴローニヤの後ろへと回っており、光をため集めたところであった。

光をため集めたモルフォンは光輝く一閃をゴローニヤに向けて放射した。

「ゴローニヤ！」

クガヤマの叫びも虚しく、光の放射を浴びたゴローニヤはゆっくりと前のめりに倒れた……

「拙者は、しかし、奴を手にかけることは出来なんだ。掟とは言え、奴は拙者の弟子！拙者は頭を冷やせとロープで縛り、納屋に押し込んだ。頭を冷やせば奴も分かる、拙者はそう信じた。しかし、甘か

った・・・奴は次の日には納屋にはいなかった。そこには切れ目のない綺麗なロープがその場にあっただけだよ。拙者は奴を探したが、結局行方知れず・・・それが、それがこんなことに・・・」

語り終えたとき、キヨウはふうーと大きな溜め息を吐いた。身体は背筋が凍りつくようにぶるぶると振るわした。

「で・・・それで、そのクガヤマサンタロウは一体、今は何処に・・・」

「うむ・・・ウタ殿の話を聞いて拙者は再び奴の居どころを血眼になってさがしたよ。そして、昨日、遂に奴が鍛練に使う場所がようやく掴めたのだ！・・・それは、カントーお月見山」

「お月見山、・・・そこに、カズシを、カズシを殺した犯人がいるのですね・・・」

「そうだ・・・すまぬ、サトシ殿、拙者があのとき、やはり始末しておけば、このような事にならずにすんだものを・・・」

キヨウは再びサトシに頭を垂れて、許しをこうた。そんなキヨウにサトシは、厳しい顔付きをしつつも、出来るだけ優しい口調で、キヨウに語りかけた。

「い、いえ、キヨウさん、それはいいんですよ。それよりも、あなたはこれから一体、どうなさるのですか？」

「うむ、勿論、奴を倒す、今度こそ・・・」

「キヨウさん、俺も、俺も行きます」

キョウの厳しい顔付きを眺めながら、サトシはキョウに懇願した。
キョウはサトシの目を見ながら、こくんと頷いた。

「サトシ、あたしも行くわ」

「ヒカリ、それは駄目だよ。ヒカリは母さんと家で待っていてくれ」
ヒカリの提案にサトシが苦言を呈すると、

「い・や！サトシはいつでも無茶するんだから、それに相手は殺人鬼なんですよ。だったらなおさらよ、嫌よあたし、サトシと一緒に行くわ！何があっても」

今のヒカリにはもはや何を言っても聞かないのではなからうか。それぐらい、ヒカリの眼には力強い決意というものが、感じられた。それでも、少し渋るサトシを尻目にハナコがヒカリに声をかけた。

「ヒカリさん、サトシのこと、頼むわね・・・この子は、直ぐに無茶するから・・・」

「母さん！」

「サトシ、いいじゃない。今までも一緒だったんなら、今回も一緒に行つてあげなさい・・・」

サトシは少し黙り込んで考えた後、

「分かった、ヒカリ・・・一緒に行こう！」

「うん！」

ヒカリは大きく頷き、二人は互いの顔を暫く見あっていた。そんなとき、キョウが二人に声をかけた。

「話をついたようで御座るな・・・」

「キョウさん・・・」

「それでは、早速、行くでしょうかな」

「はい！」

そして、三人はサトシの家から出ると、各々飛行ポケモンをモンスターボールから繰り出した。

「サトシ、気を付けてね・・・帰ってくるまでに、オムライス作って待ってるから・・・」

ハナコは気丈に優しくサトシに話し掛けた。

母親というものはこうも強いものなのだろうか。息子が稀代の殺人鬼のもとへと行くというのに、彼女はこうも気丈なのだ。

「母さん・・・俺、帰ってくるよ。大丈夫大丈夫！」

「あつ、サトシ！それあたしの台詞！」

ヒカリが苦言を呈し、頬を膨らませると、周りからどつと笑いが起きた。少し重苦しかった空気が穏やかになったように見受けられた。

「それじゃ、二人とも、行くで御座るよ！クロバツト！」

「それじゃあ、母さん、行ってくるよ！オムライス宜しくな！リザ
ードン行ってくれ！」

「行ってきます！あたしもサトシと一緒に帰ってきますから・・・
トゲキツス！」

「行ってらっしゃい・・・どうかご無事で・・・」

そうして三人はお月見山へと空を駆けて、向かっていった。ハナコ
はそんな三人を胸の前で祈るように手を組み、見えなくなるまで眺
めていた。

チャンピオンリーグからの来訪者（2）（後書き）

殺しの犯人でした！

稀代の殺人鬼にこれからサトシたちが如何にして立ち向かうか、是非ご期待下さい！

この話も少し時代劇風に書いてみました。時代劇風になっていれのかと問われると、もしかしたら疑問がもしれませんが・・・

それでは最後に感想宜しくお願い致します！

チャンピオンリーグからの来訪者（3）（前書き）

チャンピオンリーグからの来訪者第三話です。

この話はほぼ全体がバトルの描写となります。
サトシたちとクガヤマのバトルが繰り広げられます。

少し残酷な描写が致しますので、お気をつけてご覧くださいませ。

チャンピオンリーグからの来訪者（3）

「ポツチャマ、ドレディア、しっかり、しっかりして！」

ヒカリは倒れているポツチャマとドレディアを揺すりながら必死に二匹の様子を見ていた。眼には涙さえも見えた。

「くっ、スカタンク！えんまく、モルフォン、闇に紛れよ、エナジ
ーボール！」

スカタンクから発せられた黒煙にモルフォンは闇に紛れ、その中で相手にエメラルドのごとき球体を放ったのだが、

「ふふん、カブトプス、かわしてモルフォンにきりさけ！」

相手のカブトプスは華麗に球体をかわすと、黒煙の中に消えた。そして黒煙の中から衝撃音が聞こえると、モルフォンが弾き飛び、岩に叩きつけられた。

「くっ、すまぬ、モルフォン。よくやってくれた・・・」

キヨウは倒れているモルフォンにモンスターボールを向け戻すと、苦虫を潰したように険しい表情をとった。

「奴め、これほどまでに力をつけたとは・・・」

「キヨウさん！まだ行けますか！」

「勿論で御座る！そっちは！」

「ええ、こつちもまだ、なんとか！ルカリオ、りゅうのはどう！ギ
ガイアス、ラスターカノン！ピカチュウ、10万ボルト！」

三匹から発せられた強烈な光箭は相手を爆煙に包み込んだのだが、

「甘いな・・・ストーンエッジ！」

爆煙をものともせず、ヌウツと煙の中から出てきた巨体から尖った
岩石が多数飛んできて、その内の数発がサトシのポケモンに直撃し
た。

「皆！」

サトシは悲痛に叫んだが、元来根性のあるサトシのポケモンは歯を
くいしばって立ち上がった。その様子にサトシはホッと一息つくど
キツと相手を見据え、呟いた。

「しかし、なんて強さだ・・・奴は・・・」

サトシたちがお月見山にたどり着いたのはもう日が傾きかけた時で
あった。

カントーお月見山、この名前の由来はここで、不思議な力を持つ石
月の石が発見されたことから名付けられた。その関連かは定かでは
ないが、ここには月から来たとも噂されるようせいポケモン、ピッ
ピが生息する。カントー地方としては古い地層も多数存在し、古代
ポケモンの化石も発見されている。

兎に角、お月見山に降り立ったサトシたちはクガヤマサンタロウの姿を探した。

お月見山といってもニビシティからハナダシティの間に架かる大きな山で見つけるのは骨が折れるだろうと思われたが、案外早めに見つかった。

しかし、見つかった彼の姿は身構え、ニヤニヤと笑いながら彼らを見ていた。恰も、彼らが来ることを予期していたみたいに……

「来ましたね、師匠……お待ちしていましたよ……連れがあるみたいですね」

やにで黄色く染まった歯を見せながらニヤニヤ笑う彼の姿を見たサトシとヒカリは気味悪そうに身震いした。

ただ、ヒカリには彼の姿に見覚えがあった。年の頃は二十九、もしかしたら三十を越えているかもしれない。よく映画やテレビで見る黒い忍び装束を体全体に着ているため、顔はよく見えなかったが、それでもヒカリには彼を何処かで見たような気がするのだ。

そんな風に思い出しているヒカリを他所にサトシはクガヤマの顔を睨みながら口を開いた。

「俺はマサラタウンのサトシ！お前に殺された我が弟子カズシの仇を打ちにきた！覚悟しろ！」

「ふふん、マサラタウンのサトシねえ、知ってるよ、チャンピオンマスターワタルを倒した男、お前を倒せば、俺はこの世で一番強い男になるわけだなあ。アッハッハ！」

高笑いするクガヤマに対し、キョウは苦みきった顔を向けた。

「クガヤマ……拙者は今度は間違えたりはせん！貴様を拙者の手

で・・・」

「へへえ、そんな事できますかね、老いぼれたあんに、もう時代じゃないね、四天王キョウウさん」

クガヤマはヘラヘラしながらキョウウを嘲笑った。

「外道め、・・・観念せい！モルフォン！スカタンク！」

「ギガイアス！ルカリオ！頼む！ピカチュウも行ってくれ！」

「ポツチャマ、ドレディア、チャームアップ！」

二人がモンスターボールを掲げて、ポケモンを繰り出すと、クガヤマもバンギラス一匹を繰り出して対抗したわけだが、

「な、何あのバンギラス・・・」

ヒカリはクガヤマが繰り出したバンギラスの姿を見て呻いた。

そのバンギラスはバンギラスであってバンギラスではなかったのだ。普通のバンギラスの二回り、いや三回り以上はある。もはや現世の陸上生物では考えられない程の巨体を誇っていた。

一般に知られているバンギラスと異なるところはまだあった。その体は闇のごとく黒く染められて、目は赤く血走り、口からは涎と思われる液体が始終垂れてくるのだ。

「こ、これは一体・・・本当にバンギラスなのか・・・」

キョウウは暫く無言であったが、ポツリと呟いた。恐怖、憎悪、ありとあらゆる負のエネルギーがそのバンギラスからは感じられたのだ。

サトシはそれでも圧倒されずに力強く二人に声をかけた。

「キョウさん、こちらは俺とヒカリで引き受けます・・・キョウさんはクガヤマを」

「サトシ殿・・・あい分かった！」

キョウはサトシの言葉を聞くと、大きく頷き、クガヤマと対峙した。そしてサトシはヒカリに顔を向け、ニコリと笑って、

「ヒカリ、行くぞ！」

「サトシ・・・うん！」

異様なバンギラスの姿に萎縮していたヒカリであったが、サトシが笑顔で自分に語りかけてきた時、ヒカリも自然と恐怖心が抜けた気がした。

そうして、二人は自らのポケモンと共にバンギラスへと立ち向かった。

クガヤマと対峙したキョウも繰り出してきたカブトプス相手に勝負の火蓋が切られた。

それからどれくらい時間が経ったであろうか。日はもう落ちかけて、辺りは暗く染まってきている。そんな中でも漆黒のバンギラスは異様な風体を持っていたのだ。

恐ろしい奴だ、バンギラスの弱点でもある、水、鋼、格闘、草、何れの技をいくらあてても蚊に刺されたほどにも感じないのだ。一斉攻撃も全く歯が立たず、逆にヒカリのポッチャマとドレディアは簡

単にノックアウトされてしまった。それもトレーナーであるクガヤマの指示なしで行動しているのだ。

嫌、それはニユアンスが違うかもしれない。このバンギラスは回りにある全てが敵なのだ。誰であろうと、自分の回りにある存在は排除するようにされているのだ。可哀想なバンギラス！彼は自分が死ぬまで、攻撃を続けに続けるしかないのだ！なんと哀れなポケモンであろうか！

サトシは下唇を強く噛んだ。このバンギラスに弱点はないのだろうか。早く決着をつけねば、根性がある自分のポケモンでも長きに渡る決闘に些か疲れが出ている。

「くっ、こうなったら・・・あれでいくか・・・」

サトシのあれとはなんのことだろうか・・・？

さて、キョウとクガヤマのバトル、否、果たし合いはどうなっているだろうか。

「行けい、ダストダス！スカタンク、えんまく！」

キョウはモルフォンの代わりにダストダスを繰り出した。

そして、再びスカタンクから発せられた黒煙は夕闇に紛れたのか辺りはほぼ暗き闇という状態へと陥った。

「ふん！俺に煙幕ごときが通じるか！カブトプス！アクアジェットからつじぎり！」

しかし、やはりクガヤマには通じないのだろうか、カブトプスはジ

エツト噴射の如く水を纏い素早く二匹の前にくると、ダストダスを手の鎌で切り裂いた。

勝負は決まった・・・クガヤマはニターっと薄ら笑いを浮かべたのだが、

「何！」

しかし、カブトプスが切り裂いたのは影だった。影は切り裂かれた影響からか、ユラーっと消えた。

それから、カブトプスは辺りを切り裂くも、切れるのは皆影ばかり、次第にカブトプスは苛々したように、むやみやたらに鎌を振り回した。

「忍法、黒煙分身の術！お主はこれを知る前に拙者のもとから去りおったからの、ファファファ」

キョウの笑いに今までニタニタ笑っていたクガヤマから笑顔が消えた。その眼はキョウへの憎悪と怒りでたぎっていた。

「拙者が憎いか！クガヤマ！お主が拙者を憎いように、拙者もお主が憎い！今まで殺め苦しめてきた者達の分、思い知らせてくれる！己の悪行を思いしれ！」

「殺してやる！殺してやる！お前が憎い！憎い！」

ありとあらゆる憎しみのこもった罵声の数々をクガヤマはキョウに浴びせていった。もう、その姿は人ではなかった。眼は真っ赤に血走り、まるで獣のごとき荒々しい息づかい、猫背で、毛があったら逆立ちそうなくらいであった。これは人間ではない、怪物なのだ。殺人鬼という、恐ろしい怪物なのである！

しかし、先程までの余裕と落ち着きは最早彼には失われていた。悲しきかな、こうなつてはキョウの勝ちが決まつたようなものである。

「カブトプス！負けんじゃねえ！こんな奴に負けたら貴様も殺してやる！殺れ、ポケモンなんかほつとけ！キョウを切り裂けい！」

カブトプスはビクツと身体を震え上がらせるも、やはり主人の命令である。凶暴な目付きでキョウに向けて鎌を降りおろした。キョウは持ち前の身軽さで鎌をかわすと叫んだ。

「クガヤマ！気は確かか！」

「殺す！殺す！お前を殺す！」

しかし、何を言つても彼には聞こえていないようであつた。再び自身を切りつけようとするカブトプスをかわして、溜め息をはいた。

「ちよつ、おかしくなりやがった。ならば、ダストダス！スカタンク！秘技爆裂火炎の術で行こう！ダストダス、頼めるか！」

キョウの叫びにダストダスは強く頷いた。

「ならば、行くぞ！スカタンク！かえんほうしゃ！」

「ふん！そんなもの！効くもんけえ！」

スカタンクは口から強力な火炎をカブトプスに向けて放つた。しかし、炎技があまり効果がないカブトプスとしては余裕があるようで火炎に包まれながらも、機敏に動いていた。

「よし！それでは最後の仕上げで御座る！ダストダス、だいはくはつ！」

「な、何！しまった！かわせ！」

「もう遅いわ！小わっぱ！」

ダストダスは炎に包まれているカブトプスに接着し、自身をも瀕死にする荒業大爆発を成し遂げた。その爆発は強烈でその光にキョウとクガヤマは目を閉じ、爆音のために暫く耳が上手く働かなかった。

「ダストダス……」

キョウは自ら瀕死したポケモンを心配して呟いた。そして爆煙が晴れたとき、そこには倒れているダストダスとカブトプスの姿があった。

「ダストダース！」

そんなダストダスのもとにキョウは駆け寄り、ダストダスを抱き起こした。

「ダストダス、すまなかつた！だが、ありがとう！お主のお陰で勝てたよ……本当にありがとう！」

キョウは詫びと礼をダストダスにしながらモンスターボールに戻した。

そしてクガヤマの方へ顔を向けると、成る程、クガヤマは先程の爆風を防げなかつたようで、今まで見えなかつた顔が丸見えになって、頭からは少し血が流れてそれが目に入ったらしい、目を瞑りながら、

顔の血を手で押さえていた。

その時、あっ！という掛け声が聞こえてきた。声の方ではヒカリが丸見えになったクガヤマの顔を見て驚愕の顔をして口をパクパク動かしていた。どうやらうまく喋れないらしいが、クガヤマの方へと近づいてきた。

「ヒカリ殿、いかなされた・・・」

ヒカリはキョウの言葉に暫く返さなかったものの、急にやっぱり！と大声を出すと、

「漸く見つけたわ！・・・サブ！」

この一言に一番驚いたのはキョウであった。

「ヒカリ殿！ヒカリ殿はクガヤマを知ってるのか！」

「知っています！知っていますよ！こいつは、こいつはこの間、ジヨウトであたしたちを殺そうとした男ですから！」

キョウは大きく目を見開くと、ヒカリとクガヤマの顔を睨むように眺めていた。

バンギラスは大きく吠え、青白い強烈なエネルギーを発した。

「かわせ！」

ピカチュウたちはそのエネルギーを上手くかわしたが、外れたエネ

ルギーは地面に当たり、大地を焼いた。

「ルカリオ、めいそうで力を！その間、ピカチュウとギガイアスはバンギラスの気を引くんだ！」

ルカリオは小さく咆哮し、目を閉じると、ルカリオからは何か神憑りめいたオーラと言うべきものが感じられた。

ルカリオが瞑想の状態が続けられる中、ピカチュウとギガイアスは各々の技をバンギラスに放った。ダメージこそ与えられなかったものの、バンギラスを怒らせるには十分だったらしく、バンギラスは苛々したようにもう一度咆哮した。

そんな小競り合いが続くなか、ルカリオは力を溜め終えたらしく、瞑想後は主そのものから祝福を得たような、どこか違う雰囲気を感じていた。

「ルカリオ！はどうだん！」

ルカリオは両手を震わせながら胸の前に神々しい光を放つ球体を作り出した。それはいつものはどうだんではなく、ルカリオ全てのエネルギーを凝縮したものであるように感じられた。ルカリオはその場に球体を留まらせた。サトシはそれを見届けると、ピカチュウに顔を向けて、

「ピカチュウ！ノック！思いっきり打て！」

するとピカチュウは強烈な電気を身に纏い、まるで光の矢の如く、超高速で留まっていた球体へと突撃した。ピカチュウと衝突した球体は目にも留まらぬ速さで一直線に進み、バンギラスの腹に思い切り直撃した。バンギラスはこの一撃に苦しそうに呻き声を上げた。直撃した腹には大きな傷がついている。

これこそサトシのポケモンたちの秘技、ノック戦法、である。

「今だギガイアス！最大パワーでラスタールカノン！」

そしてギガイアスが傷ついたバンギラスの腹に最大の気力集中から放たれた銀色の光箭を当てると、凄まじい爆音とともに大きく大地が震える音が聞こえた。バンギラスが大きく前のめりに倒れたのだ。

「サトシー！」

「サトシ殿！」

サトシは呼ばれた方へと顔を向けるとヒカリとキョウウがクガヤマを引き連れながら、此方にやってくる姿が見えた。

「ヒカリ！キョウウさん！」

ヒカリたちがサトシのもとにいくと、二人は感嘆したように声をもらした。

「凄い・・・サトシあのバンギラス倒したんだ」

「うづむ、また一段と力をつけたようで御座るな、サトシ殿・・・」

サトシは少し照れながら、

「嫌、俺は何も・・・ポケモンたちが頑張ってくれたからだよ。ありがとうがとない皆！」

サトシはポケモンたちの方へと振り返り、満面の笑みで礼を述べた。

ポケモンたちはぼろぼろではあったが、サトシの笑顔にポケモンたちも笑顔になった。

しかし、サトシは急に険しい顔付きになると、手足をアリアドスの糸に感じがらめにされているクガヤマに顔を向けた。クガヤマはちよつ、と舌打ちしながらそっぽをむいた。

「聞きたいことがある。あのバンギラスに一体何をした。何をしたらあんな姿に……」

サトシの質問にクガヤマは答えなかった。しかし、神妙な顔付きが再び二ヘラニヘラと笑い出すと、サトシは思い切りクガヤマを殴り付けた。

「へっへっへ……」

それでもニヤニヤ笑うクガヤマにキョウはクナイをクガヤマの喉に押し当てたが、その瞬間、ガハツと大きく血を吐く音が背後から聞こえた。

皆が振り替えると、そこにはバンギラスが口から血やなんだか訳のわからない液体を吐き出している姿であった。

「バンギラス！」

サトシとヒカリは叫んでバンギラスに近づいた。ポケモンたちも心配そうな顔でバンギラスに近づく。

バンギラスは口から大量の血を吐きながら喉を引つ掻き、地面を叩きながら、苦しそうにもがいていた。

「おい！バンギラス！しっかりしろ！大丈夫か！しっかりするんだ！」

サトシとヒカリはバンギラスを必死に落ち着かせようと、背中らしき部分を擦ったりしていた。ポケモンたちも必死にバンギラスに語りかけながら苦しみを解こうとしていた。

「貴様！ 言え！ あのバンギラスに一体何をした！ 言えー！」

キョウは半ば狂乱気味にクガヤマの胸ぐらをつかみ、叫んだ。クガヤマはヘッヘッと笑いながら、

「ヘッヘッへ、あいつはね、強化改造を受けた身体なのよ。我が組織の技術を駆使してね、最強のポケモンにしてやったのよ、なのにあんな簡単に負けやあがつて、そんな簡単に崩れるポケモンなんかいないのさ、ヘッヘッへ」

「な、なんだと、貴様」

「ヘッヘッへ、師匠、あんたは俺を掴まえてあんたの手で始末つけるつもりらしいが、そうはいくか。誰があんたなんか、あんたなんかの手にかかるか。俺はあんたが憎い、憎いんだ。いいか、俺の死に様をよおく見ておけ、老いぼれ、俺の死に顔をよく見ているよ。生涯それが悪夢となって、あんたに付きまとわなきやいいがねえ」

それがこの稀代の殺人鬼の最後の言葉だった。クガヤマサンタロウは死んだ・・・

バンギラスはもがき苦しむことはしなくなったが、仰向けに倒れ、呼吸は弱々しく、最早その命は風前の灯火だった。サトシとヒカリは泣きながらバンギラスを看病していた。

「バンギラス、死ぬなよ！絶対死ぬなよ！生きるんだよ！しっかりしろ！」

「そうよ！死んじゃいや、いやよ！いや、いや！」

二人はもう何をどうしたらよいか解らずに、叫びながら持ち合わせの元気の塊、元気の欠片をバンギラスに与え続けた。二人の顔はもう涙でくしゃくしゃになっていた。

バンギラスはもう閉じかけた目を少し開け、サトシの方へと目を向けると、一筋の涙を流した。そして小さく弱々しく一鳴きすると、目を閉じ、もう二度と開くことはなかった。しかし、そんなバンギラスの顔はどこか柔らかく、安らかな顔付きであった。サトシはそんなバンギラスの最後の一鳴きが何を言っているのか、はつきりと聞こえた。

「ア・リ・ガ・ト・ウ・・・」

この言葉を耳で聞いた訳ではない、心臓で聞こえた気がした。

「いや！いや！いや！起きてよ！バンギラス！起きてよ！」

ヒカリはわんわん泣きながら、必死にバンギラスの身体を揺らした。ピカチュウは電気を浴びせながらショックで起こそうとし、ギガイアスは岩タイプの食料である岩をバンギラスの回りにどんどん置いて、ルカリオは必死に波導を与えていた。

サトシはそんなヒカリやポケモンたちを他所に呆然とその場に膝をついていた。

日が沈み、月と星の光が照るお月見山で、ヒカリの泣き声だけが、

悲しく響いていた・・・

チャンピオンリーグからの来訪者（3）（後書き）

チャンピオンリーグからの来訪者第二話でした。

次回でチャンピオンリーグからの来訪者は終了する予定となっております。

次回も是非ご覧ください！

最後にご感想宜しくお願い致します！

チャンピオンリーグからの来訪者（4）（前書き）

チャンピオンリーグからの来訪者第四話です！

一応この話でチャンピオンリーグからの来訪者は終幕です。

今回は事件の後のサトシとヒカリの話と、これまでの事件に関する話です！

今までの事件の黒幕は一体誰なのでしょう？

是非是非ご覧ください！

チャンピオンリーグからの来訪者（４）

あの忌々しい、残酷で思い出す度にぞつとする事件から幾日が経った。

あの戦い以降、サトシたちの間には会話はあまりうまれなかった。二人も二人のポケモンもどこか憂いがあるように、沈んでいた。特にサトシのシヨックは相当なものだったらしい。雰囲気からしてサトシではなかった。滅多に口は聞かなくなり、顔はいつも下を向いて、合わせようとしなかった。相棒であるピカチュウや親であるハナコですらあれから全く話していなかったのだ。

こういうとき、男性よりも女性の方が強いものである。ヒカリは少しずつ、今までの日常というものが過ごせるようになってきていた。いや、本当はヒカリだって辛くて辛くて仕方がないのだ。辛くて、辛くて、夜中皆が寝静まった頃、何度涙で枕を濡らしたか分からない。精神というものと言うべきか、最早自分という存在が壊れてどうになっけてしまっそうだった。

それでも、何とか持ちこたえたのは、やはり自分の大切なポケモンたちのお陰であった。彼らだって辛いはずだ、いや、辛くないはずがない。目の前で自分と同じポケモンが死んだのだ。私よりもポケモンたちの方が辛いのでは、とヒカリは考えたこともあった。

でも、ポケモンたちはそんな素振りを一つも見せず、ヒカリを元氣付けようとしていたり、励ましたり、時には暖かく、優しく抱き締めてくれたときもあった。そんなポケモンたちの様子がいじらしくて、ヒカリは涙がボロボロと止まらなかった・・・

そして、とある日。――

ヒカリは部屋に引きこもるサトシを無理矢理引っ張り出して、ある

場所へと連れていった。サトシは最後の最後まで抵抗していたが、ヒカリは頑として聞き入れなかった。

二人は目的地へとたどり着くまで終始無言であった。二人の側ではピカチュウとポツチャマも神妙な顔付きで着いてきていた。

サトシがヒカリに連れられた場所とはオーキド研究所の庭にある小高い丘であった。そこにはサトシとヒカリのポケモンたちが揃っていた。

サトシはやはり後ろめたいのか、耳の付け根までカーツと赤くなり、狼狽した。

そんなサトシにヒカリは少し唇を震えさせながら、優しくサトシに語りかけた。

「・・・サトシ・・・辛いのはサトシだけじゃない・・・あたしだって、辛いよ・・・それに、ここにいる皆だって・・・だからさ・・・」

ヒカリはここで言葉を区切った。必死に言うべき言葉を探しているらしい。サトシは少し顔をあげて黙ってヒカリを見つめていた。

「だからね・・・一人でしょい込まないで、あたしもポツチャマたちのお陰で気付いたけど、あたしたちは一人じゃないわ。皆、皆いる・・・だから、だから・・・あたし・・・サトシがそんな様子だと、あたし、もっと辛く、なるから・・・」

「ヒカリ・・・」

サトシはヒカリの顔を見つめながら、静かに呟くと、

「俺、俺、あのバンギラスに何も出来なかった・・・あのとき、仇を打つことしか、考えてなくて、バンギラスのことなんか全然考え

もしなかった。あんなに・・・あんなに苦しんでいたのに！気付いてもやれなかった。それなのに、それなのに、バンギラスは、ありがとうって・・・」

吐き出すように話すサトシの眼には涙が溜まっていた。それでもヒカリは優しい眼をしながらサトシを見つめていた。

「サトシ・・・さっきも言ったけど、辛いのはサトシだけじゃない、あたしもここにいる皆も本当に辛いよ。あたしだって、あのとき、何も出来なかった・・・もっと何か出来たかもしれないのに！だから、だからサトシ、その思いをね、あたしたち皆で分かち合おうよ。あたしたちは家族じゃないけど、今まで一緒に歩んできた大切な友達、仲間だから・・・きつと辛くても、大丈夫だから・・・ねっ・・・」

ヒカリはサトシの手を包み込むように握った。手を握られたサトシが回りを見ると、サトシとヒカリのポケモンが皆こっちを見ていた。その眼には強く暖かい光が灯っているように見え、そんなポケモンたちを見たサトシは少しの沈黙の後、ギュツとヒカリの手を握り返し、笑顔を見せながら大きく頷いた。

「サトシにはその笑顔が一番似合っているよ・・・」

「ヒカリ、ありがとう！・・・皆も本当にありがとう！俺、もう悩まない！辛くても、皆と一緒に乗り越えるから・・・」

サトシの言葉にポケモンたちは満面の笑みを見せ、皆サトシとヒカリのもとへと駆け寄ってきた。二人は駆け寄ってきたポケモンたちを撫でながら、互いを見あった・・・

それから暫くして、ポケモンたちと戯れるサトシたちを呼ぶ声が聞こえた。

次第に声は近くなってきて、二人を見つけると走って近寄ってきた。

「ここにいたのか。サトシ、ヒカリさんも来てくれるかな」

「シゲル、どうしたんだ？」

サトシに問われたシゲルは真剣な表情で、

「まあ、兎に角、来たまえよ。理由は研究所の中で、説明するから・・・」

「あ、ああ・・・」

二人は顔を見合せ、首をかしげ、シゲルの後についていった。

「おお、サトシ、来たか！どうやら、二人とも、憂いは晴れたらしいのお」

研究所内に入ると、真っ先にオーキドが二人に笑顔で話しかけてきた。

「はい、ヒカリやポケモンたちのお陰でなんとか、心配かけてごめんなさい」

「何を言っんじゃないや、サトシ。サトシには笑顔が一番じゃよ。なあ、キクコよ」

キクコは暫く厳しい顔付きであったものの、急にニカツと笑って、サトシに語りかけた。

「ウジウジしてるなんてあんたらしくないからさ。まあ、心配はしてなかったよ。あんたはいつ、何があっても、立ち直る。あたしが見込んだ男だからね。・・・ああ、あんたがヒカリさんかね、ありがとうよ、サトシが世話になったみたいで、あたしはキクコ、宜しく」

「あつ、はい、こちらこそ宜しく願います」

キクコの急な挨拶にヒカリは少しびくつとしながらも頭を下げた。

「ところで、博士、キクコさん。俺たちに話って、なんですか？」

サトシが用件を聞き出すと、二人はきつ、と真面目な顔付きになつて、

「おお、その話じゃ、サトシ、ヒカリも此方へおかけ、座ってはなそうじゃないか」

オーキドは二人に席を進め、二人はきよとんとした顔をしながらも、席についた。

「まあ、単刀直入に言うが、実はな・・・バンギラスなんじゃが・・・あのような被害にあったのは、実はバンギラスだけじゃなかったんじゃないや」

サトシたちはオーキドの言葉に心底びっくりしたようで、驚きのあまり、声も出せないようだった。

「まずはこの写真を見てくれ・・・」

シゲルはポケットから数枚の写真を取り出すと、二人に渡した。

「な、なんだこれは・・・」

「酷い・・・」

シゲルから手渡された写真を見た二人は絶句した。その写真には見るのも恐ろしいほど悲惨な光景が写っていた。

ああ、なんとということだろうか！そこに写っていたのはポケモンである！否、ポケモンなのだろうか！異常なまでに腕の筋力を増強されているドサイドン、まるで昆虫のように八本の足をもつメタグロス、通常の個体より数倍の大きさをもつラッタ等々、改造されたポケモンたちの姿がそこには写っていた。どれだけ生命を弄べば気がすむのだろうか！最早これは人間のする所業ではない！！

サトシは怒りのために写真を思い切り握りつぶし、ヒカリは気味悪そうに写真を投げた。ピカチュウの頬からバチバチと赤い電気が起きていた。

「これは、カントーのとある場所でウタ先輩たちが撮ってきたものじゃ、そこはある組織の研究所の一つだったのじゃが、そこでは、あらゆるポケモンのサンプルがあって、研究と改造が行われていたらしい・・・」

サトシたちはその話を聞いた途端に物凄い寒気に襲われた。サトシ

は唇を震わせながら、

「そ、それでその研究所は・・・」

「その研究所は、先生たちが破壊したよ。しかし、残念だが、情報が漏れたらしい。もう無人だったらしいよ」

シゲルは自分の落ち度でもないが、悔しそうに話した。

「博士、一体何者なんですか！その組織って！ポケモンたちをこんな、こんなひどい目にあわせるような組織ってなんですか！こんなの、ひどい、ひどすぎるよ・・・」

ヒカリは痺れを切らしたように荒々しく叫びながら尋ねた。ヒカリの眼には憎悪と怒りの炎が灯っていた。キクコは小さく溜め息を漏らして答えた。

「ウタによると、それはサトシたちが幾度となく戦ったことがあるようだけどね・・・」

「な、な、なんだって！それじゃあ、それじゃあ・・・」

サトシが呻くように叫ぶと、キクコは、吐き出すように、

「ロケット団・・・」

その名前を聞いた瞬間、辺りはシーンと静まりかえった。

「ま、また、またあいつらが・・・」

「ウタ先輩によると、この事件の首謀者はロケット団ボスの右腕と呼ばれた男だそうだ。名前はサヒヨウエノカミ、ナリツグ」

「サヒヨウエノカミ、ナリツグ・・・」

サトシはもう一度、反復した。その言葉には信じられない程の怒りが籠っていた。

「先生たちは、君たちがジヨウトで保護した夫婦からナリツグの居所を突き止めたが、また逃げられたらしい。先生はもう少しジヨウトで調査するって昨日連絡があったよ。その時に、サトシたちの話もしたんだが、怒っていたよ。あの温厚な先生があんなに怒る姿初めて見たよ。奴は俺が絶対見つけ出す！ってさ」

シゲルから話を聞いたサトシは眼を大きく見開いて、立ち上がり、「博士！キクコさん！俺、俺もう一度、ジヨウトに行きます！行って、先生の手伝いをします！今のままじゃ、ポケモンたちがまたひどい目に・・・」

サトシの言葉を聞いたヒカリも立ち上がり、サトシと同じように叫んだ。

「あたしも行きます！あたしも、もうあんな悲劇は見たくありませんから！」

「まあまあ、サトシもヒカリも落ち着きなさい。今闇雲に動いたらそれこそ奴等の思う壺じゃ！先輩はこの道のプロ、近々きつとサトシの元に吉報をもってくるじゃろって、その時まで待った方が懸命じゃよ」

「で、でも……」

オーキドは興奮しながら叫ぶ二人をなだめながら、優しく諭した。それでも引き下がる二人に、今度はシゲルが説得にかかった。

「先生たちを信じようよ、サトシ。あの人はとても優秀な方だ。それは君たちが一番よく知っているじゃないか。だろ？」

「そ、そうだけど……」

流石シゲルである。あんなに興奮した二人はシゲルの言葉にもう言いくるめられそうになっている。

更にシゲルは止めの言葉をサトシたちに向けて話した。

「それじゃあ、先生を信じて待とうじゃないか、サトシ……ヒカリさんも……」

「う、分かったよ……」

サトシは少ししょんぼりしながら呟くと、興奮が収まったのか、ヒカリと席について、二人は顔を俯かせた。

そんな二人を見たキクコは仕方がないと言わんばかりに、溜め息を吐いて、

「まあ、この話はウタの結果待ちと言うことで、これまでにしよう。サトシ、一昨日からジムにお客さんが来てるよ」

「俺に、ですか？」

サトシは顔を上げて逆にキクコに尋ねた。

「ああ、あんたにだ。一応、怪しい奴ではなかったからサトシの家を教えただがね、トキワで待つって聞かないからさ。今はポケモンセンターに泊まっているのだが・・・明日にでも来てくれるかい？」

「いえ、今から行きます・・・」

「何言ってるんだい。あんたは今立ち直ったばかりじゃないか。今日はゆっくり休んで、明日来るといいさ。何、大丈夫さ、来るまで待つって言ってたからね」

「分かりました。それじゃあ、明日の昼にでもジムに来るように伝えてください」

「分かったよ」

キクコはサトシの提案に笑顔で返した。

それから二言三言話すと、キクコは席から急に立ち上がって、

「さて、と、もう少しで挑戦者が来る時間だ。あたしはこれで失礼させてもらっよ」

「ああ、キクコさん。申し訳ありません。何もお構いもしないで・・・」

シゲルが申し訳なさそうに頭を垂れると、キクコはふんと笑って、

「あっはっは、何奥さんみたいな話し方してんのさ。そんなんじゃ、

当分嫁さんはこんよ。残念だね、オーキド、あんたが生きてるうちに曾孫はみれんね」

キクコがオーキドに悪態をつくくと、オーキドは憤慨したのか、眉間に皺を寄せながら、キクコに詰め寄った。シゲルは必死にオーキドを羽交い締めしながら止めようとしていた。

「なんじゃとお！おいこら、キクコ！もう一度言ってみい！」

「まあまあ、博士、落ち着いて！」

「離せ、シゲル！もうわしゃ、勘弁ならーん！」

そんな祖父と孫の漫談を無視して、キクコはサトシの方へと顔を向け、柔らかい笑みで話し出した。

「サトシ、それじゃあ、また明日から、頼むね」

「はい！こちらこそ宜しくお願いします！」

キクコは頷くと、今度はヒカリの方へ顔を向けて、

「ヒカリさん、サトシのこと、頼みますよ。なんてったって、無茶する男だからね」

「はい！大丈夫です！サトシのことは任せてください！」

「ああ、いい返事だ。それじゃあ、サトシ、ヒカリさんもまた明日・・・」

そう言つてキクコは未だ漫談を続けている祖父と孫を尻目にオーキド研究所から出ると、モンスターボールを掲げてフワライドを繰り出し、ジムのあるトキワシティへと向かつて行った。

チャンピオンリーグからの来訪者（4）（後書き）

チャンピオンリーグからの来訪者第四話でした！

はい、結局黒幕はロケット団でした。色々考えましたが、やはりポケモンの世界の悪役はロケット団が適切ではないかと思ひまして・・・
・アニメでは壊滅せずにイッシュ地方でも暗躍する組織ですから・・・

ちなみに、サヒョウエノカミナリツグはある映画（かなり昔の古い映画です）の悪役から名付けました。
実在の人物らしいのですけどね・・・

次回、サトシを尋ねにきた人物とは！

次回も是非是非ご覧ください！

最後になりますが、ご感想宜しくお願い致します！

弟子入り志願（前書き）

弟子入り志願です！

今回は少し短めです！

ジムにおけるサトシと題名どおりある人物が弟子入りを志願します。
あ、先に言いますが、女性ではありません。

それでは、弟子入り志願、是非是非ご覧ください！

弟子入り志願

ある晩夏の日のこと・・・

ここはカントートキワシティトキワジム、キクコがジムリーダーを務めるこの施設の前に、かえんポケモン、リザードンとしゆくふくポケモン、トゲキッスが降り立った。

「ありがとう、リザードン。戻れ！」

「トゲキッスもありがとう。ゆつくり休んでね。・・・此処がサトシの働いているトキワジムなのね」

「ああ、そうだよ、ヒカリ。・・・早速入ろうぜ」

「うん！」

ポケモンから降りたサトシとヒカリはお礼を述べながらリザードンとトゲキッスをボールに戻し、二言三言話すと、扉を開けてジムの中に入ってしまった。

扉を開けると、中では十数名のジムトレーナーが自主練習を行っていた。

二人でポケモンバトルをするもの、技を人に見てもらい評価してもらうもの、自分のポケモン同士で擬似バトルを行うもの、ポケモンと共に体力を鍛えるもの、様々である。

その中の一人が二人に気付くと、回りに声をかけあい、暫くすると、二人の前に整列した。

「サトシ先生！お帰りなさいませ！」

と、ジムトレーナーの一人が言つて礼をすると、他のジムトレーナーもお帰りなさいませ！と言いなながら、頭を下げた。その様子にヒカりはきよとんとした顔をしていたが、サトシはにっこりと笑つと、全員を見ながら、

「皆、只今！元気してたか！」

すると、一人が大声でサトシに返答した。

「はい！この通り皆、元気に修行をしております！」

「それは良かった。ああ、皆は初めてだったね。こちらはヒカリ、俺の仲間だ」

「こんにちは、私ヒカリです。宜しくお願い致します」

サトシに紹介されるとヒカりは少し緊張気味に一礼した。するとジムトレーナーは一瞬ヒカリの顔を眺め、もう一度大声で挨拶しながら、頭を下げた。

「此方こそ、宜しくお願い致します！」

ヒカりは少しギョツとた顔付きになり、そんなヒカリを見てサトシは苦笑しながらも、トレーナーたちに尋ねた。

「ところで、キクコさんは？」

「はい！キクコ先生は今奥でお客様と話しております！」

「ああ、ありがとな。じゃあ、各自自主練を続けるように！」

「はい！」

大きな声で返事をするジムトレーナーたちは一目散に元の位置に戻ろうとした。サトシはその中の一人を呼んだ。

「あ、ジロー、ちょっと・・・」

ジローと呼ばれた十一、二歳の少年は振り返り、少し頭を傾けながらサトシに近づくと、

「なんででしょうか？」

「ジローのゴリーキー、技を放つときに、右足が少し動く癖があるね。それだと相手が攻撃を読んでもうかもしれないから、直したほうがいいよ」

「分かりました！」

サトシがそう言うのと、ジローははつきりと返し、元の位置に戻った。それからゴリーキーが技を放つ様子を見ながら、ゴリーキーに指示を出していた。

サトシはそれを見届けると、ヒカリの方へ向き直り、

「それじゃあ、ヒカリ、行こうか」

「ええ」

そして、二人は奥の部屋に向かってジムの中を歩き出した。

「ああ、来たね」

サトシとヒカリが奥の部屋に入ると、キクコと一人の人物が向かい合って話あっていた。そして二人の姿を見て、笑顔で二人の側に寄ってきた。

「サトシさん！」

「あ、き、君は・・・」

「ヨウジです！アキタヨウジです！エンジュシティの虹羽祭りで、覚えていますか！」

読者の皆様は覚えておいてになるとは思いますが、サトシとヒカリがエンジュシティで久しぶりに出会った際、その時、エンジュシティで行われていた、虹羽祭りのバトル大会で見事優勝し、サトシとバトルをした少年である。

それは兎も角、このヨウジの急な来訪にサトシは少し呆気にとられた顔をしていたが、直ぐに顔を直し、笑顔でヨウジに話しかけた。

「あ、ああ勿論だ！覚えてるさ！元気だったか！」

「はい！サトシさんこそ、お元気のようで、何よりです！」

「それで、今日はどうしてジムに、・・・もしかして約束のバトルをしに来たな」

そう、エンジュシティでサトシはヨウジとのバトルが終わった際、サトシはヨウジにトキワジムでの再バトルを約束したのだ。サトシに尋ねられたヨウジは少し恥ずかしそうに首を横に振った。

「いえ、あの、今日はサトシさんにお願いがあって・・・」

「お願い？ああ、いいとも、俺に出来ることならなんでもするよ」

「あの、あの・・・」

ヨウジは気恥ずかしいのか、中々そのお願いというものを言わない。サトシとヒカリは不思議そうに顔を見合せた。それから、やっとのことでヨウジは口を開いた。

「僕、僕・・・サトシさんの弟子になりたいんです！サトシさん、弟子にしてください！お願いしますー！」

最敬礼で頭を下げながら大声で話すヨウジにサトシとヒカリは狼狽して、再び顔を見合せた。

サトシが暫く黙っていたためか、ヨウジは少し頭を上げて、おどおどしながらサトシに話しかけた。

「あ、あの・・・やっぱり、駄目ですか？」

その言葉にサトシたちははっとして慌てて返した。

「い、いや、そんなことはないぜ！俺としては大歓迎なんだけど、何でまた・・・」

「僕、あのときからずっとサトシさんとのバトルが忘れられなくて、

・・・それで、それからずっと考えていたんですけど、やっぱり、僕はサトシさん、あなたについて行きたいんです！お願いです！どうか、どうか私を弟子にしてください！お願いします！」

自分のありったけの思いを口にしたヨウジはもう一度最敬礼で頭を下げた。

「さて、サトシ、どうする？これはあんたへの弟子入り志願だ。あんた自信が決めな」

キクコはニヤリと笑いながら、サトシを急かした。サトシは終始狼狽していたが、急にヨウジの肩に手をおいて、

「なあ、ヨウジ、もう顔をあげなよ・・・」

「サトシさん・・・」

「それで、いつからこれるんだい？」

「それはもう、来ていいのでしたら、今日からでも・・・それじゃあ、それじゃあ・・・」

ヨウジはとても嬉しいそうに手を握り、眼を輝かせた。

サトシは一つ頷きながら、返答した。

「ああ、今日から宜しくな。ヨウジ！」

そう言って手をヨウジに差し出すサトシにヨウジは感極まったように両手で握り返した。

「ありがとうございます！ありがとうございます！僕、僕、頑張り
ます！宜しくお願い致します！」

「それじゃあ、早速、ジムトレーナーに紹介しよう。行こう、ヨウ
ジ」

「はい！」

ヨウジはいかにも嬉しそうに返事をし、二人は部屋を出ていき、ヒ
カリとキクコはそんな二人をとて暖かい眼差しで見つめていた。

「皆、新しく俺たちの仲間になるヨウジだ。さあ、ヨウジ……」

ジムトレーナーたちがサトシとヨウジの前に整列してるなか、サト
シはヨウジを促すと、ヨウジはおずおずと一歩前に出てはつきりと
挨拶をした。

「あ、アキタヨウジと申します！まだまだ未熟者ですが、どうぞ、
宜しくお願い致します！」

ジムトレーナーたちは暫く無言であったが、その中の一人の男が、
ヨウジの前に立つと、

「こちらこそ、これから宜しくな！」

と笑顔で手を差し出した。ヨウジはこれをとて嬉しそうに手を握
り返した。他のジムトレーナーたちも笑みを浮かべて、ヨウジに近
寄り、話しかけていた。

サトシはそんなヨウジとジムトレーナーたちの様子にニカツと笑って、大声で皆に語りかけた。

「よし！それじゃあ、これからヨウジを入れて皆で多面打ちだ！いか、いつも通り、色んなやつとバトルするんだぞ！」

「はい！」

サトシはモンスターボールからうみイタチポケモン、フローゼルを、ヨウジはハツサムを繰り出した。

そして、十数人とそのポケモンたちが入り乱れ闘う、多面打ちの火蓋が切られた。

弟子入り志願（後書き）

弟子入り志願でした！

ダブル主人公西へのヨウジは最初からサトシの弟子という予定で書かせて頂きました。

これからもちよくちよく登場する予定です。

次回も今回と同じくトキワジムで、ヒカリについてのお話です！

次回も是非是非ご覧ください！

最後にご感想宜しくお願い致します！

ヒカリアのお弁当（前書き）

ヒカリアのお弁当です！

今回も舞台はカントートキワシティ、そしてマサラタウンです！
題名の通りヒカリアがサトシに弁当を作ります！

是非是非ご覧ください！

ヒカリのお弁当

とある晩夏の日の朝のこと……

晩夏ということもあり、この日の朝はいつもより幾分かは涼しく、外の風は少し心地良かった。

「それじゃあ、ジムに行ってくるよ」

「あつ、ちよつと待ってサトシ」

サトシは玄関で靴の紐を締め、外へ出ようとしたところでヒカリから待ったがかかった。

すると奥からヒカリが慌てて飛び出してきた。そのヒカリの姿は髪は少し逆立って、動き回り易そうな服の上にエプロンを着ている少し変わった格好であった。ヒカリは何やら包まれている物を持っている少いた。

ヒカリはその包まれている物はい、とサトシに手渡した。

「ヒカリ、これは……？」

「お弁当よ。私が作ってみたの。お昼に食べてね」

渡されたサトシは首を傾げながらヒカリに尋ねたら、ヒカリは満面の笑みで腰に手を当てて返した。

成る程、直方体状の物は弁当箱ということだ。包んでいる辺りもありふれた弁当らしい。

食欲旺盛なサトシはこの弁当にとても嬉しそうに、

「ありがとな、ヒカリ！ 凄い嬉しいよ！」

「えへへ、どういたしまして」

サトシが満面の笑みでお礼をいうため、ヒカリは少し照れた。

「それじゃあ、行ってくるよ」

「いつてらっしやーいー!」

サトシが玄関から出ていくのをヒカリは笑顔で手を降りながら、見送っていた……

「あれ、サトシさん、お弁当ですか?」

その日の昼、全員で食事をとるところでヨウジは、サトシのが広げた物に気が付いて尋ねた。

「ああ、そうだよ!」

「お母さんの手作りですか?」

「いやあ、これはヒカリが作ったんだよ」

はにかみながら語るサトシに一人のジムトレーナーがニヤニヤしながら話しかけた。

「成る程、愛妻弁当というわけですね」

「えっ、……あ、ああ、そうだぜ！」

サトシは彼の言っている意味を理解出来なかったらしく、少し考えて、元気よく返事をした。

その言に、男たちは羨ましがるといって口笛を吹きながらサトシを冷やかしたが、女性達は少し目を吊り上げながらサトシに詰め寄った。

「あ、あの、サトシ先生とヒカリさんは一体どんな関係なんですか？」

「そんなもん、見りゃ分かるじゃんか、恋……」

「あんたは黙ってて！」

ある女性トレーナーの質問にサトシに代わってジローが返答したところ、ジローには女性達からの怒りに満ちた目線と声が返ってきた。その怒声にジローはびくつと首をすくめて、無言でご飯を食べ始めた。そんなジローの様子にサトシは首を傾げたが、女性達はそんなサトシにお構い無しに再び詰め寄った。

「そ、それで、サトシ先生とヒカリさんはどんな関係なんですか？」

「本当に恋人なんてことないですよね？」

「先生！」

こんな風にサトシに詰め寄る彼女たちの言葉は少し震えていた。中には眼に涙を溜めている女性もいる。

サトシはいつもと違う彼女たちに若干畏怖しつつ、

「ヒカリ？……いや、ヒカリが来たときにも言ったけど、ヒカリは大切な仲間だぜ！」

胸を張って、笑顔で返すサトシの様子に彼女たちはホツとした様子だった。

「良かったわ……まったく、誰よ、付き合ってるなんて言ったの」

「あたしにもまだ可能性はある……うふふっ」

「これからもっと頑張らないと……」

そう言っつて、彼女たちはそろそろと自分たちの席に戻り、各々話ながらご飯を食べ始めた。

サトシはそれを見届けると、自分の弁当を開けて、中を見た。近くのジムトレーナーたちもこぞって中を覗いていた。そして……

「うおー！うまそー！」

この様な大声がサトシの回りから聞こえたもんで、サトシは首をすくめてしまった。

「おい、お前ら……」

「あつ、俺、塩焼きもーらい！」

何処にでも調子のいいやつはいるもんである。サトシの文句を遮っ

て、このジムトレーナーはサトシの弁当から魚の塩焼きを箸で掴み、その内半分を食べてしまった。

「こら！人の勝手に食べるなよ！」

サトシは勿論、その行為に苦言を呈したが、塩焼きを食べた当事者は途端に顔を歪ました。

「ん？……どうしたんだ？」

塩焼きを食べたジムトレーナー、後で聞いた話だが、彼の名はヨシトと言っらしいが、そのヨシトは暫く黙った後、口を開いた。

「……先生……これ、塩じゃないです……砂糖です……」

「ええっ、そんな馬鹿な……」

サトシは箸で余った塩焼きらしき物を口に入れると、

「あっ、本当だ。甘い……」

と呟いた。

ああ、なんと定番な間違い方であろうか！ヒカリは塩焼きなのに塩ではなく、砂糖を使ってしまったのだ！

ジムトレーナーたちの中には少々失笑していた者がいたが、急に真面目な顔付きになって席に戻り、無言でご飯を食べ続けた。

それからサトシは様々な物につけたが、ご飯は少し柔らかく、焦げ目があるもの、今度は塩気が強い過ぎるものなど、多種多様なかなかバラエティーに富んだものであった。

それでも何故かサトシは嬉しそうに楽しそうに食べ続け、なんと弁当を全部平らげてしまった。
首を傾げつつも、それを見届けたジムトレーナーは恐る恐るサトシに尋ねた。

「あの……先生、如何でしたか？……ヒカリさんのお弁当は……」

「ああ、勿論、美味しかったぜ！」

ジムトレーナーたちは満面の笑みで答えるサトシに呆気にとられてしまったが、サトシの笑顔を見た以上、それ以上、聞けなかった。

それから数時間後、辺りは段々と赤く染まり、この日のジムの鍛練は終了した。各自が家や寮に戻るなか、ヨウジはサトシに再び昼の弁当について尋ねてみた。

「あの、サトシ先生……」

「ん？なんだ、ヨウジ？」

「サトシ先生はお弁当本当に美味しかったですか？」

ヨウジが震えながら尋ねると、二人の間には少しの間沈黙が流れた。暫くしてサトシは、ニッコリしてヨウジに語りかけた。

「あははっ、確かに味については言わずもがなだったな……」

頭を掻きながら話すサトシにヨウジは疑問をぶつけた。

「それじゃあ、どうして、どうしてあんなに嬉しそうに食べていたんですか？」

「えっ、いやあ、それは……」

サトシは再び暫く黙ると、頬を少し染めて照れながら言葉を続けた。

「あの弁当はさ、ヒカリが俺のために作ってくれた弁当だし、……それに、食べてるときにさ、ヒカリがどんな様子でこれを作っていたのかなって思うと、なんだかね、嬉しくなっちゃってさ……皆には内緒だぜ」

人差し指を立てて口に近づけてウインクするサトシを見て、ヨウジは、ああ、この人達は本当にお互いを信頼しあっているんだな、と染々思った。

ジムの女の子たちには申し訳ないが、彼女たちの恋は所詮かなわぬものなのだ、とも思ってしまった。

「さあ、もう暗くなるぜ。早く帰れよ」

「ああ、はい！それじゃあ、サトシ先生、また明日……宜しくお願ひします！」

「ああ、また明日な！」

そして、サトシがリザードンに乗ってマサラに向かうのを見届けると、ヨウジも踵を返して帰宅の徒についた。

あのととき、正直、サトシの言葉を聞いてヨウジは何故か嬉しかった。僕もあの二人みたいにお互いがお互いを信頼できる様な人といつか出会えるのだろうか……オレンジに染まる道を歩きながら、ヨウジはその事をずっと考えていた。

「只今！」

「おかえり、サトシ！」

サトシが玄関から入ると、奥からヒカリとポツチャマ、ミミロップが笑顔で迎えにきた。ミミロップはポツチャマを退けてサトシのピカチュウに思い切りヒシツと抱きついた。

「おかえり、サトシ！お弁当、美味しかった？」

「ああ、美味しかったぜ！」

ヒカリが早速弁当の感想を聞いてサトシが答えると、ヒカリはとても嬉しそうに、

「本当、良かった！じゃあ、また明日も作ってあげるね！」

「ああ！」

サトシも元気よく返事をした。

それからハナコに呼ばれて二人はポケモンたちとロビーの方へと向かって行った。

次の日……

今日の昼も昨日と同じようにサトシはヒカリが作った弁当を広げたわけだが、この日、いやこの日から暫くの間、それだけではなかった。

この日のジムの女性たちは朝から何やらそわそわしていたが、昼になるとその理由がわかった。
席に座るサトシの回りに女性たちが集まると、

「あの、サトシ先生、あたし、先生のためにお弁当作ったんです。是非食べて下さい」

「私も先生を思って、作ってきたんです。先生、私のも食べて下さい……」

「先生、あたしも……」

と、こう来たもんだ。彼女たちは全員、サトシに弁当を作ってきたらしい。中には重箱ぐらい大きいものまであった。

サトシは暫くきょんとしていたが、彼女たちに笑顔で返答した。

「ありがとな！俺嬉しいよ！」

この笑顔に女性たちは天使に弓矢を射られたように、崩れ落ちた。しかし、悲しきかな、彼としては自分の昼御飯が増えたことが嬉しいのであって、何故彼女たちが自分に弁当を作ってきたかは全然わからないのだ。勿論、自分のために作ってくれたことに関する喜びもあるだろうけど……

それから、サトシが弁当を食べる時には女性たちは全員、サトシを見ており、自分が作った弁当を食べる際にはわーだの、きゃーだの叫んでいた。

そんな女性たちとサトシを見ていてヨウジはジローに尋ねた。

「サトシ先生つて、なんだか凄いですね……」

「あはは、まあね……ふふ」

ジローは苦笑いをしながら弁当を食べるサトシと顔を赤らめながら弁当を食べるサトシを眺めている女性たちを眺めていた。

これは余談であるが、サトシは全ての弁当をペロツと完食したようである。

ヒカリのお弁当（後書き）

ヒカリのお弁当でした！

いやあ、いつか後書きに書いたヒカリの料理下手に関するお話でした。

でも、実は書いておいて、塩焼きを砂糖で作るとどうなるかは私は知らないのです。誰か知っていたら教えて下さい。いないような気もするが……

さて、案外人気者なサトシ……実はトキワジムはサトシが師範代になつてからジムトレーナーが次第に集まってきたという裏設定が存在します。

近々、舞台がカントー地方からシンオウ地方へと移る予定です！どんな内容かは是非是非お楽しみにしていて下さい！

それでは、次回も宜しくお願い致します！ご感想の方も宜しく願い致します！

シンオウ地方への誘い（前書き）

シンオウ地方への誘いです！

今回は前半がマサラタウンのサトシの家が、後半はトキワジムが舞台となっております。

前半は声のみですが、一人ゲスト登場致します。

是非是非ご覧ください！

シンオウ地方への誘い

ヒカリがサトシの故郷マサラタウンに来てから数週間経った。

もう季節は秋に入りかけている。それでもまだ夏が少し残っているのか、時折暑い日もあるが、それでも、大分涼しくなってきた。

そんなとある日。

ヒカリはサトシの家で家事の手伝いをしていたのだが、それが一旦終了し、暫しの休憩を取っていた所にポケギアが鳴り出した。ヒカリが通話ボタンを押すと、ヒカリの友でありライバルである女性の声が響き渡り、ヒカリは笑顔になった。

「もしもし、ヒカリ、元気かい？」

「あつ、ノゾミー！リボンシンジケート以来だね！あたしは元気だよ！ノゾミは？」

「ああ、勿論あたしも元気だよ」

ヒカリはノゾミの元気そうな声が聞こえて安堵の溜め息をついた。

「ところでヒカリ、今何処にいるの？」

「あたし？……あたしは今カントーのマサラタウンにいるわ」

ヒカリが返答するとポケギアから少し驚いたような声が返ってきた。

「えっ、それじゃあ……」

「うん、今サトシの家にいるの」

「そうか……サトシと一緒になんだ……」

ノゾミはポツリとそう言うと、それきり無言になってしまった。ヒカリは暫くポケギアに耳を傾けていたが、痺れを切らした様にポケギアに語りかけた。

「それで……ノゾミ？……どうかしたの？」

「ん？……ああそう、ごめんごめん……えっとね、ヒカリ、パンタナールって知ってる？」

ノゾミの急な質問にヒカリは少し考え、

「ええ知ってるわよ。ノモセ自然保護地域のあのパンタナールでしょ？それがどうかしたの？」

「うん、あたしそのパンタナールで保護観察官をやってる人と知り合いで、今度案内してくれるらしいんだ。それでヒカリもどうかなって思ってる……どう？」

「えっ、……勿論、勿論行くわ！あのパンタナールに行けるんですよ！あたし一度行ってみたかったんだー」

ノゾミの提案にヒカリは眼を輝かせながら、少し興奮気味に二つ返事した。

「それじゃあ、決まりだね」

「ありがとう、ノゾミ！サトシも誘っていいでしょ！」

ヒカリが聞くと、ノゾミからはとても嬉しそうな声が返ってきた。

「勿論だよ。あたしも久しぶりにサトシに会いたいからさ」

「うん、分かった。サトシに聞いておくね！」

「うん、頼むよ。それじゃあ、サトシが来るかどうか分かったらまた連絡してくれる？言っとくからさ」

「オツケー、分かったわ」

「それじゃあ、宜しくたのむね」

ノゾミの言葉にヒカリは胸を張ってえへんと言わんばかりに答えた。

「任せてよ。大丈夫、大丈夫！」

「フフツ、それじゃあ、またね」

「うん、またねノゾミ！誘ってくれてありがとうね！」

「どういたしまして、それじゃあ……」

そう言って、ポケギアから通信が切れると、ヒカリも同じように通信を切ると、

「うふふ、楽しみだね、ポッチャマー！」

ヒカリはポツチャマを優しく撫でたあと、席をたち、体を伸ばすと、再びハナコと家事を始めた。

それから数時間後、もう七時を過ぎた辺りでようやくサトシがジムから帰還したわけであるが、その日の夕食の席でヒカリは先程の件をサトシに話した。

「ふうん……パンタナールか……」

「うん、サトシも一緒に行こうよ！」

笑顔で話すヒカリに、サトシは少し考える格好を取った。そんなサトシがハナコの方をチラッと見ると、

「いいんじゃないかしら、サトシ。行ってらっしゃい。前にテレビでやってたけど、かなりのポケモンがいるって話じゃない。ポケモントレーナーとしては行く価値があると思うわ」

ハナコに後押しされてか、サトシは漸く決心を固めたみたいで、力強く頷いた。

「ヒカリ、俺も一緒にシンオウに行くよ！」

「わあ！良かった！ノゾミも喜ぶわ。後でノゾミに連絡しなきゃ」

そうしてヒカリが喜んでいるところにサトシがポツリと呟いた。

「明日辺りキクコさんに話しておかなきゃ」

「そうね、二人で言いに行こうよ」

「そうだな」

それから話が収束して、三人は他愛のない話をして食事を終わらせた。

食事が終わるとサトシはロビーでピカチュウやポッチャマ、ミニロップと戯れ、ヒカリはハナコと食器を洗っていた。そんなとき、ハナコがふいにヒカリに話しかけた。

「ヒカリさん……」

「はい」

ふいに話しかけられながらも、ヒカリは手を動かしながら答えた。

「ヒカリさんはもうすぐシンオウに帰るのね」

「そう、ですね……」

「そう、それじゃあ、ヒカリさんとももうすぐお別れなのね……娘が出来たみたいで、とても楽しかったんだけど……」

心底残念そうに語るハナコにヒカリは申し訳なさそうな顔をした後、ハナコへと顔を向けて話し出した。

「あたしも、あたしもサトシのお母さんと別れるのはとても寂しいです……でも、あたし、また来ます。ここは本当にいいところですよ。フタバタウンに負けなくらい、いいところですよ。だから……絶対にまた来ますよ！」

「分かったわ。あたしもヒカリさんがまた来るときを待ってるわね」

「はい！」

そうヒカリが返事をしたときに少し大きな悲鳴が聞こえたので二人が台所からロビーを覗くと、そこには三匹のポケモンにのし掛かられて少し困った顔をしながらも嬉しそうに三匹を撫でているサトシの姿があった。

「あらあら、サトシったら」

「ほんと、サトシはあの頃と全然変わってないわね」

「そうね。あまり変わってないかも」

そう言うと二人は顔を見合せクスクス笑い出した。

楽しそうな笑い声にサトシはピカチュウたちと台所の方へ顔を向けると、

「へえ……」

感嘆の息を吐くサトシの目線の先にはまるで本当の母子の様に会話する二人の姿がそこにあった。

そんな二人の様子にサトシはピカチュウたちと顔を見合せ、顔を綻

ばせた。

それから次の日

この日は二人してトキワジムを訪れた。
二人が連れ添いながらジム内を歩く姿に男たちは口笛を吹きながら
茶化し、女性たちは羨望の眼差しでヒカリを睨んでいた。

「今度はシンオウ地方へ行くのかい？」

キクコは二人の顔を交互に見ながら尋ねた。

「はい、ノモセシティのノモセ自然保護地域パンタナールに行きま
す」

「パンタナールか……いいだろう。行っておいで」

キクコの言葉に二人は互いに顔を見合せ喜びを分かち合ったのだが、

「ただし……」

その言葉に二人が首を傾げながらキクコの顔をまじまじと見つめた。
キクコはニヤツと笑いながら、

「ただし、お土産としてノモセ名物、グレッグル羊羹を買ってくる
ように。あたしゃ、あれを一度食べてみたくてね」

今にも涎を垂らしそうな勢いで悦に入っているキクコに二人は呆気

に取られたが、直ぐに気を取り直した。
グレッグル羊羹とはその名の通り、グレッグルの形をした羊羹……
ではなく、グレッグルの頬の様にオレンジ色の丸い袋に包まれた羊
羹のことである。
とても柔らかく、つまようじで刺したら袋が剥けるといっもの、
グレッグルを町のシンボルとするノモセシティならではの菓子であ
る。

「分かりました。グレッグル羊羹、買ってきます」

「ああ、頼んだよ。いいかい、絶・対に買ってくるんだよ」

苦笑しながら了承する二人にキクコは強調した。

さて、二人とキクコの間でそのような会話が行われている間、ジム
トレーナーたちは自主練習を行っていたわけだが、そんなとき、ヨ
シトが叫びながら皆を集めた。

「どうしたんだよ、ヨシト」

「何かあったんですか？」

ジローとヨウジが尋ねると、ヨシトは肩で息をしながら話始めた。

「サトシ先生とヒカリさん、旅行にいくらしいぜー！」

「えっ……旅行ってどこに……」

ヨシトの一言は女性たちに衝撃を与えたらしい。一人の女性トレーナーが口を震わせながら尋ねた。

「うん、キクコ先生と話しているところを聞いたところ、シンオウ地方に行くらしい」

「シンオウ地方……」

尋ねた女性トレーナー、サヨコは呆然としながら反復した。他の女性たちも少し衝撃を受けているようだ。そんな女性たちに傷口に塩を塗るような一言をヨシトがいい放った。

「きつと、新婚旅行だぜ」

「ええつ、だってサトシ先生は仲間としか……」

ヨウジはヨシトの勘繰りを一蹴したが、

「いやいや、よく考えても見ろよ。あんな美人がだね、暫くサトシ先生の家に寝泊まりしていたんだぜ。何も無いはずがないじゃないか。きつと二人はもうできているのさ。いや、もう結婚も秒読みかもしれない。だけど、俺らには照れ臭いのと、二人ともなかなかの有名人だから言い渋っているに違いないのさ」

まあ、なんと想像力逞しいことだろう。このヨシトと言う男、週刊誌の記者みたいなことを言う。だが、それでも、女性たちには効いたらしく、ヨシトの言葉の最後の方から泣き叫ぶ女性もいた。

「うーん、そんなんですかねえ」

それでもヨウジは納得がいかならしく、考えこんでいたが、他のジムトレーナーたちは皆一理あると信じこんでしまった。

「これは、まあ、俺の予測なんだが、もしかしたら、シンオウの旅行先でこんなことがあるかもしれないよ。そう、それはとある晴れた日のシンオウ地方の夜、草木も眠る丑三つ時……」

皆が信じこんだことでヨシトはますます調子に乗ってしまったらしい。少し劇のようなものを初めてしまった。

「ヒカリ、眠れないのか」

「……うん、あたしサトシと一緒になれたなんて、今でも夢みたいで、今この時も、心臓がドキドキしちゃって」

サトシが隣で寝るヒカリに声をかけたところ、ヒカリは少しもじもじしながら返答した。顔も少し赤い。

「変……だよ。夫婦になったのに、まだこんな気持ちなんて……」

「いや、変じゃないよ。俺だって……ほら」

そう言ってサトシはヒカリの手をとって自分の左胸にあてた。ヒカリは自分の手でサトシの鼓動を感じると、

「あっ……サトシも、胸、ドキドキしてるね」

「そうだよ。俺だって、ヒカリと一緒になれたことが嬉しすぎて、もうドキドキさ」

「サトシ……」

ヒカリはまじまじとサトシの顔を見つめ、二人の目があった。サトシはヒカリの背中に腕を回すと、

「ヒカリ、これからは何があっても、ずっと、ずっと一緒だからな」

「うん、一緒……これから私、ずっと、ずっとサトシのそばにいるわ」

「ヒカリ……愛してるよ」

「サトシ……あたしも、愛してるわ」

そうして二人は目を閉じ、互いの唇を近づけ、愛の……

ここまで芝居をしたところでジム内に男性二人の声にならない叫びが響き渡った。その哀れな男二人は先程お粗末な劇を展開した、ヨシトとジローである。

二人は痺れを切らした怒り心頭の女性たちから、男子の急所に蹴りを食らったのだ。

ジムで鍛えられている女性の蹴りである。その痛みは相当なものなのだろう。

「何考えてるのよ！サトシ先生がそんなことするわけないじゃない！」

「バカじゃないの！」

「最・低！」

そんな風に数々の罵声を女性たちから浴びせられた二人だが、当の本人たちはそれどころではなく、奇声をあげながら、のたうち回っている。

なんとも情けない話である。

他のジムトレーナーはもう二人を無視して各々の自主練習に再び取りかかっていた。

正直、役は男と女とは言え、男同士のラヴシーンは見るに耐えなかった。

女性たちも暫くしてから平静を取り戻したのが、自主練習を再開した。

あの二人も痛みから解放されたのか、今は真面目な顔で自主練習に励んでいた。

サトシとヒカリ、キクコが顔を出したのはそんな皆が皆自主練習を再開したときであった。

三人が顔を出すと、ジムトレーナーたちは皆一斉に三人の前に整列し、大声で挨拶したのち、一礼した。

「ああ、皆、おはよう。皆ももう知っているかもしれんが、サトシがここにいるヒカリさんとシンオウ地方に行くことになってね、暫くジムを留守にするからね」

「し、新婚旅行ですか？」

サヨコが泣きそうな表情でキクコに尋ねた。他の女性たちももう泣いているものや、泣きそうなものもいた。その言葉にキクコは一瞬呆気にとられたものの、

「あつはつは、皆、想像力遅しいね。この二人はまだそこまで言っていないさ。安心をし」

キクコは笑いながらも優しく女性たちに語りかけた。

女性たちは心底ホツとしたように胸をなでおろし、なーんだと残念そうにしているヨシトを睨み付けた。

しかし、それでもやはりヒカリがうらやましらしく、少し恨めしそうな目をヒカリに向けていた。

キクコはこほんとして咳をして、続けた。

「さて、それじゃサトシ……」

「はい……皆、今聞いた通り、俺はここにいるヒカリと、今はないけどノゾミってやつと三人でシンオウ地方ノモセシティ、ノモセ自然保護地域パンタールに行く。ここには数多くのポケモンたちが生息してるらしいから、俺は一人のポケモントレーナーとしてその光景を見てみたいんだ！だから、行ってくるよ！」

「サトシ先生……」

サトシが話終わると、ヨウジが前に出てきた。

「サトシ先生、先生がいない間は私達がジムを守りますから……ですから安心して行ってきてください。ですよ、皆さん！」

ヨウジの言葉に他のジムトレーナーも気合い十分の様に任せとけと

か、大丈夫だという言葉を叫んだ。
サトシはそんなジムトレーナーたちにとても嬉しそうにお礼を述べた。

「皆……ありがとう！」

そんなサトシとジムトレーナーとの会話にヒカリとキクコは暖かい眼差しで見ている。
だが、そんな感動もヨシトによって終わりを告げた。

「先生！お土産宜しくお願いします！」

この言葉にその場の全員が昭和のこけ方をした。

折角感動の余韻に浸っていたというのにこの男はなかなかないことをいう。案外こういう男が出世したりもするのかも知れない。
キクコは気合いを入れ直す意味合いも含めてもう一度、咳をしてサトシに尋ねた。

「そ、それでサトシ、今日はどうする？」

「そ、そうですね……」

急に尋ねられてサトシが考えているところにヒカリがサトシに声をかけた。

「ね、ねえ、サトシ……今日はあたしも練習に参加していい？サトシと皆を見ていたらあたしも入りたくなっちゃって……」

「ヒカリ……」

「駄目かなあ……」

両手を合わせて頼むヒカリの様子にサトシは何かを閃いたようであった。

「よし！それじゃあ、今日はタッグバトルの練習としよう！誰でもいいからタッグを組んで、他のタッグとバトルとしようじゃないか！」

「はい！」

ジムトレーナーたちの元気のいい返事が響き渡った。

特に女性たちは嬉しそうである。それもそうであろう。これはサトシに近づけるチャンスであるのだ。タッグバトルのペアで互いに協力しあって関係を深める、などというシチュエーションを想定したのだが、

「ヒカリ、ヒカりは俺と組もうぜ」

「うん！」

という二人の会話にその妄想は早くも崩れ去った。

可哀想な気もするが、こうなってしまうては、女性同士でタッグを組むか、他の男性とタッグを組むしかなかった。

「ヨウジくん……」

サヨコはふいに近くにいたヨウジに話しかけた。

「何でしょうか、サヨコさん」

「あたしとタッグを組みましょうか」

「えっ……」

意外な提案にヨウジは一瞬呆気にとられたが、

「わかりました。宜しくお願い致します！」

「そう、じゃあ決まりね！それじゃあ早速、あの二人とバトルしましょうか！」

「ええ！いきなり先生たちとですか！」

ヨウジは跳び跳ねるぐらい驚いた。そりゃ誰だって最初からいきなり先生相手では驚くだろう。

「そうよ！あたしたちの力、あの二人に見せてやるの。いいでしょうっ？」

「……わかりました。いきましよう……」

ヨウジは少し考えてから、答えをだした。よく考えると、先生たちとタッグバトルが出来る数少ないチャンスだ。やっておいて損はない。

「よし、じゃあ行くわよー！」

「はいー！」

そして二人はサトシとヒカリにバトルを申し込んだ。
他のタッグも対戦を初め、タッグバトルの火蓋が落とされたわけだ
が、サトシたちは何時もと少し違う練習に笑顔で嬉しそうに取り組
んでいた。

シンオウ地方への誘い（後書き）

今回、初めて次回予告をやってみることに……

この度、初めて次回予告を勤めさせて頂く、ノゾミです。宜しく。

さあ、久しぶりにサトシに会うね。もう何年も会っていないけど……
…あたしのこと覚えているかな？

さて、今回はサトシたち三人が再び訪れたシンオウ地方ノモセシテイ、そこで三人が見たものは数多くの生命が息吹く、神秘の大湿原であった。

そして、そこにはある伝説が……

次回、「パンタナール大湿原、第一話」、是非ご覧ください！

サトシ、……あなたに会うの楽しみにしているよ。

さて、次回予告、如何でしたでしょうか、これからもちよくちよく、やろつかと考えています。

最後に、ご感想宜しくお願い致します！

パンタナール大湿原（1）（前書き）

パンタナール大湿原です！

この物語のノモセ大湿原はこの小説のオリジナルですので、宜しく
お願い致します。

パンタナールは南米の大湿原、 実在の世界遺産です。

少し独自のノモセ大湿原の物語、是非是非ご覧ください！

パンタナール大湿原（1）

「あつ、いたいた、ノゾミー！」

ヒカリはポケモンセンターの前に佇んでいるノゾミに手を振りながら笑顔で駆け寄り、サトシもそんなヒカリに続いた。

ヒカリに呼ばれたノゾミは声に気付いたのか、ゆっくりと二人に顔を向けると、ニッコリと笑って二人に歩み寄ってきた。その後ろからショートヘアの少し快活そうな女性もついてきた。

「やあ、ヒカリ」

「久しぶり、ノゾミ！リボンシンジケート以来よね」

「そうだね、久しぶりだね。サトシは……本当に久しぶりだね。元気だったかい？」

ノゾミはヒカリの後ろのサトシに顔を向けて尋ねると、サトシは胸を張って、

「久しぶりだな、ノゾミ！俺は見ての通り元気一杯だぜ！なっ、ピカチュウ」

問われたピカチュウは笑って返答した。

そんなサトシの様子にノゾミはクスツと笑った。

「ん？どうしたんだ、ノゾミ？」

「いや、サトシはあれからあまり変わってないなって思ってたさ」

「あ、それあたしも思ってたのよ」

二人にそう言われたものだからサトシは少し洗面を作って、そっぽを向いた。

「な、何だよ二人して！俺だって変わっているところもあるさ！」

「へーえ、どんなところ？」

ヒカリは少し悪戯っぽく笑うと茶化すようにサトシに聞いた。サトシは暫く考えた後に、少し顔を赤らめて答えた。

「そりゃ、いろいろさ……」

へえ、とばかりに懐疑的な視線をサトシに向ける二人にサトシが狼狽しながら、言い訳を言う姿に、もう一人の女性の笑い声が三人に聞こえた。

その女性は三人の視線が自分に集まっているのを自覚したのか、

「あつ、ごめんなさい……」

頭を少し垂らして謝る女性の姿にサトシとヒカリは互いに顔を見合わせた。

歳は十九、二十といったところか、短いショートヘアに帽子を被り、靴は長靴で、ジーンズを履いて、長袖のシャツを着ている少し動きやすそうなものであった。

「えっと……ノゾミ、こちらは？」

ヒカリはおずおずと女性の顔を眺めながら、ノゾミに尋ねた。

「ああ、こちらはイソガイサチエさん。ノモセ自然保護地域、パンタールで保護観察官をしている人でね、あたしが近くのコンテストに出たときからの付き合いさ。もう二年になるかな」

ノゾミに紹介されたサチエは二人にニコリと笑い、一礼しながら挨拶をした。

「初めまして、イソガイサチエ、サチエで良いよ。二人のことはいつもノゾミから聞いているよ。どうぞ宜しく」

「ヒカリです、宜しくお願い致します。この子はポッチャマ」

「俺はサトシです。こっちは相棒のピカチュウ」

サチエの挨拶が終わると二人も挨拶し、二人の相棒も元気よく一鳴きした。

それから四人で二言三言話したところで、ノゾミは腕時計を見ながら三人に話し掛けた。

「サチエ、そろそろ……」

「ああ、そうだね。……それじゃ、お二方、これからご案内させて頂きます。準備は如何かな？」

サチエはウインクしながらサトシとヒカリに尋ねると、二人は顔を見合せ、ニツと笑って再びサチエに顔を向けた。

「はい！宜しくお願いします！」

「よし、いい返事だ！それじゃ、皆さん、飛行ポケモンを御出し
いただきたい」

「飛行ポケモンを……ですか？」

ヒカリが首を傾げながら聞くと、

「いや、パンタナールは広いからね。飛行ポケモンで行かないと、
回れないんだよ」

「成る程、それじゃあ、トゲキッス！」

ヒカリがモンスターボールを掲げてトゲキッスを出すと、サトシた
ちもポケモンを繰り出し、四人は各々のポケモンに乗った。

「行くよ。トロピウス！」

サチエが言うとトロピウスは大きな葉の翼をはためかせて飛翔し、
サトシたちもこれに続いた。

四人が飛行ポケモンを翔てから案外早く、目的のパンタナールが見
えてきた。それから少し降下して眺めることができた景色に三人は
息を飲んだ。

「今まで何度か来たけど、こんな場所があったなんて……すごい……
……」

「あ、ああ……俺も、初めてだ……」

「凄いね……これ以上もう何も言えないよ……」

三人は感嘆しながら、静かに呟いた。今三人は各々の飛行ポケモンの上で、自分たちの目の前にある広大な景色に見惚れているのだ。目の前に広がるのは、限りなく続く大湿原である。水が乾いたらとてつもなき広いと思われる大草原が全て水浸しの状態になっているのだ。そして、その水が太陽の光を浴びてとても美しく爛々と輝いているのだ。

その大湿原の中にはまるで島のように樹木が密集して水の上に生育してある場所も垣間見えた。

少し乾いた場所ではオーダイルやアリゲイツが数千、いや数万匹といえる数が密集して、何だかのんびりと寛いでおり、湿原にはビードルの群れやルンパッパ等の水ポケモンが悠々と泳いでいる姿もよく見え、ラグラージャやマクローが泥遊びしている姿も見えた。時折水面にノモセシティのシンボルでもあるグレッグルがヌーツと顔をだした。そんなとき、ジャングルの巨大な樹木が一斉に揺れ、二人がそちらに顔を向けると、ジャングルからはトロピウスの群れが大空に向かって飛び出し、その中にはムクホーク、ムクバードやペラップなどの鳥ポケモンの姿も見えた。

かつて海外のとある絵描きがこの景色を目の当たりにして絵を描くことを断念したという話が残っているが、それも頷ける。

生命の脈動とも言うべきか、なんと言うべきか、言葉には言い表し難い光景に二人は唾をのみ、大きく息を吐いた。

「どっぴだい？」

トロピウスの上から柔らかな笑みを称えながら、サチエが聞いた。

「いや、……もう本当に……何を言っているか……兎に角、素晴らしいとしか……」

「うん、あたしも初めて此所に来たとき、そう思ったよ」

そう言つて、四人は再びこの偉大なる大湿原を暫く眺めていた。何度見ても飽きはしないのだ。

「ようし、もつと色々回ろうか！」

サチエはそう言つと、トロピウスに指示して飛び出し、それを見届けたサトシたちは三人で顔を見合せると、三人もポケモンたちに指示して勢いよく飛び出した。

それから四人は飛行ポケモンを翔てこの大湿原を回りに回つた。

彼らの目には見たことのないような植物や、あまり普段は見掛けないような珍しいポケモンにも出会つたりもした。

そんなポケモンたちに出くわす度にサトシとヒカリが子どものように目を輝かせて喜ぶものだから、ノゾミとサチエは互いに顔を見合い、苦笑するしかなかった。

「あの二人はいつもあんな感じなのかい？」

ノゾミはサチエの問いに苦笑しながら、

「そう、だね……二人とはもう八年になるけど、昔からあんな感じだったよ……サトシとはあれから会つてなかつたけど、フツ、全く変わってないね」

少し笑いながら語るノゾミをちらとサチエが見ると、少し暖かく、どこか懐かしそうな寂しげな目をしていて、サチエは言葉につまっ

た。

何も聞いてこないサチエに少し疑問を抱いたのかノゾミはサチエに顔を向けて、サチエは面食らってしまった。

「ん？どうしたの？」

「え、……いや、なんでもないよ……なんでも……」

「あ、そう……」

そう言つて、二人はサトシとヒカリの方へと顔を向けた。二人は相も変わらずポケモンを見て子ども様にはしゃいでいて、二人とも満面の笑みを浮かべて互いの顔を見合つとおおいに笑っていた。

さて、このパンタナールに来てから大分時間が経つたある時、ヒカリはこの広大な湿原に樹木が密集して島のようになっている場所が気になった。

「サチエさん、あそここの森は……」

「ん？ああ、あそこね。……うーん、説明するの面倒臭いね。論より証拠、行ってみるかいい？」

「はい！ねえ、サトシたちも行くつよよ！」

ヒカリは爛々と輝く目をしながら二人を誘った。

「うん！俺も行きたい！」

「そうだね。あたしも気になるね。あの森……」

ノゾミは遠い目で森を眺めながら呟き、返事をした。
サチエはそれを聞くと、パチンと指をならして、

「決まり！それじゃあ、トロピウス！」

サチエの掛け声にトロピウスを始めとして、四人が森を目指して駆け出した。

四人が森の中に入ると、そこは今までの湿原とはまた違う生態系が育まれていた。

様々な草、虫ポケモンたちが生息し、木と木の間をダーテングやコノハナ、キノガッサが縫うように飛び、バタフリーとアゲハントと一緒に森の中を舞っている様子が見えた。

上を見ればトロピウスが飛んでおり、時折、ガルーラが自身の子どもをあやしている姿が見えた。

「ねえ！あれ何ー！」

ヒカリが指差す先にはとてつもなく巨大な花があった。五、六メートルぐらいあるだろうか、六片の赤い白玉模様の花の下にフシギダネやフシギソウが数匹寛いでいた。

ヒカリが首を傾げながらトゲキツスに指示して花に近付くと、いきなり地響きがすると思ったら、花が大地から又ツと出てきてその正体を明かした。ヒカリとトゲキツスは急なことに呆気をとられて、動けなかった。

サトシとノゾミも驚きのあまり大きく開いた口が塞げなかった。

「ふ、フシギバナ！」

「で、デカっ！こんな大きなフシギバナ、お、俺見たことないよ…」

…」

サトシが呻くように叫んだ。そう、あの巨大な花はフシギバナの花だったわけだが、そのフシギバナ自体もかなりの巨体を誇っていた。普通のフシギバナの二、三倍はあるだろう。

その巨大は森の中で一際目立っているようだった。

フシギバナはのっそりと歩きながらヒカリの方へと向かっていき、それに気付いたヒカリはハツとして、慌ててトゲキツスに指示して上昇した。ヒカリは上昇しながらも、

「フシギバナ、起こしてごめんなさい……」

と、申し訳なさそうに誤りフシギバナは聞こえたのか聞こえていないのか、一鳴きした。

ヒカリはサトシたちのもとに戻ってくると、胸を押さえて大きく息を吐いた。

「はあ、ビックリした……」

「でしょ、ビックリしたでしょ」

サチエは少し意地悪そうに笑いながらヒカリに話した。

「分かっているんならいつて下さいよ、もう……」

「ごめんごめん。でも皆のリアクションが見たかったからね。皆ナイスリアクション！」

親指を上突き立てながら話すサチエに三人は大きく溜め息をついた。

そんなときふとノゾミが上を見上げると、なんともう既に空は赤く染まっていた。

そして腕時計を見ると、もう既に六時近くになっており、ノゾミは心底驚いた。

楽しいときは一時間がほんの一瞬のときのように感じるというのはA・アインシュタインの有名な言葉だが、今の三人がそんな感じなのだろう。

「えーっ、もうこんな時間かあ……」

「もう少し回っていたかったなあ……」

二人は残念そうに顔を俯かせた。

「まあ、仕方ないさ。サチエさんさえ良ければまた来ようよ」

「まあ、そうだけど……」

ノゾミは二人を宥めたものの、二人はそれでも顔を俯かせていた。サチエはそれまで何かを考えていたようだが、考え終わるとニツと笑って、

「じゃあさ、今夜うちに泊まらない？」

その言葉を聞いたサトシとヒカリは顔を上げ、ぱつが悪そうにサチエの顔を眺め、おずおずと尋ねた。

「い、いいんですか？」「迷惑じゃ……」

「迷惑なもんか。友が三人も来てくれるんだ。こんな嬉しいことはないさ！」

二人はとても嬉しそうに顔を見合せ、ノゾミに了承を得るように顔を向けた。

ノゾミは暫く黙っていたが、一つ溜め息をすると、

「それじゃあ、サチエ、宜しく頼むよ」

「はい、任せといて！」

「やったー！」

二人は跳び跳ねるように喜び互いに近付く右手を大きく掲げると、パチンと合わせた。

その様子をサチエは暖かい目で眺めており、ノゾミは再び一つ溜め息を吐いた。

それから、サチエの家に行くためにそれぞれ飛行ポケモンに指示して飛翔しようとしたときに、ヒカリが木と木の間少し奥まったところにある少し変わった光を目撃した。

「あれ、……」

ヒカリは目を擦ってからもう一度見たところ、それでも光は輝いているように見えた。だが、如何せん遠いため、ヒカリは行くのを憚り、気のせいだと自分自身に言い聞かせ、サトシたちに遅れてトゲキッスを飛翔させた。

四人は暫く飛行ポケモンを翔て大湿原の外れにある小さな一軒家へとたどり着いた。その家は少し小高くなっており、家の回りにはオーダイルやアリゲイツがのんびりと過ごしていた。

四人は長らく飛び続けてくれた飛行ポケモンたちにお礼を述べ、撫でてからモンスターボールに戻した。

「さあ、ここがあたしの家、……といっても、保護観察のための監視所なんだけどね」

サチエは苦笑しながら語るもノゾミは回りのオーダイルやアリゲイツが気になるようだ。

「あ、あのさ、……いつも回りに、いるの？」

「え？あ、ああ、この子達ね、大丈夫よ、皆大人しいから。ほら」

サチエがノゾミの後ろを指差すと、そこには自信をオーダイルを出して野生のオーダイルやアリゲイツたちと笑顔で戯れている二人の姿があった。

「ああ、成る程、わかりましたよ」

ノゾミはニヤリと笑った。サチエは戯れている二人に声をかけた。

「おい、二人とも！入るよ！」

「はい！」

「戻れ、オーダイル！」

二人は大きく返事をし、サトシはオーダイルをモンスターボールに戻した。すると、回りのオーダイルやアリゲイツが少し寂しそうな顔をして二人を見つけたが、二人は暖かい笑みを見せて、

「明日また一緒に遊ぼうぜ！」

とオーダイルたちに言い聞かせ、ヒカリは近くのアリゲイツの頭を撫でた。

そんな二人にオーダイルたちは一鳴きして笑った。

二人はオーダイルたちに手を振りながらノゾミたちに遅れてサチエの家に入った。

オーダイルたちはそんな二人の真似をしたのか、笑顔で手を振りながら見送った。

家そのものは普通の何処にでもありそうな小さなものであったが、中には所謂ハイテクな機器が設置されていた。

しかし、機器以外は簡素なもので、ベッドとテーブル、椅子が四脚があるぐらいであった。

「さて、早速、夕飯を作りますかねえ」

サチエがそう言って、腕捲りをすると、ヒカリが遮った。

「料理なら任せて下さい！」

と胸を張って言うヒカリに、サトシとノゾミは顔を見合い、首を傾げた。

「へえ、ヒカリは料理が上手いのかい？」

「いえ、作るのはあたしじゃないですよ」

にこやかな顔でヒカリはサトシに手を向け、サトシは右手の人差し指を自分に指して尋ねた。

「えっ、……俺……？」

「サトシ、とつても料理上手なんだから！」

ヒカリはまるで自分の事のように胸を張って言い切った。

ノゾミはそんなヒカリに少し呆れながらも、興味ありげに、

「へえ、サトシ料理できるんだ。そりゃあ、食べてみたいねえ」

「あたしもだ。今日の料理はサトシにお願いしようかね」

女性たちからの熱い眼差しにサトシは暫く居心地悪そうにしていたが、やはり期待されてはやるしかない、サトシはそう決心をした。

「それじゃ、作るとしますか！」

この言葉にヒカリたちは満面の笑みを見せて喜んだ。

「流石、サトシね！あたしも手伝うわ！」

「あたしも、手伝えることがあるなら手伝っさ」

「ありがとう、頼むよ！サチエさん、台所使わさせて頂きます」

「勿論だ！いやー楽しみだねえ。サトシの料理」

サチエは手を擦り合わせながらサトシへと顔を向けた。それからサトシを中心とした夕飯作りが始まった。

ヒカリたちの手伝いもあつてか、出来上がったものは素直に美味しい、と笑顔になれる代物であつた。

「いやー、凄い！サトシ、凄く美味しいよ！おかわり！」

サチエはもの凄い勢いで食べながら、サトシを褒め称え、ついでにおかわりを要求した。

これで四杯目となる。凄まじい食欲だ。食欲はサトシに勝るとも劣らないものをもっている。

サトシたちはそんなサチエを呆然と見ていたが、サトシは渡された碗を受け取り台所に行った。

「サトシは素晴らしいねえ」

と満面の笑みを浮かべながら話すサチエにノゾミはこの家に入った当初から気になってきた写真について聞いた。

その写真は額縁に飾られているものだが、その写真の内容が一風変わったもので、先程ヒカリたちが見た森の中らしいが、この写真には森の木以外に、何処か空間が歪んでいるような、とても神秘的な光が写っていた。

「ねえ、サチエ……あの写真は、一体なんなんだい？」

サチエがノゾミの指差す方へ向くと、直ぐにサチエはああ、と納得した様子で、ヒカリたちに顔を向けて話始めた。

「あれは、時の波紋だよ……」

サチエがそう言ったとき、ヒカリは写真を見て、懐かしそうな嬉しそうな目をしていた。

「時の、波紋？」

ノゾミはおうむ返しに聞き返し、サチエが答える前にヒカリが答えた。

「時の波紋、セレイビイがときわたりをするときに必要なエネルギーが詰まっている場所のことよ」

静かに語るヒカリに二人は呆気にとられて、シーンと静まり返ってしまったが、暫くしてからサチエが口を開いた。

「驚いた。ヒカリ、あんた時の波紋をしっているのかい？」

「はい、昔、本物を見たことがありますから……」

ヒカリのこの言葉に二人、特にサチエは衝撃を受けたように驚いて辺りはまたシーンと静まり返ってしまった。

そんなとき、サトシがサチエのおかわりをもってきた。

「はい、サチエさん。……あれ、皆どうしかしたのか？」

サトシは大きく目を見開いてヒカリを凝視するノゾミとサチエ、ある一点をただただ眺めているヒカリを見て少し洪面を作って尋ねた。サトシは取り敢えず、ヒカリが眺めている方へと顔を向けると、一瞬間が強ばったが、直ぐに柔らかい笑みを見せた。

「ああ、懐かしいな……」

その一言はノゾミとサチエの耳には入ってこなかった。ヒカリはサトシの声が聞こえたのか、サトシの方へ向き直り、話始めた。

「懐かしいよね」

「ああ、そうだな……元気かな」

「元気よ、きつと……元気よ……」

懐かしそうに写真を眺める二人にサチエが漸く、我を取り戻し二人に聞いた。

「さ、サトシも時の波紋を見たことがあるのかい？」

「もう昔です。八年前になりますが、クラウンシティで……」

そう、サトシはクラウンシティで時の波紋とセレビィに関わるとある巨大企業の事件に遭遇したことがあったのだ。あれから八年、二人が懐かしがるのも無理もない。

「そ、そうなんだ……」

「それじゃ、二人ともセレビィに会ったことがあるのかい？」

ノゾミは二人に尋ねた。やはりそれが一番気になる場所であろう。ときわたりポケモン、セレビィ、争いのない平和なしかも自然環境

がよい時代、場所にしか現れないため、そうそうお目にかかることができるポケモンではない。

「うん、まあね……サチエさん、ここにはセレビィが現れるんですか？」

ノゾミの質問を少しぶっきらぼうに答え、今度はサトシがサチエに聞いた。時の波紋があるということはあの森にはセレビィが現れるということである。

急に聞かれたせいかサチエは少しギョツ、としたが、直ぐに平静を取り戻した。

「うん、あたしは見たことないけど、あの森はセレビィが育てたらしい」

「セレビィが……」

サチエは一つ頷いて、淡々と語り出した。

かなりの昔、湿原のみが広がるこの場所にセレビィが訪れ、そのときにセレビィがあの森の辺りに様々な樹木を生やした。その樹木は年月がたつにつれて、成長し、新たな樹木を育み、最終的にあのよ
うな島のような場所が出来上がったらしい。

それからもちよくちよく、セレビィはあの森を訪れるようになったという。

「あの森は栄養価の高い木の実を生やす木が多いからね。その木の実を求めて多種のポケモンが集まったということさ。つまり、あの森が独自の生態系を保っているのはセレビィのお陰というわけさ」

「じゃあ……」

ヒカリが言葉を発すると三人は一斉にヒカリの方へと顔を向けた。

「じゃあ、あれはやっぱり時の波紋だったのね……」

ヒカリが発したその一言はサトシたちに爆弾でも落とされたような衝撃だったらしい。

サチエは少し震えながらヒカリに聞いた。

「ひ、ヒカリ、今なんて？」

「え、ええ、あたしあの森から出るとき、時の波紋みたいなものが見えたんだけど、遠かったし、気のせいかなって思っていたんだけど……やっぱりあれは時の波紋だったのね」

サチエはふうむと鼻息荒く呟いた。

「それじゃあ、今あの森にはセレビィが来る可能性が高いというわけだね」

「そうだろう、そうだろう。でも、この夜の間にもうときわたりをするかもしれない……」

今の言葉にヒカリは申し訳なさそうに俯いた。

「ごめんなさい、やっぱりあのときちゃんと言うべきだったわ……」

「えっ……いや、ヒカリのせいじゃないさ。珍しいものだからね、誰だって気のせいだって思うよ」

サチエはそう言ってヒカ리를宥めたがヒカリはそれでもあまり納得はしていないみたいであった。

「明日、……明日行ってみようぜ。まだ希望はある、行ってみるまでは分からないじゃないか、ヒカリ」

「サトシのいう通りだよヒカリ。明日行こうよ、また……」

二人の言にヒカリは顔をあげて、

「分かった。そう、そうよね。明日行ってみましょう!」

ヒカリは晴れやかな笑みを浮かべていた。

「話は纏まったようだね。それじゃ、明日のための栄養を蓄えなきゃね、サトシ、おかわり!」

「えーっ、まだ食べるんですか?」

サトシは少し不平を言ったが、サチエに続いてヒカリも腕をだした。

「サトシあたしも!」

「あたしも頂こうかな。悪いね、サトシ」

サトシは渋々三人の腕を受け取り、何やらぶつぶつ文句を言いながら、台所に行った。

三人はそんなサトシを見て、互いに顔を見合つと大いに笑った。

ここは、サトシたちが訪れたあの森である。夜だけあって辺りはひっそりとしており、ホーホーやヨルノズクが鳴く声だけが響き渡るなか……

ある木と木の間には不思議な光を放つ少し歪んだ空間が存在していた……

パンタナール大湿原（1）（後書き）

さて、二回目の次回予告です。

やあ、イソガイサチエだよ。宜しくな！

この湿原は素晴らしい……あたしもあの素晴らしい光景に憧れて今の職業についたんだから……

でもね、最近野生のポケモンやセレビィの噂を聞き付けて変な奴等が時折うるちよろしてるんだよ。

さて、今回は時の波紋を求めて再び森を訪れたあたしたちの前に、同じく時の波紋を求める奴等が……

次回、「パンタナール大湿原第二話」、是非ご覧ください！

あ、あれは……セレビィ？

パンタナール大湿原（2）（前書き）

パンタナール大湿原第二話です！

パンタナール大湿原の森に変な奴等が現れます。
サトシたちはいかに對抗するのでしょうか？
そして、あのポケモンは現れるのでしょうか？

是非是非ご覧ください！

パンタナール大湿原（2）

「うーんと……昨日は確かこの辺にあっただと思うんだけど……」

サチエの家で一泊した次の日、朝御飯、これは例によってサトシが作ったわけだが、朝御飯を食べた四人は再び森を訪れていた。時の波紋を求めて……

ヒカリが記憶を手繰らせて昨日の場所を探し、サトシたちは手分けして辺りを探った。

「あ、皆！ちよつと……」

ノゾミが何かを発見したのか、他の三人を呼び、三人は何事かと声のする方へと向かった。すると、ただ突っ立っているノゾミの後ろ姿が見えてきた。

「ノゾミ、見つけたのか？」

「どうしたの？」

サチエとヒカリがノゾミに声をかけると、ノゾミは一緒三人の方へと顔を向けたが直ぐに戻した。その視線の先には、

「あ、あれは……」

「と、時の、波紋……」

そう、その先には昨日写真で見た、いや、サトシたちには八年振りとなる時の波紋が存在していたのだ！

「幻想的だね……」

ノゾミはポツリと呟いた。

「あの時は、あまり良く見れなかったけど……改めて見ると、とても素敵……」

「そう……だな……」

サトシとヒカリも時の波紋を凝視しながら、そう呟いた。

「まだある、ということ……セレビィはまだここには来ていないね……」

「ええ、多分……でも、近々現れるでしょうね……もう暫く待ってみましょう」

「いやあ、ここに時の波紋が有る限り、あたしは此所を離れないよ……折角のチャンスなんだからね」

サチエはそう言うと、拳を強く握り締めた。目には決意と期待の炎がたぎっていた。

「でも、あたしたちがいると、セレビィは来ないかもしれないね。隠れて待とうよ」

「そうだね、そうしよう」

そうして、四人は時の波紋が見える、それでいて少し離れた場所か

らセレビィが来るのを待つことにした。

それからどれぐらい経っただろうか。今まで森に隠れていた太陽ももう真上にあり、燦然と輝きを放っている。

四人は時折交代で時の波紋を見張り続けているが、未だにセレビィは現れる節はない。

そしてもう昼になるのに何も食べていないからであろうか、サトシのお腹が勢いよくなりだした。

「こら、セレビィに聞こえたらどうするんだ」

そうサトシを叱るサチエのお腹も同じように鳴り出し、サチエは顔を赤く染めてお腹を押さえた。

その様子を見て、ヒカリとノゾミはクスクス笑い、サチエは更に顔を赤らめた。

「サトシ、サチエさんもお昼食べてきて下さい。今はあたしたちが見ていますから」

「し、しかし……」

「しかしもかかしもないよ。腹が減っては戦は出来ぬ、でしょ？それに、このままずっとお腹がなってセレビィに気付かれないよ」

成る程、ノゾミが言うことはまあ正論であろう。それを聞いてサトシとサチエは再び顔を赤くして、一旦、昼を食べに戻った。

そして、二人がいなくなっただのを見計らって、ヒカリとノゾミはまたクスクスと笑い出した。

しかし、サトシとサチエがリザードンとトロピウスに乗ろうとしたときに、急にサトシとピカチュウ、リザードンが険しい顔付きになり、帰る方向とは逆方向を向きだした。

サチエはトロピウスに乗りながら首をかしげ、サトシに尋ねた。

「サトシ、どうかしたのかい？」

「サチエさん、今日俺たち以外に誰か来るのですか？」

サチエはサトシの問いにますます首をかしげた。

「いや、今日というより暫くはあたしと他の監察官以外誰もこないはずだし……」

それを聞いてか聞かずか、サトシは急にリザードンに飛び乗ると、一気に上昇した。

それをサチエはボーツと眺めていたが、ハツとしてトロピウスに指示してサトシに続いた。

「サトシ、一体どうしたのさ」

サチエは尋ねたが、サトシは答えずに黙って自らが向いている方角を指差した。

サチエがサトシの指差す方向を見ると、サチエはトロピウスに乗りながら飛び上がるほど驚いてしまった。

何体かの漆黒のヘリコプターが此方に向かって来ているのだ！未だ距離はあるものの、段々と近づいてくる様子が音からも理解出来た。

「……………八……………」

「えっ？」

「サチエさん、すみませんが、ヒカリたちに知らせて頂けませんか？」

サトシは柔らかな笑みでサチエに頼んだ。しかし、柔らかな笑みとは裏腹にサトシの言葉には何処か迫力があり、サチエはその迫力に押されたただだ頷き、その場をさることしか出来なかった。

サチエがトロピウスを翔てその場を去ると、眼を瞑り、サトシは一つ息を吐いた。

「行くぞ、ピカチュウ、リザードン」

サトシはリザードンに指示して森に近づくヘリコプターたちの輪の中へと向かっていった。

「何者かが、この森に？」

ノゾミが洗面を作りながら聞き返すと、サチエは一つ頷いた。

「何者ですか？」

「分からないけど、この森に一直線と言うことは……」

サチエはチラと時の波紋を見た。

「これ、ですか……」

「だろっね……」

時の波紋を見つめて少し沈黙を作っている二人に対してヒカリは声を荒げた。

「と、兎に角、早くサトシのところに行きましょうよ！今はサトシが一人で戦っているんでしょ？駄目よ、サトシ、いつつも無茶するから……」

「ヒカリ……」

ヒカリは胸の前で両手を組み、顔を俯かせていた。体は少し震えている。ノゾミとサチエは顔を見合せ、強く頷いた。

「ここはあたしが守らなきゃいけない場所だ。サトシ一人に任しちゃうあ、いけないね」

「よし、行くよ、ヒカリ！」

ノゾミの言葉にヒカリは顔を上げ、険しい顔つきで強く頷き、三人は飛行ポケモンを翔てサトシの元へと向かった。

森から上昇しながら出ると、三人は辺りを見渡すと、サトシは案外早く見つかった。

成る程、今サトシはリザードンとピカチュウで敵が繰り出したであろう飛行ポケモンと交戦中である。数は十数匹、それをヘリコプターを食い止めつつ、応戦するサトシも流石というところだろうか。

ヒカリはトゲキッスに指示してサトシの名を呼びながらサトシに近づいた。

「サトシー！」

「ひ、ヒカリ！」

サトシはギョツとした顔になってヒカリを見たが、気配を感じ取ったのか、リザードンに指示して上昇し、攻撃をかわした。ヒカリも攻撃を避けながらサトシに近づき、漸くのことでサトシの元へと辿り着いた。

「サトシ、大丈夫？」

「ああ、今のところは。だが、奴等中々鍛えられている。こりゃ、手間取るぞ」

サトシはそう言いながらヘリコプターを見ると険しい顔つきになった。

成る程、奴等はとうとう、痺れを切らして地上に直に降り立つらしい。サトシはノゾミとサチエに顔を向けて叫んだ。

「サチエさん、奴等の狙いはセレビィだ！地上に降りた奴等、お願いします！ここは、俺達が食い止めますから！」

サチエはこれにトロピウスに乗りながら大きな丸を手で表現して、地上に向った。ノゾミも頷いてサチエに続いた。

ヘリコプターから地上へと降り立った奴等は森に入ろうとぞろぞろと湿地体歩いたのだが、森の入り口付近で二人からの妨害を受けた。

「ここから先、通すわけにはいかん！トロピウス、ナツシー！」

「行くよ！ニヤルマー、スワンナ！」

奴等も負けじと自分たちのポケモンを黒いモンスターボールから繰り出した。下っ端たちなのだろうか、繰り出したポケモンたちはあまり育てられていないように見受けられた。

しかし、数は多い。数十体はいるだろうか、これだけの数を相手にするのは骨が折れるだろう。

「行くよ、ノゾミ！トロピウス、ナツシー、リーフストーム！」

「ニヤルマー、シャドーボール！スワンナ、みずのはどう！」

四体から放たれた技をかわした者もいれば、かわせなかった者がおり、中にはこの一発で戦闘不能に陥る者もいた。

「負けるか！ゴルバット、エアカッター！」

何体かのゴルバットからは白い三日月のようなものが発せられ、四体は二人の指示に軽やかにかわして、

「スワンナ、れいとうビーム！」

「ナツシー、サイケこうせん！」

スワンナとナツシーから放たれた青白い帯状の光線と紫色の光線にゴルバットたちは何体かが戦闘不能になってしまった。れいとうビームを食らったゴルバットなど、凍りついた状態で目を回していた。やはり、あまり鍛えられてはいないためか手応えはなかったが、それでも数は多い。このまま長期戦にでもなったら此方が不利である。

なつとか早めに奴等を倒さねばならない。
ノゾミはクツと下唇を噛みしめた。

一方、サトシたちはサトシたちで残った奴等と空中戦を展開していた。サトシはリザードンの他にガブリアス、ヒカリはフリーデインを繰り出して、何とか奴等に対抗していた。

しかし、こちらは中々の手練れらしい。サトシたちに対抗するポケモンもボーマンダやバルジーナ、エアームドなど、強力なポケモンも数多くいた。

「リザードン、ガブリアス、かえんほうしゃ！」

二体からは強力な炎が放たれたのだが、ボーマンダたちのりゅうのはどうに相殺されてしまった。

バルジーナからはどす黒い円が何個も積み重なったような光線がフリーデインに向けて放たれた。

「フリーデイン、チャージビーム！」

フリーデインも黄色い電気を帯びた光線を発射し、なんとか事なきを得た。

「くっ、中々手強いわね……」

「ヒカリ、諦めるな！この森を、湿原を守るんだ、そうだろ！」

「そうね、そうだったわ。大丈夫、サトシ、まだいけるわ！ポッチヤマ、ハイドロポンプ！」

ヒカリは自分とトゲキッスに乗っているポツチャマに指示し、ポツチャマは強く頷いて口から水流を勢いよく噴射した、その速さにかわしきれなかったのか、一匹のクロバットに直撃した。

「今よ、フーデイン！クロバットにチャージビーム！」

そしてフーデインから再び放たれたチャージビームにクロバットは静かに落ちていった。

ヒカリは笑顔でパチンと指を鳴らした。

「やるな、ヒカリ、俺達も負けてられないぜ！リザードン、ガブリアス、クロスアタック！」

リザードンとガブリアスはその指示に大きく上昇し、互いにかなり離れながらも向かい合わせになるように浮かんだ。

「リザードン、フレアドライブ、ガブリアス、ドラゴンダイブ！」

サトシはそう指示すると、ピカチュウを抱いて、何とリザードンから飛び降りた。

ヒカリはそれを見て、悲鳴をあげるが、サトシは落ちながらもニヤツと微笑していた。

リザードンは炎を纏い、ガブリアスは衝撃波と共に斜めに急降下し、二匹の体が交差する際、ポーマンダに互いの技を決めた。

ポーマンダもこれにはたまらず低く呻きながら墜落していった。

そして、技を決めたりザードンは急いで落ちているサトシを拾った。それでも、彼の攻撃は留まるところを知らなかったのである。

「ガブリアス、りゅうせいぐん！」

ガブリアスは腹に力を込めると、遙か上空にエネルギーを放ちそのエネルギーは無数にある大小の石となって、雨の様に降ってきた。これこそドラゴンタイプ最強の技、りゅうせいぐんである。

奴等の飛行ポケモンたちはりゅうせいぐんに慌てふためき、かわそうと飛び回った。

サトシはこの混乱を見逃さなかった。サトシはりザードンに指示して上昇すると、

「ピカチュウ、回転しながらエレキボール！」

ピカチュウはりザードンから飛び出して、素早く回転すると無数の電気を帯びた球を尻尾から発射した。球は重力によって下がっていき、りゅうせいぐんとともに飛行ポケモンたちを襲った。

この技は電気タイプの技であるため、飛行タイプをもつポケモンたちにはかなりのダメージを与えられたようである。かなり傷ついたものたちも多数いた。

「おい、どうなっているんだ！」

ここは、今サトシたちと応戦しているヘリコプターの中である。中では後ろに座っている階級が上らしい高級な服装の若い男が苛々した様子でヘリコプターを操縦している部下たちに怒鳴り散らしている。

「はっ、現在我が軍の飛行ポケモンたちは数十、倒された数七、残された十匹もかなりのダメージをおっています」

部下はあくまでも冷静に淡々と語った。どうやら上官はこの淡々とした口調も神経を逆撫でするらしい。

「ええい、忌々しい！地上の奴等は？」

「此方も森の手前で足止めをくっっているようです。未だ森の内部に入ったという連絡は来ていません」

上官はこの言葉にうつむと腕を組ながら考え込んでしまった。どうやら、この上官、頭の方はあまりよくないらしい。

一方、此方は地上で戦っているノゾミとサチエである。

「ナツシー、たまごばくだん！トロピウスはこうこうせいでエネルギーを！」

「ニアルマー、シャドーボール！スワンナ、バブルこうせん！」

三匹のポケモンが敵を止めている間に、トロピウスは太陽に首を向けて、体を光らせた。

恵みの光、生命の活力、そういった光を一身に浴びて、トロピウスは大きく咆哮した。

「ソーラービーム！」

この言葉に、トロピウスは今まで浴びた光の全てを口に集光させて、太陽の輝きそのものとも言える光箭を発射した。

光箭を浴びて光に包まれたポケモンたちは一瞬の内に戦闘不能に陥ったようで、大多数のポケモンたちがその場に気絶していた。それでも、その後ろから奴等のポケモンたちがぞろぞろと二人に向かって来ているのである。

二人も二人のポケモンたちも段々と息があがってきていた。ずっと戦ってきたのだ。疲れるなという方が無理である。

「どう、ノゾミ。まだ、いける？」

「な、なんとかね……」

そんな二人の一瞬の隙について奴等が束になって四匹に攻撃を仕掛けてきた。

「いかん！かわせ！」

サチエが叫ぶが、間に合わない。奴等の攻撃が当たる寸でのところで、攻撃が途絶えた。

何か強烈な水流の束が奴等に直撃したのである。

「こ、これは、ハイドロポンプ？」

「一体、誰が……」

二人は水流が放たれた方へと顔を向けると、そこにはこの湿原に生息するオーダイルやアリゲイツたちが群れをなして立っていた。

彼等は大きく咆哮した。その大きさは離れた位置にいるはずのノゾミたちでさえ、耳を手で覆ったぐらいである。

どうやら彼等は自分たちの縄張りに無断で侵入してきた奴等に怒っているらしい。

彼等はまだ一度奴等に強烈な水流を放ち、水流を浴びた奴等のポケモンはその大半がかなりのダメージを追ってしまった。

黒ずくめの男たちはそんなオーダイルたちの様子にガタガタ震えて、

「じ、冗談じゃねえ、俺たちこんな目に会うためにここに来たんじゃないよ、じゃあな！」

「お、俺だってそうだ！俺も帰るぜ！」

と、一人を残して全員が去ってしまった。

「こ、こらあ！」

その中でたった一人、チンピラみたいな男がそれでも、任務を遂行しようとノゾミたちに立ち向かった。

「てめえら、絶対に許さねえ！覚悟しろ！アーボック、スカタンク、どくばり！」

無数の毒々しい針の群れがノゾミたちを襲った。

「トロピウス、リーフストーム！」

しかし、トロピウスの渦巻き状に放射された葉っぱに針は全て消えてしまった。

「ニアルマー、十万ボルト！」

そして、ニアルマーから放たれた強烈な衝撃を浴びたチンピラみたいな男とそのポケモンたちは爆発と共に天の彼方に消えていった。

その最中、何かを叫んでいるような気もしたが、彼女たちは気にも止めなかった。

「此方はなんとかなったね……皆、ありがとう！」

サチエがお礼を言うとオーダイルたちは聞いてか聞かずか返答もなしにその場を去って言った。

「サトシたちが心配です。行きましょう。スワンナ、大丈夫かい？」

「そうだね、トロピウス、行けるかい？」

二人はスワンナとトロピウスに顔を向けると、二匹はニツと笑った。

「ごめんね。もう一働きしてもらおうよ」

ノゾミとサチエは優しく二匹を撫でると、二匹に乗り、サトシたちの元へと向かった。

その頃、サトシたちと対峙していた飛行ポケモンたち、それにヘリコプターは地上と同じようにこの湿原に生息するトロピウス、ムクホーク、ペラップたちや、森に生息するバタフリーやアゲハントなどの虫ポケモンたちの襲撃を受けていた。

サトシたちとの戦闘で疲れはてていた飛行ポケモンたちはこのポケモンたちの攻撃に一匹、また一匹と倒れていき、遂に奴等のポケモンたちは一匹もいなくなってしまうた。

「く、くそ！ 忌々しい野生のポケモンたちめ！ 我々に逆らうとは！」

「しかし、このヘリコプターももう限界に近いですね。このままだと大破してしまいます」

この状況下でもこの部下は冷静である。上官はなおも苛々しながら、打開策を考えていた。そんな時に上官の椅子に設置してある電話がなり響き、上官が忌々しそうに電話に出た。

「はい、こちらアソウ！今、忙しい！……あつ、はい！申し訳ありませんでした！……えっ、中止？作戦がですか？いや、しかし今まさに成功の……は、はい……分かりました。直ぐに引き上げます……」

そして、受話器を置くと、天を仰ぎ大きく息を吐くと、静かに部下に命じた。

「撤退だ。基地に帰るぞ……」

「はっ！」

部下はヘリコプターを操縦して来た道を逆戻りしていった。

他のヘリコプターたちも焦るようにそれに続き、ヘリコプターが見えなくなったところには湿原にはいつもの日常を取り戻したようであった。

サトシとヒカリはポカンとして何も話さなかったが、その内にヒカリがポツリとサトシに話しかけた。

「終わった、のね……」

「そう、だな……」

終わりよければ全てよし、という言葉がある。ここのポケモンたち、いや、この自然そのものが自身を守ったとしても、結局は此所を守りきれたのだ。そう思うとサトシとヒカリは段々と嬉しくなってきた。笑みが溢れて、心が踊ってきた。

「ヒカリ！」

「ええ！」

サトシとヒカリはリザードンとトゲキッスに乗りながら、互いの右手をパチンと合わせた。

ピカチュウとポッチャマも満面の笑みで同じように互いの右手をパチンと合わせ、それを見たりザードンとトゲキッスも羨ましくなったのが、二人の真似をしてハイタッチをした。

しかし、そのために体制が崩れ、危うくサトシたちは落ちそうになつてしまい、気付いたらザードンとトゲキッスは慌てて元の体制に戻した。

どうにか体制を立て直したサトシたちは大きく息を吐いて互いを見合い、高らかに笑った。

そんな二人を呼ぶ声に二人は声のする方へと顔を向けると、そこには此方に手を振りながら近付いてくるノゾミとサチエの姿があった。

「ノゾミー！サチエさーん！」

ヒカリはノゾミたちに手を振って大声で二人を呼び、またサトシと顔を見合わせるとにっこり笑った。

「サトシ、ヒカリ、大丈夫だったかい？」

「はい、此方も何とか……そっちは大丈夫でしたか？」

「ああ、此方も野生のオーダイルたちのお陰で事なきを得たよ」

サチエの言葉にサトシとヒカリはハツとした。

「そちらも、ですか？」

「そちらも、ってことは、もしかして……」

二人は一つ頷いて、

「あたしたちもここの鳥ポケモンや虫ポケモンたちに助けられたんです……」

「そっか……人間がどんなに死力を尽くそうと、この大自然には到底敵わない……そういうことかもしれないな……」

サチエは腕を組んで考えた後に下に広がる広大な大湿原を眺めながら呟いた。

四人が暫く大湿原を眺めていると、ノゾミがふと思いついたようにサチエに声をかけた。

「サチエ、セレビィ、見に行こうよ。まだ居るかもしれないじゃないか」

サチエはあつ、と大きな声で叫んだ。

「そうだった、セレビィ、セレビィ……皆、行くよ！」

そう言つてサチエはトロピウスに指示して森へと一直線に進んでいった。

サトシたちは三人で顔を見合わせた後に、サチエに続いた。

それから、それまで時の波紋があつた場所へと四人は行つたのだが、もうその場所に時の波紋は存在しなかつた。

それまで神秘的に歪んでいた空間は、今は普通という表現はおかしいが、ただの木と木の間になっていた。

サトシとヒカリは心底残念そうに肩を落とし、ノゾミはちらとサチエの方を見た。サチエは一瞬、悔しそうな顔を見せたが、直ぐに笑顔になつて、三人に声をかけた。

「まあ、皆、しょうがないよ。あんな奴等からこの湿原と森を守れたんだ。あたしの使命は果たしたし、皆にも感謝しているよ。本当にありがとう！」

頭を下げたサチエにサトシたちは慌てふためいた。

「そんな、俺たちは何も、この湿原と森を守れたのは何より、この自然自身です。ですから、頭を上げて下さい」

「そうですね、サトシの言う通り、あたしたちは何もしていません。そんな風にされたらあたしたち困ってしまいますよ」

サトシたちがそんな風に返していると、突然森のポケモンたちが騒ぎ出した。

何事かと辺りを見回していたところに、ヒカリがとても嬉しそうな表情でサトシの肩を叩いた。

「どうした、ヒカリ……」

「あ、あれ……！」

ヒカリが少し興奮気味に指す方をサトシたちが見ると、そこには小さな薄い緑色の妖精みたいなポケモンが森の間を飛び交っていた。

「せ、セレビィ！」

サチエは唇を震わせながら叫んだ。

セレビィは辺りを飛び回りながら、とある木に近づくと、セレビィから神々しい光が放たれ、光を浴びた木は一瞬のうちに無数の実を付けた。

その木だけではなく、他にも多数の木々が成長したり、実をつけたりした。地面に光を浴びせるとその地面からは多数の芽が生えてきたのだ。

最早、奇跡としか言い様のない現象が今、自分たちの目の前で起こっているのだ。サトシたちは息を飲んだ。何を話せばいいのかも分からない。ただただ、今日の前で起きていることを呆然と見ているしかなかった。

その内、セレビィはとある木と木の間にとまると、大きく鳴き声をあげた。すると、セレビィの体は段々と神々しい光に包まれていった。

「時、渡り……」

この言葉は誰が呟いただろう。もうそれが誰でもいいぐらい、サトシたちはその光景に見いつていた。

次第に光の中にセレビィの体は消えていき、暫くすると光が一瞬強くなり、サトシたちは辺りが何も見えなくなつた。そして、光が消えるともうその場にセレビィはいなくなっていた。

「す、凄い……」

サトシたちはセレビイがいなくなった後も暫く余韻を引いていたのが皆黙っていたが、沈黙を破ってサチエが呟いた。

「凄い、凄いよ！やっぱりこの森はセレビイに育てられていたんだ！皆も見ただろ！」

「見た。あたし、初めてセレビイ見たけど、凄いよ。あんな事が実際に出来るなんて……」

いつもは冷静なノゾミでも、今は少し興奮しているのか、話す口が震えていた。

「あたし、もう何年もここにいるけど、こんなの初めてだよ！あたし、今日のこと一生忘れないよ！絶対に！」

「あたしだって一生忘れないよ。いや、忘れられないだろうね……」

「俺だって、忘れられるもんか！セレビイ見るの八年振りになるけど、やっぱり、凄いよ！」

「あたしも、久しぶりだったけど……本当に素敵……」

四人が四人でそれぞれの思いを熱く語っていたときに、サトシのお腹が思いつきり大きな音で鳴り出した。サトシはお腹を押さえながら赤ら顔で、

「えへへ、そう言えば俺昼食べてなかったんだ」

「もう、サトシったら、感動が台無し……」

そう文句のいうヒカリのお腹も大きな音をたてて鳴り、次いでサチエのお腹も鳴り響いた。

「やれやれ、しょうがないね。それじゃあ、遅い昼食でも……」

と、呆れたように話すノゾミのお腹も鳴り出し、一同は暫くきよんとしていたが、急にノゾミを除いて笑い出した。ノゾミはお腹を押さえながら顔を真っ赤にして文句を言っている。

「あっはっは、ノゾミもお腹すいてるんじゃない。グウーッてグウーッて、あっはっは！」

「笑うなー！しょうがないじゃん。あたしだってお昼から何も食べてなかったんだから！」

サチエはサチエで笑いを必死に堪えながら、三人を宥めていた。

「こらこら、笑っちゃだめだよ。ククク……それより、これから皆でご飯食べようよ。サトシまたお願いね」

「あっはっは！はい、はい、分かりました。作りますよ、あっはっは！」

「笑うなー！」

そう文句を言っているノゾミの姿は顔を赤らめて、いつもの凜とした姿ではなく、どこか少女のように可愛らしかった。

「そ、それじゃあ、皆、帰りますか！」

そうして四人は各々飛行ポケモンたちに乗し、サチエの家を目指して飛翔していった。

帰っている途中でもノゾミはスワンナの上で顔を赤くしながら未だに何やらぶつぶつ言っていた。

ヒカリはそんなノゾミの様子にクスツと笑うと、下に広がる湿原を見た。

あの様な戦いがあった後でも、湿原は太陽の光を映し出し、美しい輝きを放っている。

また、ここに来たい。改めてヒカリは湿原を見ながらそう感じた。

パンタナール大湿原（2）（後書き）

第三回、次回予告

皆さん、今回次回予告を勤めさせて頂きます、オーキド・シゲルです。宜しくお願い致します。

さて、サトシ、ヒカリさんやノゾミさんと行くパンタナールは如何かな？楽しそうだねえ。えっ、何、臭い？やれやれ、レディにそんなことを言うなんて、まだまだデリカシーが足りないねえ、サートシ君は。

さて今回は、パンタナール大湿原のサチエさんと別れて再びノモセシティに来たサトシたちにまたもや事件が！

次回、悪臭騒動第一話、是非ご覧下さい！

えっ、ちょっと、こら、ベトベトン！うわあ！

という感じでパンタナール大湿原終幕を迎えましたね。

今回、書くのに少し時間かかってしまい、申し訳ありませんでした。これからも少し更新が遅くなることもあるかもしれませんが、これから精一杯書かせて頂きますので、何卒宜しくお願い致します！

最後になりますが、ご感想宜しくお願い致します！

悪臭騒動(1)(前書き)

明けましておめでとう御座います！本年度も宜しくお願い致します！

新年早々、臭い話で申し訳ないのですが、是非是非ご覧下さいませ
！

悪臭騒動（1）

サトシたちがセレビイを見た翌日のことである。その日はここパンタールを去る日であった。

サトシたちは観測所兼サチエの家の前で別れを惜しんでいた。近くではオーダイルやアリゲイツたちが寂しげな顔をしている。

「サチエさん、色々とお世話になりました。あたし、このパンタールを見て本当に嬉しかったです」

「いやいや、あたしこそ、あんたたちに会えて良かったよ。……楽しかった！ やつとセレビイにも会えたしね」

ヒカリはサチエと握手を交わしながら、笑顔で語っていた。それからサチエはサトシの方へ向いて手をとった。

「サトシ、あんたに会えて良かったよ。あんたの料理本当に美味しかった。また、食べさせてくれよ」

ウィンクしながら話すサチエにサトシはサチエの手を強く握った。

「勿論です！ サチエさんも今度は是非マサラタウンに来てくださいね！」

「ああ、サトシもまたここに来てくれよ。この子達もサトシにまた会いに来てやって来れ！」

そう言って、サチエは近くのオーダイルを撫でた。オーダイルたちは心底残念そうで、中には目に涙を貯めているアリゲイツもいた。

サトシはそんなオーダイルたちを宥めるように、語りかけた。

「皆、そんな顔するなよ。また絶対会える、会いに来るからさ。だから、笑顔でいようぜ！」

サトシが優しい、暖かい笑顔をオーダイルたちに向けると、オーダイルたちは嬉しそうに大きく鳴いた。

ヒカリたちはそんなサトシとオーダイルたちの様子を見て、笑みを深めた。

「さて、そろそろ行くかい？」

ノゾミがヒカリの肩に手をおきながら、話しかけると、ヒカリは一つ頷いた。サトシは屈んでいた腰を上げて、ノゾミたちの方へと顔を向けた。

「ノゾミ、またおいでよ。待ってるからさ」

「勿論だよ。その時はまた、宜しく」

ノゾミとサチエは互いに歩み寄ると、握手を交わした。それから三人は各々の飛行ポケモンに乗った。

「三人とも、頑張つてよ！あたし、応援しているからね！」

「はい！サチエさんもこの湿原の保護、頑張つて下さい！」

「ああ、ありがとう！」

サチエは腕を腰に当てて返した。サトシたちは名残惜しそうにサチ

工とオーダイルたちを見ながら、リザードンたちに指示して、その場から飛び上がった。

「またおいでよー!」

サチ工はオーダイルたちと一緒に手を振りながら飛び去っていくサトシたちを姿が消えるまで見続けていた。

サトシたちがパンタナール大湿原から飛び立って暫くたつと、ノモセシティが見えてきたのだが、……ノモセシティに近づくとつれて、三人はその異変に気付いた。
三人はかなり険しい顔付きになって、手で鼻をつまんで苦悶の表情を浮かべた。

「な、何この臭い……」

ヒカリは辺りに立ち込める異常な臭さに苦しそうに呟いた。
そう、ノモセシティ上空ではかなりの臭いが蔓延しているのである。とてつもない異臭だ。こんなのを嗅いでいたら鼻が曲がるどころではない。最早卒倒しそうな勢いだった。
しかも、その臭いはノモセシティが近づくとつれて更に強くなっていくのである。
ピカチュウやポツチャマ、リザードンにトゲキッス、スワンナもかなり苦しいのか、時折咳き込んでいた。

それでも、サトシやピカチュウ、リザードンにはこの臭いに覚えがあった。いや、覚えがあったというのは語弊がある。普段かなりの割合でこの臭いに近いものを嗅いでいる。慣れたつもりだった。最

近は殆ど気にしなくなってきたのだが、それでも、今日の臭いは強烈だった。

「こ、こりゃあ、ベトベトンだな……」

「べ、ベトベトン?」

ヘドロポケモン、ベトベトン。その名の通り、体がヘドロで出来ており、ベトベトンが通った道は二度と草木が生えないのだ、生物には本来存在してはいけない物質が発見されたのだ、まあなんだか凄い話が絶えないポケモンである。

「で、でも、今までこんなに臭って来なかったのが、なんで急に……」

ノゾミの疑問も最もである。もともとノモセシティは世界遺産近辺の街ということもあって、比較的綺麗な街である。ベトベトンのような汚らしい場所を好むポケモンはあまり住み着かない場所である。

「と、兎に角、行ってみましょう……」

「そ、そうだな……」

そう言つて、サトシたちは苦しみながらもリザードンたちを翔てノモセシティへと向かった。臭いは段々ときつくなるなか、やっとのことノモセシティへとたどり着いたのだが、そこには人っ子一人見られない、まるでゴーストタウンのようであった。

「誰もいないわね……」

「そ、そう、だな……」

三人は相変わらず苦悶の表情を浮かべながら、辺りを見回したが人の姿は見れなかった。

そこで、取り敢えずポケモンセンターに行くということで三人の話が纏まり、センターへと歩みを進めたところでサトシが急に立ち止まり、後ろを振り返った。

「サトシ、どうしたの？」

ヒカリが尋ねると、急にサトシが向いている先から数匹のベトベターが三人に襲ってきた。ヒカリとノゾミは完全に虚をつかれたが、サトシは冷静に、

「ピカチュウ、十万ボルト！」

ピカチュウはベトベターたちに強烈な電撃を浴びせると、ベトベターたちは一斉に目を回して倒れた。

「べ、ベトベター……どうしてあたしたちを……」

「言ってる場合じゃないみたいだね……」

ヒカリはノゾミの言葉に辺りを見渡すと、なんと大量のベトベターたちがサトシたちを囲んでいるのである。ベトベターたちはじりじりとサトシたちに迫っている。

サトシたちが対抗しようと数個のモンスターボールを構えたところに、高らかな笑い声が辺りに響き渡った。

「あつはっは！ヌオー、マッドショット！」

その掛け声が聞こえる方から相当数の泥が発射されて、幾つかがベトベターに当たり、外れたものもあったが、それでもベトベターたちを怯ませるには十分だった。

「今だ！ゴルダック、アクアジェット！」

ベトベターたちにかんりの素早さを誇る水流が向かってきた。水流はベトベターたちの寸前で止まり、水が弾け飛ぶと中から青い水掻きをもつ額に宝石のようなものを着けたポケモン、あひるポケモン、ゴルダックが現れた。

「ハイドロポンプ！」

ゴルダックは口から強烈な水流をベトベターたちに放射した。ベトベターたちは水流にあたると、たまらずに倒れる者、逃げるものと同様々であった。

今、ベトベターたちは動揺している。サトシはこの機会を逃さなかった。

「ガマゲロゲ、君に決めた！ハイパーボイス！」

サトシが掲げたモンスターボールから出てきたガマゲロゲは口を大きく開けて耳をつんざくような騒音の如き大きな音を辺りに放出した。

その音にヒカリやノゾミ、ポッチャマやゴルダックは耳を塞ぎ、ベトベターたちはたまらずに倒れたものを残して全員逃げ出してしまった。

「ありがとう、ガマゲロゲ、よくやった！」

モンスターボールにガマゲロゲを戻したサトシたちに再び笑い声が響いた。

「あつはつは！流石、マサラタウンのサトシ、俺に勝った男だ！」

「お久しぶりです。マキシさん。いや、マキシマム仮面！」

サトシは声のする方を向いて声の主に語りかけた。すると声の主はまた大きく笑った。

「あつはつは！やはりばれていたか！」

声の主はサトシたちに近づきその姿を表した。歳は四十代前半といったところか、大きい体格、上半身は何も身に付けてはいないが、その筋肉質な体は格闘家を連想させる。ズボンは特注品なのか、きらびやかな装飾がなされていた。頭には白い、ギザギザのついたマスクを被っていた。

シンオウ地方ノモセシティノモセジムリーダー、マキシ。水ポケモンの使い手で彼自身プロレスラー、マキシマム仮面としても一名を馳せている。十年近く長きに愛されているジムリーダーである。サトシは勿論、ヒカリ、ノゾミとも旧知の間柄である。

なお、これは余談だが、彼のファイトマネーはほぼノモセシティやノモセ大湿原の維持費に当てられている。

「いやー！久しぶりだな！サトシくん！」

「こちらこそ、お久しぶりです！」

二人は歩み寄ってがっちりと固い握手をかわした。

「マキシさん、お久し振りです」

「その節はお世話になりました」

ヒカリとノゾミがマキシに丁寧に一礼すると、マキシはニカッと笑って、

「おお、ヒカリくん、ノゾミくんか！いや久しぶり！すっかり綺麗になったなあ！」

「そ、そんな綺麗だなんて……」

マキシの言葉にヒカリは少し照れた。照れているヒカリを尻目にサトシは厳しい顔つきでマキシに現状を尋ねた。

「それでマキシさん、これは一体……ノモセシティに何があったのですか？」

「う、うーん、それがなあ……俺にもよく分からないんだ……今朝早くにベトベターたちが一斉に襲ってきてなあ……何がなんだか……一応、街の人たちはジムやポケモンセンターに避難させてあるんだが……もともとベトベターたちはこのノモセシティの先に生息しているんだが、今まで街に入り込んだことは一回もないんだ。それが何で今になって、しかも、人を襲うだなんて……」

それから暫く四人は無言になってしまった。しかし、臭いに耐えきれなかったため、取り敢えずポケモンセンターへと向かうことにした。

ポケモンセンターについて各々ポケモンたちを回復させている間、サトシはテレビ電話がある方へと向かっていった。

「サトシ、どうしたの？」

「考えても始まらないからさ、オーキド博士に聞いてみるよ」

ヒカリアはああ、と声をあげてノゾミとマキシと一緒にサトシに続いた。

サトシがオーキド研究所の番号を押して数回コールした後に出た人物はオーキドではなかった。

「し、シゲル！」

「やあ、サトシ、どうかなパンタナールは、話、聞かせてくれよ」

シゲルは昨夜徹夜だったのか、髪は少しボサボサで目の下には隈が出来ていた。それでも彼の見えた笑顔は爽やかに見えるところが彼らしい。

「その話はまた今度な。それで、博士は？」

「えっ、……あ、ああ、博士は今、イツシュに行ってるよ。アララギ博士に呼ばれてね。……サトシ、そっちでなんかあったのかい？」

シゲルは一瞬戸惑ったものの、直ぐに返答した。彼はこちらのただならぬ気配を読み取ったらしい、サトシたちは少しの間顔を見合せ、シゲルに今までのことを話した。

シゲルは腕を組んで考える仕草をした後に、まるで警察官が質問するかのよう話した。

「ベトベターたちが、急に現れて人を襲う……なるほど……ノモセシテイの今日の気温と天気は？」

「天気と気温？ああ、晴れているよ、雲一つない。それでもこっちは少し涼しいけど……」

それを聞くとシゲルはふうむと鼻息を少し荒くして、再び腕を組んだ。

「し、シゲル？どうした？」

「ん？……いや、過去にも何回かベトベターたちが街に現れたという話は結構あるんだ。でも、それらは何れも街が汚くなったりとか、じめじめする暑い気候だったりっていうのだったんだけど、今回みたいなケースは特殊だからね……実際にそっちにいかないと、なんとも言えないね……兎に角、今はそのベトベターたちが生息している場所を見に行った方がいいかもしれないよ」

シゲルの言葉が終わると辺りには静けさが生まれた。

しかし、そのうち、シゲルに妙案が浮かんだらしく、サトシに声をかけた。

「そうだ、サトシ、ベトベトンに力を借りたらどうか……」

「ベトベトンに？」

サトシが聞き返すとシゲルは一つ頷いて続けた。

「ベトベトンとベトベターは進化系の同族同士、何か分かるんじゃない？」

ないかな……」

餅は餅屋という言葉があるが、それに近いことであろう。サトシも納得したようであった。

「成る程……よし、分かった！シゲル、ベトベトン送って貰えるかな？」

「勿論だ！おーい、ベトベトン！」

シゲルが呼ぶと暫くしてから、何かが這いずるような音が聞こえてきた。そして、紫色の巨体が画面に見えると、悲鳴とともにシゲルが画面から消えてしまったのだ。

「し、シゲル、大丈夫？」

ヒカリがシゲルに声をかけた。ノゾミやマキシも心配そうな顔をしているが、サトシは苦笑しながら頬を掻いていた。

「あー、分かった、分かったからベトベトン、どいてくれないかい？」

シゲルがそう言うと、紫色の巨体、ベトベトンは素直にどいた。それからシゲルがモニターボールをとりだして、ベトベトンを入れた。

「それじゃ、送るから、サトシも一匹こっちによこしてくれないかい？」

「ああ、分かった！」

そうして、サトシは腰から一つモンスターボールを取り出すと小声で何か言い、モンスターボールがカタツと揺れた。サトシはそのモンスターボールをテレビ電話の下に設置してあるボール置きに置くと、モンスターボールが一瞬消えて、別のモンスターボールがその場に現れた。

サトシはそのモンスターボールを手に取ると、宜しくなと柔らかい笑みでモンスターボールに語りかけた。

「ありがとな、シゲル」

「いやいや、何か分かったら連絡してくれよ。もし必要なら、僕もそっちに行くから」

そう言うシゲルにサトシたちはもう一度、画面越しにお礼をすると、テレビ電話のスイッチを切った。

ポケモンたちが回復したと、ジョーイから言われたサトシたちはジョーイからモンスターボールを受けとると、早速外へ出た。

外は相も変わらず、かなりの異臭を誇っていた。それに辺りにはベトベターたちが這いずり回ったあとが残されており、時折ベトベターの紫色の身体が見えた。

サトシは先程シゲルから転送されたモンスターボールを投げると、中からベトベトンが現れた。

ベトベトンはサトシに会えた嬉しさからか、満面の笑みを浮かべてサトシに走りより、サトシにのし掛かった。

「さ、サトシ！」

「大丈夫かい、サトシくん？」

ノゾミとマキシが心配そうに話しかけるが、ヒカリは暖かい目付きでサトシとベトベトンを見ていた。この光景は見慣れたものである。サトシがオーキド博士に連絡をとると、必ず見るものであった。

「ベトベトン、今日は頼むぜ！」

サトシがベトベトンを撫でながら言うと、ベトベトンは嬉しそうに一鳴きした。

「それで、これからどうする？」

「決まってるだろ、ノモセシティの先に行って原因を突き止める！
良いだろ、皆？」

ノゾミは少し考える仕草をとったが、直ぐに、

「それしかないね……行こう！」

「俺も同行するよ。俺にはこのノモセシティを守る義務がある！」

四人の意見が一致した。四人は互いの顔を見合せて一つ頷くと、ベトベトンを連れてノモセシティの先にあるベトベターたちの生息地へと歩みを進めていった。

悪臭騒動(1) (後書き)

次回予告

あつはつは！今回は俺だあ！マキシマム仮面だあ！宜しくな！

だあー、畜生！あんなに綺麗だったノモセシティが、ノモセシティがあんなことに、……どうして、どうしてこうなったんだあ！必ず原因を突き止めてやる！

さて今回は、ベトベターたちの大量発生の原因を求めて、ベトベターたちの生息地へと訪れた俺たちは、そこであるものを目撃する！

次回、悪臭騒動第二話、是非見てくれよ！俺のプロレスの試合も宜しくな！

おおー！その名の通り、おっそろしい奴だなあ！

次回予告でした……

ベトベトン、実は結構好きなポケモンなんですよね。オーキド博士に何度ものし掛かる描写を見たときに愛着が湧いてしまいました。ゲームでも使っています。中々強いんですよ。

さて、最後になりますが、ご感想宜しくお願い致します！

悪臭騒動(2) (前書き)

悪臭騒動第二話です！

なぜトベターたちがノモセシティに現れ、人々を襲うのか、その理由が明らかになります。

皆様お馴染みのヒールも登場致します。

是非是非ご覧下さい！

悪臭騒動(2)

サトシたちがノモセシティにおけるベトベターたちの大量発生を調べにノモセシティの更に先にあるベトベターたちの生息地に来たとき、彼等にはその理由が一目で理解出来た。

今、彼等が目にしてしているものは慌てふためいて逃げ惑うベトベターやベトベトンたち、そしてそれを追いかけてはベトベターたちを二本のマニピュレーターで捕らえては背中中の格納庫の様な場所に入れている、SF映画にでも出てきそうな二足歩行式のロボットである。成る程、彼等が何故ベトベターたちを捕らえているかは分からないが、ベトベターたちは縄張りを荒らされ、無理矢理にでも仲間が得体の知れないやつに捕らえられていく。そしてその恐怖は今まさに我が身に起ころうとしているのである。これではベトベターたちが人間不振に陥るのも想像にかたくない。かつて自分達の住みかであった海が荒らされ人類に復讐を決行した巨大ドククラゲとメノクラゲたちがいたらしいが、それと似たようなものだろう。しかし、サトシたちだつてただ眺めてはいなかった。

言葉よりも体が動くというのは正にこのことではなかるうか。

「十万ボルト！」

強烈な電撃がマニピュレーターに向けられて放たれると、マニピュレーターが一本破壊されてはベトベターを放した。

「ま、またお前か！」

「いつもいつも、あたしたちの邪魔ばかり！」

ロボットから聞こえてきた声は明らかに男女二組を表していた。

「一体、お前たち何なんだ！何故こんなことを！」

サトシに遅れてきたマキシが尋ねると、ロボットの中から男女が現れていきなり話し出した。

「何だかんだと声がする……」

「ジャイロボールのようにやってきた……」

と、これから長ったらしく、センスや品格の欠片も感じさせないような前口上がたらだと始まるのだが、それを全て書いて、読者の皆様方を不愉快にさせたくもないし、悪戯に文字数を増やすのもどうかと思うので、これはここで割愛させて頂く……

二人の姿を見たサトシとヒカリは大きな溜め息をついた後に険しい顔つきで二人を睨んだ。

「貴様らはヤマンバに」

「コサンジ！」

サトシとヒカリが名前を叫ぶとヤマンバとコサンジは地団駄踏みながら、怒りの顔を見せて返した。

「俺はコサブロウだって言ってるだろ！」

「なんであたしまで間違えられてるのよ！あたしはヤマト！」

怒り狂っている二人を睨み付けながらサトシとヒカリは文句をつけた。

「おい、おまえら、なんのためにこんなことをしてるんだ！」

「あなたたちのせいで、ノモセシティの人達が迷惑してるのよ！」

ヤマトにコサブロウはその文句にニヤニヤ笑いながら返答した。

「別にあたしたち以外の奴等がどうなるうと、関係ないわよ」

「そうだ。俺達はこのベトベターたちから素晴らしい物質を抽出する崇高な使命があるのだよ。他人のことなんか、気にしている余裕はないんだよ！」

「な、なんだとお！」

ゲラゲラ笑う二人にマキシが怒り心頭に返した。マキシの頭には十字状の血管が浮き出ている。

「てなわけで、貴様等はそこで我々の仕事を見ているんだな！」

「バツハツハイ！」

そう言つて二人はロボットのの中に入り込んだ。二人が入り込んで暫くするとロボットは再び動きだし、ベトベターたちを襲い始めた。サトシは拳をきつく握りしめて、

「そうはさせるか！ピカチュウ、十万ボルト！ベトベトン、ヘドロばくだん！」

「ポツチャマ、ハイドロポンプ！」

三体の同時攻撃は見事にロボットの横に命中し、大きな爆発が起きた。ところが、爆煙が晴れたとき、ロボットは何処にも傷は負っていないかった。

「あっはっは！無駄無駄！」

「このロボットはどんな技にも耐えうるように設計されているのだ
！」

ロボットからは高笑いと共に解説が聞こえた。

「くっ、ならば、ピカチュウ、エレキボール、連打！」

ピカチュウはサトシが指差す方向へと黄色に輝く球体を何発も放った。球体は全発ロボットの足の部分へと命中したが、これも徒労に終わった。

「無駄な抵抗はやめてとつと帰ることね、あっはっは！」

ロボットの中からは相変わらず笑い声が聞こえてくる。この声がサトシたちの神経を逆撫でする。

「俺は諦めない、まだ行くぞ！ピカチュウ、ベトベトン！」

「あたしも、ベトベターたちのために、フーディン！チャームアツ
プ！」

「あたしも、あいつら絶対に許さない！トリトドン、レディィー、ゴ
！」

「ぬおお！フローゼル、ゴルダック、行けえい！」

四人から総勢六体ものポケモンが繰り出され、四人は一瞬互いに目を合わせる、ロボットの方へ目を向きなおし、各々のポケモンに指示をした。一斉攻撃である。

しかし、六体もの攻撃もあのロボットには全く効果がないようであった。

それから、四人は出来る限りの攻撃を試みたが、人類の科学には敵わないのか、ロボットが傷一つつくことはなかったのだ。

「くっ、もう手立ては、ないのか……」

ノゾミは下唇を噛みながら呟くとサトシから檄が飛んだ。

「諦めるな！諦めたらそこで終わりだ！先生が言ってた、人間が人間である限り、どこか必ずミスをおかす！そこを見つけたら突破口が見出だせるはずさ！」

「サトシ……そ、そうだね。なんか対策を考えよう……」

「外が駄目なら中から攻撃したらどうかしら？」

ヒカリのこの何気ない疑問がその突破口へと繋がったのだ。

「中、中、……そうだよ、ヒカリ！中から攻撃すればいいんだよ！」

「え、ええっ……」

サトシはヒカリの肩を掴みながら大声で話した。そんなサトシの様

子にヒカリは呆気にとられていた。

「しかし、どうする。中に入るのは容易ではないぞ……」

「大丈夫、当てはあります。ベトベトン……」

サトシはベトベトンの近くで何かを囁いていたが、ヒカリたちには何を言っていたかは聞こえなかった。それでもベトベトンには理解出来たらしく、ベトベトンは強く咆哮した。それからベトベトンは自身の精一杯の速さでロボットのもとまで這いずっていった。

「サトシ、一体何を……」

「まあまあ、いいから見てろって」

サトシはニヤツと笑って返した。それからベトベトンはベトベターたちを襲っているロボットの前まで這いずると、ロボットに数発の毒々しい弾を勢いよく発射した。勿論、ロボットが傷つくことはない。

「何よ、このベトベトン、鬱陶しいわねえ……」

「そつだ、それならこいつも捕まえようぜ」

「そつね、そうしましょう」

マニピュレーターが操作されベトベトンは簡単に捕まってしまう、背中の格納庫の様な場所の中に入れられてしまった。

しかし、この一連の流れがヒカリたちにベトベトンの行動の意味を理解させた。

「そ、そうか！中、中ね……」

「ううむ、成る程、考えたもんだ！」

「さっすが、サトシね！」

ヒカリたちは感心したように言葉を発した。

「そういうことだよ。さあ、俺達も奴等の気を引きますか！ピカチユウ、エレキボール！」

「よっし、いくか！ゴルダック、フローゼル、みずのはどうー！」

「ポッチャマ、ハイドロポンプ！フーデイン、きあいだま！」

「トリトドン、ふぶぎー！」

こういう攻撃が続いて、爆煙が何度も起こってしまうと、いくらゼンサー越しに見ているとは言え、鬱陶しいことこの上ない。事実彼等は少しずつイライラが募っているみたいであった。

「だあー、もう！イライラする！先にあいつらから始末しましょう！」

ヤマトは頭をやたらめったらに掻き乱した。すると、そこには世にも醜怪な形相の女が現れた。それはまるで本物の山姥のように恐ろしく、醜いものであった。コサブロウはそんなヤマトの姿に恐怖すら抱いた。

ヤマトはロボットをサトシたちの方へと向けて、何やら赤いボタン

を押すと、ロボットの両脇から何発かのミサイルが発射された。

「み、ミサイル！」

「う、うそだろ……」

サトシたちは呻いた。しかし、ミサイルは容赦なく彼等を狙っている。

「と、兎に角、今は逃げるんだ！」

マキシの言葉に四人はポケモンをモンスターボールに戻すと反対方向に走り出したのだが、ミサイルと人間では速度が違いすぎる。すぐに追い付かれた。

もう駄目だと思われた間一髪、彼等は各々飛行ポケモンを繰り出してなんとか難を逃れたと思ったのだが、ロボットからは更なるミサイルがサトシたちに向けて発射された。

「あーっはっはっは！もつと逃げる、逃げる！あーっはっはっは！」

ヤマトは声高らかに笑い叫んだ。

「畜生！あいつ、ここまでするのか！」

「でも、今は逃げるしかないわね！」

そう、逃げて逃げて逃げ続けるしか今は出来ない。ロボットからはなおもミサイルが放たれ続けている。

その時、いきなりロボットの動きが停止した。最後に放たれたミサイルが爆発すると辺りにはシーンと静まり返った。それからロボット

トからは煙が出てきて、更には物凄い異臭がロボットから臭ってきた。

サトシたちは飛行ポケモンの上から黙ってその様子を見届けていたが、その内ロボットからは奇怪な音が聞こえてきて、中から顔面蒼白なヤマトとコサブロウが何やら半狂乱に叫びながら飛び出してきた。するとベトベトンに続いて大量のベトベターたちもロボットから出てきた。

「どうやら、成功したみたいね！」

「ああ！」

「よし、行くぞ！」

サトシたちが飛行ポケモンに指示して、その場から逃げ出そうと走り出したヤマトたちの眼前に降り立った。

「お前たち、どこにいくつもりだ！」

ヤマトたちは苦笑いしながら、

「いや、あはは……」

ヤマトたちが振り替えると大量のベトベターたちが物凄い形相でヤマトたちを睨んでいた。

「いや、だってさ……こいつらから、毒ガスを精製して各国に売り出せばかなりの儲けがでるじゃないか。この国は儲かるし、お前たちも潤う、素晴らしいとは思わないか」

追い詰められた者はよく喋る、元々コサブロウという男、気が小さ
いらしく、ペラペラと言わなくてもいいことを話し出した。

「成る程、貴様らは死の商人というわけか……」

「先生に連絡しないと……」

「いや、その前に彼等から罰を受けるさ……」

サトシが呟くと、ベトベトンの号令に大量のベトベターたちはヤマ
トとコサブロウを囲んで持ち上げると、ヤマトたちを何処かに去る
うとしていた。彼等は去り際にサトシたちやベトベトンにお礼を言
うように、一匹ずつ鳴いていった。

「た、助けて……く、臭い、し、死にそうだ……」

「ち、畜生、あんたたち、人間様に逆らうとは、……うっ、……」

ベトベターたちはヤマトたちを連れたまま何処かに去ってしまった。
ベトベターたちが去って辺りが静かになると、マキシが大きく息を
吐いた。

「どうやら、これでこれからベトベターたちがノモセシティに来て
人を襲うこともないわけだ……良かった、本当に良かった……」

「それに奴等にベトベターたちが連れ去られる前に奴等を片付ける
ことが出来た」

マキシとノゾミがホツとしていると、サトシが水を差すように、

「いやあ、作業はまだこれからさ……」

「作業つて？」

「それは、ノモセシティに帰れば分かるよ」

先程までの厳しい顔付きから一変して、暖かい表情をして語るサトシだったが、ヒカリたちには意味が分からなかったのか、三人で顔を見合わせて、首を傾げた。

サトシたちはそれから二言三言話してから、ノモセシティへと帰宅の途についた。

ノモセシティにはもうベトベターたちの姿は影すら見えなかった。代わりに残ったのはベトベターたちが這いずり回った後、所々にあるヘドロ。そして、あたりにたちこめるベトベターたちの臭いであった。

「成る程、作業ね……」

「これを綺麗にしなきゃな！」

「あいつら倒すよりも大仕事かもしれないわ……でも、やらなきゃね！」

サトシとヒカリはヤル気満々であったが、ノゾミはこれからやるであろう作業を想像して少し気が滅入ってしまった。

「さあ、二人とも、もう一踏ん張り、頑張ろうぜ！」

「いやあ、三人ともありがとな！俺も手伝うし、街の皆にも協力してもらおう！これから大掃除の開始といこうか！」

「おー！」

サトシとヒカリは笑顔で拳を大きく掲げた。ノゾミは小さく息を吐いたものの、腕を巻くって気構えは出来ているらしい。

それから、街の人々と全員でノモセシティの清掃活動と相成ったわけであるが、この清掃活動が一息ついたときには、もうすでに月が顔を出している時であった。

悪臭騒動（2）（後書き）

次回予告

今回は私、ハルカが次回予告を勤めます。皆宜しくね！

ああ、久しぶりにサトシとヒカリ、ノゾミに会えるわね。昔のミクリカップを思い出しちゃうかも！なんだか本当に楽しみ！

さて今回は、久しぶりの再会を果たしたサトシたちと私は、暫しの休息をとるためにリゾートエリア、リボンシンジケートへ

次回、舞姫、踊り子、フィデリオ第一話、是非ご覧下さい！

サトシ、女の子と一緒に旅行に行くとき、男の子がすることは一つかも？

さて、悪臭騒動終幕を迎えました。

いつかは登場させようと思っていた二人ですが、案外早く出ましたね。これからまた出るかはまだ決めていないのです。

そして今回は再びリゾートエリアが舞台となります。ミクリカップの面々再び終結です！

最後にご感想宜しくお願い致します！

舞姫、踊り子、フィデリオ（1）（前書き）

舞姫、踊り子、フィデリオ第一話です！

今回の舞台は再びリゾートエリア、リボンシンジケートです！
この話でハルカ初登場、そして踊り子とフィデリオに登場したキャラクターも登場致します！

是非是非ご覧下さい！

舞姫、踊り子、フィデリオ（1）

「あつ、リボンシンジケートが見えてきた、行きましょー！」

「うんー！」

ハルカは少し奥の小高い丘の上に建っている一軒の紫色の屋根の洋服の建物を指差してはしゃぎながら後ろを振り向いた。

ヒカリとノゾミはにこやかに返答した。

バトルゾーンリゾートエリア、シンオウ地方では現在、少しずつ涼しくなってきたが、ここはバトルゾーン北側に位置するハードマウンテンの影響で温暖なここは今日も暖かい、いや、少し暑いくらいである。

「お、おい、荷物は自分で持ってきてくれよ……」

サトシは両腕に三つの鞆を持ちながら、洗面を作ってヒカリたちに話しかけた。三つの鞆は少し重いのか、サトシの手には鞆の背負う部分の痕がくつきりと残っている。

「サトシ、レディに鞆を持って歩けっというの？普通はレディと旅行に来たら男が鞆を持つよ、それがジェントルマンっというものかもー！」

ハルカは腕を腰に当てながらサトシに返答した。

「じ、ジェントルマンっって……ヒカリ、ノゾミも何か言ってくれよー！」

ヒカリとノゾミはクスクス笑いながら、

「うふふ、サトシ、ありがとね！」

「ごめんね、サトシ」

「そ、そんなあ……」

それから、ヒカリたちはリボンシンジケートへと再び歩き出したが、サトシは肩を落としてピカチュウに励まされながら、とぼとぼとヒカリたちについていった。

そもそもどうしてサトシたちがこのリゾートエリアを訪れたのか、と問われると、それはベトベターたちのノモセシティの大量発生の事件でサトシたちが汚れたノモセシティの掃除を手伝い、やっとのことで片がついてポケモンセンターに帰ってきたときのことである。疲れ果てて椅子に横たわっているヒカリの元にジョーイが駆け寄ってきた。

「ヒカリさん、お電話がありましたよ」

「電話、誰からですか？」

ヒカリは起き上がってジョーイに尋ねた。

「ハルカさん、という方からですよ」

「ハルカから……」

ハルカ、サトシたちにとっては懐かしい名前である。

かつてサトシとホウエン、カントーを共に巡り、サトシがシンオウを旅している間も一度だけ、ホウエンリーグチャンピオンマスターミクリ主宰のミクリカップの際に、サトシたちと再開、その時、ヒカリとノゾミとも出会っている。

ホウエンの舞姫と呼ばれる実力派のトップコーディネーターで、その演技は海外のコーディネーターからも賛辞を受けるほど華麗なものであると、某雑誌に記してあった。

さて、話は反れたが、そのハルカからの連絡の旨を受け取ったヒカリは電話コーナーへと行って教えられた場所へとコールした。何処かのポケモンセンターであつたらしく、電話にはジョーイが出てきたが、ヒカリは用件を述べて、暫くするとハルカが電話口に出てきた。

「ハルカ、久しぶり！元気だった？」

「ヒカリ、久しぶりかも！元気よ元気！ヒカリも元気？」

「もっちろん！あたしはいつでも元気よ、大丈夫！」

ヒカリが胸を張って言うつとハルカは笑顔を称えた。そんな会話をしているつと、ヒカリの後ろからひょっこりとサトシとノゾミが姿を表した。

「あつ、サトシとノゾミ、久しぶりかも！」

「やあ、ハルカ、久しぶり！」

「久しぶり、ハルカ」

久しぶりの仲間の再開にサトシとハルカは満面の笑みを浮かべていた。ノゾミもライバルとの会話に顔を綻ばせている。ハルカはほうと息を漏らすと、

「そっか……ヒカリは今サトシと一緒になのね……」

それから少しの間ハルカは黙ってしまったが、その沈黙を破るかの様に痺れを切らしたヒカリが話し掛けた。

「ハルカ、それで、どうしたの？」

ヒカリの言葉にハルカはハツとして慌てながら返した。

「うん、実はね、あたし今ナギサシティにいるの……」

ハルカの言ったナギサシティの言葉にヒカリたちは少し驚きながらも、喜んだ。ナギサシティとはシンオウ地方の東側に位置する港町の事である。ノモセシティからの距離もそうは遠くない。

「えっ、ハルカ、ナギサシティにいるの！じゃあ、会おうよ！あたしハルカに会いたい！」

「う、うん、それでね、ヒカリ……あたし、これからリゾートエリアのリボンシンジケートに行こうと思ってるんだけど、ヒカリもどう？勿論、サトシとノゾミも……」

ヒカリはその誘いに、一瞬考えこんだものの、直ぐに頷いた。

「うん、行くわ、行くわよ、久しぶりにイヴにもミセス・シャーロットにも会いたいし、サトシとノゾミも行くわよね！」

ヒカリは後ろを振り向いて二人に尋ねた。二人も大きく頷いて答えた。

「勿論、俺も久しぶりにリゾートエリアに行きたいぜ！」

「あたしも、賛成だね」

二人の返答にハルカも画面上で大きく微笑んだ。

「じゃあ、皆で一緒に行きましょう！五日後にナギサシティからリゾートエリア行きの船が出るから、四日後にナギサシティのポケモンセンターに合流っていうのはどう？」

「ええ、分かったわ！」

ヒカリは了解とばかりに親指と人差し指で円を作ってウインクした。

「それじゃあ、四日後に、……」

「うん、四日後にね！」

「ハルカ、またな！」

そう言つて、ヒカリとハルカはお互いに電話のスイッチを切った。それから、サトシたちは一晩ポケモンセンターで掃除の疲れを癒した次の日、マキシヤ町の人に旅立ちの挨拶をした。マキシヤたちからはお礼がしたいと言われたが、サトシたちは丁寧に断つて、ノモセ

シティを出発した。

そして、それから三日後、ナギサシティへと到着したサトシたちはポケモンセンターでハルカと合流し、次の日の船に乗ってリゾートエリアへと到着し、今に至る訳である。

リボンシンジケートまでの道中、サトシはふいに立ち止まり、横を向いた。サトシが向いている方向には小さな家が二、三建あるのみである。元々小さな田舎なのでそんなに家があるわけでもなく、小さな家ではあったが結構目立っていた。サトシはその二、三建の家をただただボーッと眺めていた。

「サトシー、何やってるのー！置いていくわよー！」

ハルカに叫ばれてサトシは少し肩をすくませると、呼ばれた方へと顔を向けた。ハルカたちは既にリボンシンジケートの前に立っている。

「ああ、今行く！行くぞ、ピカチュウ！」

サトシはハルカたちに大きく手を振ると、ピカチュウと顔を見合わせて、ハルカたちの元に駆け出した。

サトシたちがリボンシンジケートの大きな門を開けると、受付の側に緩く仕立てた紺色のスーツに赤いリボンを着けたイヴ・アームストロングがにっこり笑って語りかけてきた。

「いらっしゃいませ、ようこそ、リボンシンジケートへ！」

イヴはゆっくりと一礼して、再びサトシたちに微笑みかけた。ヒカ
リはそんなイヴに大きな笑みを称えて、

「イヴ、久しぶり！」

と堪らずにイヴの元に駆け寄って右手を両の手で掴んだ。

「久しぶり、ヒカリ」

イヴは少し頬を赤らませながらも、ヒカリの手を掴んだ。

サトシたちはそんなヒカリとイヴの様子に顔を見合わせて、二人を
暖かい目で見つめていた。

「ハルカさん……」

「イヴ、本当に久しぶりね……私のことも、呼び捨てでハルカでい
いのよ」

「はい、は、ハルカ……」

そんな会話を交わしているハルカとイヴにヒカリたちは少しギョッ
として見た。

「は、ハルカ、前にここに来たことあるの？」

ハルカは最初きよんとしていたものの、直ぐに優しく返答した。

「ええ、もう七年になるわ、ある人に誘われてね」

「へーえ、じゃあ、ここにいる四人は全員以前に此所を訪れている

んだな」

「全員？それじゃあ、サトシも？」

ノゾミの問い掛けにサトシが答える前にイヴが答えた。

「はい、サトシさんには私ども大変お世話になりました……サトシさん、お久しぶりです。その節は本当にありがとうございました」

「おいおい、やめてくれよ、あの時は、君にも世話になった。こっちこそ、ありがとな！」

イヴが頭を下げて礼を述べると、サトシは少し慌てながらも笑いながら返した。

「あの時、何があったの？サトシ、いい加減に話してくれてもいいんじゃない？」

ヒカリは少し渋面を作ってサトシに詰め寄ったが、サトシは苦笑を浮かべて話を反らす。

「そ、そう言えばイヴ、ミセス・シャーロットはいるかい？」

「えっ、はい、オーナーは今支配人室でリヨウスケさんとチトセさんとお話していらっしやいます。ご案内致しますか？」

「あ、ああ、頼むよ……」

「そ、それでは、皆様、ご案内致します」

イヴとサトシはそそくさと支配人室へと歩き出し、ヒカリは未だ納得してはいないような顔をしていたが、二人の後を追ひ、ハルカたちもそれに続いた。

イヴに案内されてリボンシンジケート一階奥に存在する支配人室へと通されたとき、ミセス・シャーロットは支配人室に入って左側にある、ソファアーに腰を掛けてガラス張りのテーブルを挟んで向かい側に座っているノザクラリヨウスケとチトセさんと話し合っていた。扉が開いて入ってきたサトシたちに気付いたミセス・シャーロットたちは満面の笑みを見せると椅子から立ち上がってサトシに近付いた。

「久しぶり、サトシくん……」

「お久しぶりです！リヨウスケさん！」

リヨウスケはチトセさんに支えられながらよろよろとサトシたちの前に出てきた。サトシはそんなリヨウスケとチトセさんを嬉しそうに眺めていたが、ふとリヨウスケがチトセさんに支えられている姿を見て、顔を歪ませた。

「御体、やっぱり駄目なんですね……」

「ん？……あ、ああ、うん、中々ね、うまくはいかないものさ……」

サトシはギュッと拳を握って、

「俺が、……俺がもう少し早く助けに行けたら……こんなことに

は……」

「いや、いや、そうではないよ、サトシくん」

リヨウスケは宥めるようにサトシを見た。その目にはどこか、穏やかな色が見られた。

「君のお陰で、僕たちはあのとき救われた。だから、嘆くのはおよし。あれは、あれは仕様のないことだったんだ。君でなくても誰だって、あれは防ぎようが、なかったんだよ」

「そうです、そうですよ。あたしたちが今こうして、いられるのも、あなたのお陰なんです。あたしたちは皆、あなたに感謝していますよ」

「チトセさん、……あ、ありがとうございます。そう言われると俺、嬉しいです……」

サトシが照れたように頬を染めると、サトシの隣にハルカが出てきて、

「リヨウスケさん、チトセさん、お久しぶりです」

ハルカは二人に向けてぺこりと頭を下げた。

「ああ、ハルカくん、久しぶりだね、何年振りになるか……」

「もう七年になります……」

「そうか……七年か……テレビで君の出ているコンテストを見させ

てもらっているよ、……ハウエンの舞姫、立派なもんだ」

「本当に、あの時も御綺麗でしたけど、更に……可憐になられましたわねえ」

二人に誉められてハルカは自身の髪を撫でた。さらっとした美しい髪である。

「ミセス・シャーロット……ご無沙汰しております」

「ああ、ミス・ハルカ、久しぶりだね。元気そうで何よりだよ。ミス・ヒカリ、ミス・ノゾミもよく来たね、歓迎するよ」

ミセス・シャーロットは三人のコーディネーターに暖かい笑みを見せた。

「またお世話になります。ミセス・シャーロット」

「よろしくお願い致します」

ミセス・シャーロットはそれからイヴに顔を向けて、

「イヴ、早速四人をお部屋に、案内してくれるかい。積もる話はまだあるだろうけど、それは夕食の時にでも話そうじゃないか」

イヴは畏まりました、とサトシたちを案内しようとしたが、そんなイヴにサトシが声をかけた。

「あつ、いえ、俺の分の部屋は必要ありません。俺、今日はリヨウスケさんの家に泊まるつもりですから……リヨウスケさん、いいで

すよね？」

「うん、勿論、構わないよ。いいだろ？」

「ええ、大歓迎ですわ」

しかし、ハルカとノゾミはあまり、そのことを好まないらしい。渋い顔を作ってサトシに戒めた。

「だ、駄目よ、サトシ、……その、夫婦の、その、あれを邪魔しちゃ……」

「あれ？あれってなんだ？」

「も、もう、サトシったら……レディに言わせる気？」

ハルカは顔を真っ赤にさせてそっぽを向く。ノゾミも何度も頷いて同調している。その顔は心なしか、火照っているようにも見えた。

「あつはつは！ハルカくん、ノゾミくん！そんなこと気にしなくてもいいんだよ！サトシくん、君は何も気にしないで、うちにいらっしやい」

「は、はあ……でも、あれってなんのことですか？」

「ん？それはね、君にもいずれ分かるさ。その時が来ればね……」

リヨウスケはニヤニヤしながら、チラッと三人を見たのだが、彼女たちは気がつかなかったらしい。

そんなとき、イヴがこほん、と一つ咳をして、

「あの、兎に角、お部屋までご案内致します」

そう言つて、イヴは扉を開けて、ヒカリたちもイヴに続いて部屋を出ていき、支配人室にはサトシとリヨウスケとチトセさん、ミセス・シャーロットが残つた。

「それじゃあ、サトシくん、僕たちも行きますか」

「はい！宜しくお願いします！」

「うん、それじゃあ、ミセス・シャーロット、また……先生に頼まれた件は如何致しますか？」

「ああ、あれはこつちもいくつか調べてみるよ。ミスターも少し調べてみてくれるかい？」

「畏まりました。それでは、失礼致します」

リヨウスケはミセス・シャーロットに小さくお辞儀をした後に部屋を出た。サトシはチトセさんと顔を見合わせ、慌てて挨拶をするとリヨウスケに続いて部屋を出ていった。

ボタンという音と共にシーンと静まり返つた支配人室で、ミセス・シャーロットはフツと微笑を称えて、

「今日は、また楽しい夕食になりそうだね……」

と呟いて、支配人室奥にある自分のデスクへと行き、あと少し残っている仕事に再び手をつけ始めた。

舞姫、踊り子、フィデリオ（1）（後書き）

次回予告！

今回はあかし、ヒカリが次回予告を勤めます！うん、大丈夫！

ねえ、サトシ、サトシとイヴはどういう関係なの……あの時って一体何があったの？どうしてあかしには教えてくれないの？ねえ……
今回はサトシとイヴの関係、そして、それに関連するかつてシンオウ地方で起きたとある事件の内容がミセス・シャーロット、チトセさんの口から語られる。

次回、舞姫、踊り子、フィデリオ第二話、是非ご覧下さい！

あかし、あれからのサトシのこと、何にも……

さて、舞姫、踊り子、フィデリオ第一話でした！

ハルカがこの物語初登場！ハルカはかつてシンオウ地方を旅したさいにこのリゾートエリアを訪れたという設定です。

今回は女子たちが中心となります。勿論、サトシも出ますが……

最後にご感想宜しくお願い致します！

舞姫、踊り子、フィデリオ(2) (前書き)

舞姫、踊り子、フィデリオ(2)です！

今回、今まで何回か描写してきたサトシとイヴ、リボンシンジケ―トとの関係が明らかになります。

それに関わる事件も少し述べられています。

是非是非ご覧ください！宜しくお願い致します！

舞姫、踊り子、フィデリオ（2）

リヨウスケが気が付くと、彼は辺りがすべて灰色の、四角い箱の中にいた。少し狂気染みたその箱の中にとくと、気でも狂ってしまふいそふな感覚に彼は囚われた。

目の前にある少し小高い壇上を見上げると、黒いマントの様なものを羽織った男達が三人、血走った赤い目をギラギラと、何やら口汚く、此方を見据えて罵っている。

頭が痛い。ガンガンと頭のしんを金槌で打たれているようだ……段々と目も霞んでくる。熱があるのではないか……

暫くボヤーツとしていると、一回強めにハンマーを叩く音が聞こえて、

「……、被告、ウタヘイ、……リヨウ……ラチトセ、以上三名を死刑に……」

死刑……この言葉が嫌に脳内に響き渡り、後ろから割れんばかりの拍手が巻き起こった。

それから一瞬、静まりかえって、後ろから誰かがリヨウスケの背中を強く押す。逆らえずに、彼は押されるがまま歩かされる。

体がふらふらする。駄目だ、うまく歩けない……

リヨウスケは少し歩いたところで、足が纏れてその場に倒れ込んだ。

すると、突然、彼は横つ腹に焼けつくような激痛が走るのを感じた。その度に、ゲシツ、ゲシツ、と鈍い音が聞こえてくる。

彼はまた激しい目眩に襲われ、そのまま昏倒してしまった。
薄れ行く意識の中で彼は、誰かが、自分のことを呼んでいるよう
な気がした……

「あなた、あなた！」

リョウスケは静かに目を開いて、やや大袈裟にフウツと息を吐
いた。

「また、あの時のことを、夢を見たんですね……とても魔されてい
ましたわ」

「あ、うん……」

「ひどい汗……今拭きますからね……」

チトセはリョウスケのパジャマを脱がせると、予め用意してあつ
たであろうタオルで、上半身が露になったリョウスケの背中を拭き
始めた。

「あなた……」

チトセはリョウスケの背中に顔を埋めて、

「大丈夫ですよ。あなたには、あたしがついていきます。だから、二
人で、乗り越えていきましょう……あたしたちは、夫婦なんですか
ら……」

「チトセ、……ありがとう……」

草木も眠る丑三つ時、ぼんやりとした灯りの下で、二人はひっそりと寄り添いあっていた。

次の日、リゾートエリアは天候に恵まれた。深く、それでいてどこか淡い群青色の中に、所々真つ白な雲が漂い、降り注ぐ金色の光線が心地好かった。

時刻は昼をとうに過ぎていて、ヒカリたちは支配人室で女子だけのお茶と、自家製のケーキを楽しんでいる。

「そしたら、サトシ、いきなりリザードンから飛び降りたのよ」

「サトシ、……相変わらず、無茶、してるのねえ……」

ハルカの言葉が所々途切れるのは、口一杯に頬張っているケーキのせいであろう。

「まあ、でも、無茶するのは人の為なんだから、サトシの場合はポケモンの為、かな？あんまりとやかく言わない方がいいんじゃない？」

ノゾミの言葉にヒカリは眉を寄せ、

「嫌、嫌よ。あたし、サトシが傷付くのは、見たくない……」

「……そう、だね……」

それから、暫く辺りはシーンと静まりかえっていたのだが、ミセ

ス・シャーロットふっ、とヒカリに声をかけた。

「ミス・ヒカリは、ミスタ・サトシをどう思っているんだい？」

「えっ……どう、と言われましても……」

「ヒカリさんにとって、サトシくんはどういう存在なの？」

「サトシがどういう存在……そうですね、……サトシはとっても大切な人、ですよ」

「大切な、人……」

ヒカリは頬を染めて、まるで子どもの様な屈託のない笑みを見せながら、

「サトシがいたから、今のあたしが、あるんですよ……」

静かに語ってから、ヒカリは紅茶の入ったカップに手をつけた。

「分かるわ。その気持ち……」

「ハルカも？」

「私も、勿論いろんな人の助けもあったけど、あの時にサトシと出逢わなかったなら、あたしは今、ここにはいないかも……」

ミセス・シャーロットはハルカの言葉にふふん、と鼻をならして、

「踊り子と舞姫の誕生の裏にはミスタ・サトシがいた。成る程、ミ

スタも中々すみにおけないじゃないか」

「私達夫婦にもサトシくんは特別な人ですから……御二人の気持ち、分かる気も致しますわ」

「そりゃあ、あたし達も同義さ。ねえ、イヴ」

「えっ、……はい、そうですね……」

イヴは完全に聞き手となっていたのであろう、ミセス・シャーロットからの問い掛けに一瞬詰まってから返答した。

「あの……聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「ずっと、気になっていたんですけど、サトシとイヴって、どんな関係なんですか？あの時って、一体何があったんですか？」

ミセス・シャーロットはイヴに顔を向けて、

「……イヴ、教えてあげなかったのかい？」

「は、はい、中々、機会が得なくて……」

「サトシにも何度も聞いたんですけど、教えてくれなくて」

「ああ、成る程ね。どうかな、ミセス、ミス・ヒカリに話してもいいかね」

「勿論、構いません。話してあげて下さい」

「分かった。それじゃあ話そう。ミス・ヒカリ、ミスタ・サトシが話さなかったのは、此所にいるミセス・チトセに気がつかったからだよ。まあ、陰惨な話だから、嫌だったのかもしれないけどさ……」

「陰惨な、話……」

ヒカリはチトセの顔をまじまじと見つめた。その目には、淡い涙が滲んでいた。

チトセはそれに気付くと、慌ててハンケチを取り出して涙を拭いた。

「あなた達は、四年前にシンオウ地方で起きた、トバリシティで起きた事件を覚えているかな？」

「トバリシティ……あっ！」

ノゾミが声を張り上げると、彼女は目を大きく見開いて、ミセス・シャーロットとチトセの顔を交互に見つめた。

ヒカリとハルカは思い出せないらしい、互いに顔を見あって首を傾げている。

「ノゾミ、四年前に何かあったっけ？」

「ヒカリ、覚えてない？あたし達は海外にいたけど、テレビでやってたじゃないか、地下法廷事件だよ」

「地下法廷事件……あっ！」

暫く考えてから、ヒカリも声を張り上げた。

「思い出した？」

「出した。思い出した……」

四年前、海外のコンテストに参加していたヒカリ達であったが、かなり衝撃的な事件であったため、その事件は海外でも大きく報道されていた。

その当時、テレビで聞いただけのヒカリとノゾミであったが、あまりの内容に吐き気がしたのを今でも思い出される。

地下法廷事件　この名だけで思い出される方もいるだろうか。

この事件ほど、一世を震撼させたものはないだろう。

今から四年前、トバリシティでも一際目立つ灰色のビル、かつてはエネルギー開発事業団という会社があった、このビルの地下室では、血みどろの、それこそ身の毛のよだつ様な行いが行われていた。裁判である。

それも、只の裁判ではなく、殺人裁判である。彼等に逆らうような人達を拉致して適当な罪に伏して、死刑にするのだ。そして、その死体は屑のようにごみ捨て場に捨てられていた。

その年の十月十三日金曜日、この日彼等は三人の男女を裁判にかけていた。ところが、その三人を執行室へと連行する途中で何者かの襲撃にあい、見事三人は救い出されてしまったのだ。

そこから、この陰惨な恐ろしい事件の事が露見したのだが、更には人々を恐怖に貶めたのが、ビルに保存されていたフィルムである。そのフィルムには死刑に処された人間が死ぬまでの映像を記録したもので、首をくくられて死ぬまでが映し出されていた。これが世に言う地下法廷事件である。

「サトシは、……サトシは地下法廷事件に関係が……」

ヒカリは顔を青ざめて、少し震えている。

「ああ、あった、あったとも、ミスタ・サトシは此処にいるイヴと共に三人を救ったんだよ」

「それじゃあ、三人を助け出した襲撃者って……サトシと、イヴ？」

三人が一斉にイヴの顔を見たために、イヴは顔を真っ赤にして小さくなっていた。

「もっと言おう、その日、裁判にかけられていた三人は、此処にいるミセス・チトセと夫のミスタ・リヨウスケ、そして、……ミスタ・ヘイハチロウなんだよ」

「えっ、……じ、じゃあ、リヨウスケさんがあんな身体になったのって」

「ええ、あの時に受けた怪我がもとで、……」

チトセは顔を俯かせて、呟くように小さく返答した。その顔には明らかにやつれ憔悴しているのがヒカリたちには、ありありと見えた。

サトシは辺りに木々が立ち込める森の中で、野生のロゼリアたちと戯れていた。陽射しでも気になるのか、今のサトシは赤を基調とした、前面にモンスターボールを模した模様が描かれているキャップを被っている。

少し離れたところでは、ピカチュウが地べたに座って、ヒカリのミミロップから毛繕いを受けていた。

サトシは屈んで順繰りにロゼリアたちを撫でていたが、ふと、頭を上げると、前方の切り株に腰を下ろしているリョウスケが目に入ってきた。彼もサトシと同じで、灰色の、耳当てがリボンで頭頂部に留められたキャップを被っていた。その隣にはロズレイドのマリーがすやすやと、リョウスケにもたれ掛かりながら、幸せそうに寝入っていた。

サトシはロゼリアたちに一言言って、切り株に近寄って、腰から一つモンスターボールを手にとると、

「どうですか、リョウスケさん……久しぶりに、やりませんか」

「今の、私には、それでも重い位だよ」

リョウスケは苦笑を洩らしていた。

「当時、家の人は先生と一緒に、あの組織をシンオウ地方からどうにか追い出そうと、捜査をしていました。その矢先に、私達は……」

「警察に知らせたけどね、単なる蒸発としてしか見てくれなかった、捜査なんてろくにしてくれなかったね。そこで、イヴを通じて、チャンピオンに勝利したばかりの、ミスタ・サトシに協力を煽ったというわけだよ」

サトシの名にヒカリが少し反応したが、それでも三人は一言も口を利かないで、聞き入っていた。誰もかける言葉を思い付かないのである。

「ミスタ・サトシとイヴのお陰で、三人とも救われた。……でも、ミスタ・リヨウスケは怪我が元で身体が不自由になつてね、医者の話だと、もう治ることは、ない……」

「……ごめんなさい……」

ヒカリは体をチトセへと向けて、顔を俯かせて呟いた。

「あたしが、……あたしが、聞かなかつたら、そんな、そんな話、思い出さずにすんだのに……あたし、あたし、サトシがあたしに言えない秘密を持っているのが、嫌で、あれからのサトシのことあたしは何も知らないって思うと、胸がギュツて苦しくなつて……それで、あたし、あたし……」

「いいんです、いいんですよ、ヒカリさん。確かに、この話は本当に嫌な話です。でも、いつかは誰かに話さなければならぬ時が、人にはくるんです……それに、……大切な人が自分に言えない秘密を持っているのは、本当に辛いことですね。私も貴方の気持ち、分かります……ですから、ヒカリさん、御自分を責めないで」

チトセはヒカリを宥めるように見た。その眼には、何処か母のような穏やかな色が見えた。

「ミス・ヒカリの気持ちも分からないではないさ。でもね、真実は隠さなければならぬこともあれば、明かさなければならぬ時も

ある。貴方達は既に介入しているのだから……」

「ど、どういうことですか、それは……ミセス・シャーロット」

「ふふん、言った通りの意味さ。ミスタ・サトシはあの事件以前から彼等の計画を阻止している。彼等にとっては邪魔な存在さ。そして、貴方達はミスタ・サトシと関係がある。それに女性だ。ミスタ・サトシと同様に貴方達も彼等に狙われる危険がある。何時の時代も、男を黙らせるのに、女を使うのは悪党のやることさね」

ミセス・シャーロットは如何にも冷静で、少し温くなった紅茶に手をつけているが、三人は三人とも顔を見合わせた。その顔には明らかに不安の色が見られる。

そんな時、支配人室のドアがコンコンとなり、ミセス・シャーロットが返事をする、若いボーイが入ってきた。

「失礼致します。オーナー、宜しいでしょうか」

「ああ、構わないよ、どうかしたのかい？」

「はあ、……実は……」

「なんだい。勿体付けないで、早くお言い」

「分かりました……オーナー、今、ニュースで、シンオウ出身のトップコーディネーターが、何者かに撃たれた、と……」

「な、なんだって！」

彼の一言に、この支配人室でどよめきが起こった。三人は目を大

大きく見開いて、ミセス・シャーロットの顔をじっと見つめ、イヴがポケギアのラジオを入れると、少し洪めの男性の声が出てきた。

「……報です。先程コトブキシティで行われたポケモンコンテストにおいて、優勝者であるトップコーディネーターウララさん、十八歳が何者かに狙撃された模様、ウララさんは現在、シンオウ大学病院へと搬送され、未だ意識不明の模様。なお、犯人は逮捕されておらず、コトブキシ南警察署では、現在、捜査中とのことです。……」

「ウララが、ウララが撃たれた……」

三人、特にヒカリは信じられないという顔付きで同じことを呟いていた。

ウララとは、ヒカリとノゾミは八年もの付き合いがある、トップコーディネーターである。少し高飛車で、時折マスコミから叩かれることもあるが、実は無類の努力家であることもヒカリとノゾミは知っている。彼女たちは互いが互いを高めあう仲なのである。

「何で、何でウララが……」

「ヒカリさん、落ち着いて、皆さんも落ち着いて下さい。直ぐに家の人とサトシさんが帰ってきます。それから、皆で考えましょう」

「イヴ、ミスタ・ヘイハチロウに連絡をとってくれるかい。それと、シンオウ南警察署のサガラ警部に連絡をとって話を聞いとくれ」

「畏まりました、オーナー」

イヴは半ば小走りに支配人室を出ていくと、入れ違いにサトシとリョウスケが入ってきた。

「皆、今帰ったぜ！」

「只今、戻りました」

「……あなた……」

ところが、支配人室では今、重い空気が漂っていて彼等の帰還を祝福する雰囲気にはなかった。二人は流石にこの部屋に流れる妙な気配を悟ったのか、

「どうしたんだ。皆……ヒカリ、どうしたんだよ、泣いてるじゃないか！」

「どうしたんだ。何かあったのかい」

ヒカリは突然、ワツと泣き出して、顔を手で覆った。ハルカとノゾミはそんなヒカリを慰めるように、背中を擦ったり、言葉をかけたりしている。

サトシとリョウスケは何が何だか分からなくなってしまい、今、目の前で起きている事をただただ見ることしか出来なかった。

舞姫、踊り子、フィデリオ(2) (後書き)

次回予告！

今回は私、ウタヘイ八チロウが務めさせて貰うよ。皆さん、どうぞ宜しく。

久しぶりのシンオウ地方だ、ああ、こっちはもう少しずつ寒くなつていくんだな。……おつといけない、俺は調べものをしにコトブキシテイに来たんだった。ん？コンテストか、久しぶりに見に行くかな……

さて、今回は、シンオウ地方コトブキシテイを訪れた私ウタヘイ八チロウはポケモンコンテストコトブキ大会を見物中に事件に遭遇する。

次回、夢の中の男第一話、是非ご覧ください！

俺の目の前で人が撃たれるとは……

今回、イヴとの会話にあつたサトシとイヴ、リボンシンジケートとの関係に焦点を合わせてみました！
地下法廷事件はいつか、詳しく書こうかなと思っています。いつかはまだ決めていないのですが……

今回はサトシたちは登場致しません。ウタ先生の話となります(実はそれだけではないのですが……)
事件の発端の出来事です！

是非是非ご覧下さい！

最後にご感想宜しくお願い致します！お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2210y/>

可笑しな二人

2012年1月15日02時46分発行